

天正十八年庚寅正月朔日、以在京師之故詣北野天神、祈
國家安全七福即生七難即滅、神拜事終、而退出者也、

627 「義久公御譜中」

全年九月、松齡公歸自伏見、人質番組事、
全年冬、高麗渡海被仰渡、
全年十月、貫明公如名護屋、

626 自天正十八年

十八年、小田原陣、

十九年正月、貫明公御下向、

後 編 舊 記 雜 錄 卷二十五	義久公	天正十八年
	義弘公	
	久保公	

(表紙)

628 『權山紹劔日記』

今日申時、殿下參内、行列華美、非所言語之可述、
申下刻還御云云、
天正十八年正月六日、辭京都下大坂矣、

一天正十八庚寅、爲軍役之、國中有力成者者、德役を
懸候而銀錢を集め、田町ニ付出物出す事際限無盡也、
いか様ニ仕候而も、國を取留候ハてハとして肝要事也、
京都方武庫様下向之由者、此中 太閤様被仰出候御意
趣ニ、世ニ人と成て名を殘す事肝要也、我日本を打隨
て、今無思事ニ似たり、乍去高麗を打取て彼國之主し
たる者を押取て、日本之主之可爲臣と思召也、此等之
儀難澁之輩有者、則扱ニ可被食与有ける間、誰をも是
非言ニ不及、成不成打立より外なしとて、各其支度也、
就夫、先肥前名護屋と云る所を御本陳ニ而 太閤様御
座する、其外諸軍勢皆と渡海可有と也、如此儀いか、
ニ候半哉、薩州國中之者共、分別之可及ニ不有事ニ成
と、唯先年薩摩を御指置候之事後悔ニ思召候而、猶や
何共御扱候すらんたと申計也、

一天正十八年、相模國北条氏政之一門、いまた將軍之御旗下に入不故、將軍様三軍を引卒相模之國を進發、其時又一郎久保様雖爲御少年、勇猛之御志厚によつて、將軍之御太刀之役を預り玉ひ、氏政の居城相州之小田原江赴玉ふ、其刻福島備前守殿彦左衛門事、自義弘様被食寄御説有ければ、又一郎殿今度之御出陣、御若輩ニ而始ての御事なれば、御念遣ニ思食間、別而入念御奉公可仕由被仰付、御供仕候、然れば將軍様も諸大名も、上下駿河富士川の邊に御着玉ふと云へとも、其比大雨降下、富士川以外に水増り、大石水底を流る、音震働して可渡も見えさりけり、然處ニ久保様將軍之御前ニ御出御申有けるハ、富士川の瀬ふミ先陣仕由有御披露て、則御馬に被食川中に御打入玉へハ、御供之軍兵我前と進ともをよきへす見へにけり、元より被食たる御馬は、將軍様一之御秘藏にて、無二名馬なるを、京都御討立之前の御拜領被成たる馬なり、無難一文字にかけ渡し向之岸に着給ふ、彦左衛門事不離御馬、陸立として先陣仕こそ、自分なからも不思議ニ存申候、然は次日之辰刻に將軍川を越玉へは、諸軍

兵も渡なり、久保様御若輩ニ而富士川の御先陣、

將軍様感玉ふこと不斜、御名誉拳ニ天下玉ふなり、自夫次第ニ押寄玉へは、無程伊豆之箱根を討越相模國に着玉ひ、各陣をそとり玉ふ、久保様も箱根坂の下なる湯之本ニ御陣を張玉ひ、北条を攻玉ふ、然れば久保様御心猛き御主人なれば、於戰場敵の矢面ニ進出させ玉ふも、何時も押上奉り、各御前ニ塞り申候、矢軍互ニ始る時、着たる鎧を射られ手負けければ、忝も自久保様黒糸威の鎧一領・筋甲一刎拜領仕候、御在陣の間、方々の軍あつて、各武邊手柄の儀無比類ことなり、彦左衛門も敵三人討取て御目ニ掛申候、無程北条殿を食滅し、將軍御解陣を成玉ふ、又一様も無難伏見江御歸館なり、

630 「國老記」

一天正十八年、義弘公自飯野栗野江御移、御在城御家

川上四郎兵衛

有川雅樂入道

上井次郎左衛門

御使衆

新納(長住)旅庵入道

宮原伊賀

五代右京(友麿)

631 今度又一郎關東出陣ニ付、供可被申候、俄之儀雖可爲迷

惑候、同心肝要候、此刻忠節不可有忘脚候、猶申合高城

左京亮候、恐々謹言、

「天平十八年」
正月八日

佐多宮内少輔殿(忠増)

義弘(花押)

632 「義久公譜中」

(本文ハ六二七号記事ト同文ニツキ省略ス)

633 「全」

一十八年、就坂東逆徒征伐、關西諸候悉以上洛也、以故

又一郎久保主發於領國、三月廿四日上着、同廿八日、

發於京師赴於東國、僅拾五騎、歩卒已下共四百五十人

也、龍伯往三條橋口見其行列也、

634 (本文ハ六五一号記事ト同文ニツキ省略ス)

635 「北郷忠虎譜中」

同十七年己丑春、搜得宜爲大佛殿巨柱之數圍之一大杉於
末吉城下、奉獻之、

同年己丑十月、忠虎上洛、賀新年獻御太刀・馬代于
下秀吉公、故賜御朱印、有正文、左記之、

636 爲年頭之祝儀、太刀一腰・馬代銀子三枚到來、悅思食候、

猶石田治部少輔可申候也、

正月十四日 ○ 「朱印」

北郷讚岐守とのへ(忠虎)

(上書)
北郷讚岐守とのへ

637 「義久公御譜中」

「正文在國分遠壽寺」

當春之慶賀珍重々々、更不可有休期候、弥被任御意、可
爲國家安全候、仍雖輕塵之至候、扇十本進之候、誠表祝

儀計候、恐々謹言、

正月十三日

龍伯老(義)

近衛前久(花押)

638

乍重言、其許よりの乗馬之儀、梅北宮内左衛門尉殿

へ御乗せ可被成のよし、飯野より御意にて、爲御存

知候、片時も御油断あるましく候、恐く、

就關東立之儀、從其許之出馬之事、梅北宮内左衛門尉殿

へ御乗可被成之由、飯野より御意にて候、此等之趣、梅

宮へ御熟談可然候、爰許方も彼方へ申理へく候、又一

郎殿様之御打立之日限、今月廿七日ニ相定候、御油断有

ましく候、爲御存知候、恐く謹言、

「朱カキ」
「天正十八年」

正月拾七日

平左將「平田左近將監」
歳宗(花押)

町羽介「町田出羽介」
久倍(花押)

川上大炊助殿(志)

町田右衛門佑殿

御宿所

「久保公御譜中、正文在鹿屋衆上浦勤左衛門トアリ」

639

一大關小田原征伐之時、

久保公天正十八年庚寅正月廿

七日、栗野御首途、日州濱浦ヨリ海上不順ニテ、二月
廿二日、大坂御着船ト云々、

640

「池田貞安覚書」

關東之小田原へ久保様御出陣之時分も、木村主殿佑殿・

親六左衛門相役ニテ、御馬之別當被仰付、御供申候事、

641

「義久公御譜中」

天正十八年二月八日、殿下秀吉公發於大坂赴於京師矣、

龍伯往于京橋口、見于殿下也、

天正十八年庚寅二月吉日、詣住吉法樂、

「在御文書方」

千とせふる松の葉分のかすむ日や

空も春たつけしきなるらん

「全上」

龍伯

難波の梅一見の折節、是を書付けて置、

ふる跡にあらぬは梅のわか枝哉

龍伯

642

「義弘御譜中」

「正文在加治木」

猶と申候、夫丸五十人程つれ候、内卅人計歸り候、

上馬も一ツハ歸り候、爰許之様躰、一昨日有河阿波

路守殿御出候て被聞候条、披路申候、新キ京都説候

ハ、追而可上申候、以上、

如仰、一昨日三宮内下着に候、自小河傳言分者、此度関

東立ニハ、九州衆ハ京都御留主番ニ相定候、さりながら

若役ニのそミ候ハ、京都時儀次第ニ候する、菟角かる

くと上洛候様にと被承候間、自跡可罷立人数もさし被

とめ候、隨而京都先勢自跡月打立に而候、一國く分者、

五三日つ、にて、次第くニ打立之由申され候、御出馬

事、三月一日と候キ、さりながら三月廿比にも候するか

と申せつ、是有様ニ被申候、巨細者御使面談なされ候間、

不能重筆候、恐々謹言、

「朱カキ」

「天正十八年」二月十五日 能眞(花押)

上井入道殿

御返報

643 「在案文清水大明寺」 「写在御文庫廿二番箱六卷中」

來緘披閱、殊其地土産種々早、所牢見珍重、誠凌遼遠之

波濤懇志之段、欣悅不斜、抑日域事、至八荒之諸島無不

属本意者、三韓頃納悉欲之条、許容之儀涉思惟候、所詮

不經歲月而令渡海、可振威風於大明之念歟、豈空乎、厥

時續船尾被添干氏者、自他之覚最也、尙具天龍桃庵東堂

・嶋津義久可演説、仍恐々不宣、

天正十八年仲春廿八日 関白

(尚書)
琉球王

644 「義久公御譜中」

右殿下秀吉公有報琉球國王之書、其案記左、

645 「義久公御案文」

一 厥后東國表之立柄、如何聞得候哉、無心元存計候、

一 屋形作談合之儀、各召寄、數日入念候、先々出物之勘

定無緩申付候、次第ニ可申登候、將又圖書頭上洛之事、

式月者必可爲打立候、

一 関東立之事、屋形作析ニ差合、一圓難成躰候、さ候て

茂可被停止子細にて者無之、候之間、色々衆談半候、

就之も東表之注進早速承度候、

一 久保二人上洛之儀、當春ニハ迎罷成間敷候、其故ハ屋
形作析并東國立之実否も未相知候之間、彼定難閑事ニ

候、必定ハ今月ニ可指延欵与存候、何共心遣候、其許
内外之沙汰聞食、償早々可承候、先々有之佩申候、

一旧多海上之寒風身ニ入故候哉、從中途虫氣出合、于今
散々式候、就夫路次も不容易、清水へ五日致逗留、去
月十四日漸歸着候、種々養性仕候へ共、未木腹迷惑之
至候、京都出合之儀モ駈申究人無之様候、其故ハ三清
風氣病不定之躰候、諸篇氣遣迄候、隨而生糸五斤進之
候、

〔天正十九年潤正月〕 Δ

〔▽△ノ部分ハ義久譜ニヨリ補充ス、底本ニハ「天正十八年ナルヘシ」注アリ〕

〔久保公御譜中〕

北條左京大夫氏政・其子氏直分注左ノ如シ

大関記曰、平相國之八男助盛末裔伊勢新九郎、是其元

祖也、新九郎於備中國雖爲本知三百貫領主、有思唯而

賣彼地於同姓富家、率武略達士三十餘人、康正三年長即

主今川氏家臣、時長錄二年補伊豆州韭山城主、翌年退

治豆州大敵一國已平均焉、入道稱早雲、長子氏綱、其
子氏康、其子氏政、其子氏直等也、又按畠山記曰、駿

河國高國寺城主伊勢新九郎盛時、後改長氏、入道後稱
早雲寺宗瑞、是京都之伊勢守貞國外甥也、彼之先祖伊

勢肥前守盛經者、尊氏卿天下草創之時、於手越川原遂
戰死、京都公方供奉士也、盛時爲今出川殿供奉在于伊
勢國之際、聞東國亂逆之故、急馳下彼地、駿河國主今
川義忠者姉婿也、盛時未到駿河以前已遂戰死、其子氏
親七歲而未知諸事、故一族家臣任雅意諍權威迄合戰、

以盛時計竄于氏親、既駿州屬無爲、由是所附與高國寺
城與富士郡新九郎盛時、又義教卿三男政知建立御所於
伊豆州堀越居焉、仍稱堀越殿、有二人之男子、二男當
腹故、夫婦共欲立之於家督、一男茶茶丸恨之、先殺繼
母後攻父政知、政知不得逃去而自殺矣、二男逃于駿河、
盛時援于二男向于伊豆、而討殺茶茶丸云云、二說未知
孰是、〔以上分注也〕

漸從坂東八州於旗下、誇武威專私智、上忘仰 帝皇而絕
述職礼、且復蔑如 將軍而無出頭企、是以 秀吉公有東
征催、予亦有可從大駕之命、仍天正十八年庚寅正月廿七
日、首途於隅州栗野到於日州濱浦待海潮穩、而後解纜、
雖曰上著之欲疾、只有逆風更無順風、寢二月廿二日、著
攝州大坂岸、同廿四日、遂上京、其翌廿五日、扣石田治

部少輔三成之門戶達上京故、所以歸宿也、

今度久保從 殿下秀吉公大駕依赴關東之故、石田治部少

輔三成大旗十二本・乘馬壹匹稱破舟、所附與于久保者、懇志

至也、

天正十八年二月廿八日、先于 殿下秀吉公、午時殿下久保進

發於京都赴向於東國、陪從于我者十五騎之中、北郷宗次

郎三久・樺山權左衛門尉久高・佐多越後守忠增・伊勢兵

部少輔貞昌・五代右京亮友慶・同子勝左衛門友泰・平山

作右衛門尉忠續・曾木五兵衛尉重松源六歌・福島半助忠辰・木

村主殿佑・川野玄番允通親等也、以下不遑記之、騎步共

僅率四百五十人、以寡兵列大軍者己之不快心、而匪啻

法印龍伯翁・嚴親義弘主共以在洛、且國中貴族諸將各為

質在京都・大坂、故莫如之何、所以忍慙深恨也、今日雖

雨雪剛風、而往于江州草津宿焉、路程八里也、久保之後

石田治部少輔三成之先手七十騎、三成後百五十騎、其次

淺野彈正少弼長政騎步二千五百餘人、石川出雲守・早川

主馬首・岡本下野守・溝口伯耆守・増田右衛門尉長盛、

各率或千人或五百人而進發焉、

同廿九日、卯時發草津、未時到弓場宿焉、路程八里、
同晦日、卯時發弓場越摺針峠、經番馬・醒井宿、申時到

江州栢原宿焉、路程八里、石田治部少輔贈酒肴於我矣、

三月朔日、卯時發栢原過青野原山中宿、未時到濃州洲俣

宿焉、路程八里、同二日者逗留于當宿也、

同三日、丑時發於洲俣、渡五道橋・六道橋・木曾川共三

所舟橋、到於尾州井口陣于此焉、路程六里、

同四日、去井口陣日下部、路程三町許、

同五日、 殿下秀吉公著御于尾州清須、次序、先黃母衣ホカ

二十二騎、次金旗十本、次吹貫旗百五十本、次小旗衆多

不知其數、次駄金馬十四每壹匹三百枚、次金錢ヒツ五緡使五人掛頸、

每人 次普請具持三十人、次長刀三十柄、鞘金丸貫、次鍵

三百本、鞘虎皮、次鷹三十二居、次馬十匹、鞘梨地也、馬衣唐織、

次刀六十、鞘、駕輿二丁、次 秀吉公騎馬、蓋南蠻傘、

扈從騎步不知幾百千也、

同六日、留滯于此地之故、登 殿下本營、所以遂拜謁也、

同九日、卯時發日下部、為 秀吉公供奉於熱田明神為拜

謁、則有可進前陣之命、仍隨其旨伏拜于蓬萊寺藥師、過

鳴海・知鯉鮒兩宿見八橋澤於弓手、過矢矯宿矧、則有大川

稱矢矯川、設長橋渡彼川、酉時到三州岡崎陣焉、路程十

一里也、今日見 秀吉公支度、著甲冑帶四尺計太刀、以
腕貫大繩附惣金大箋於腰、頂網代笠異形也、

同十日、卯時發岡崎、過藤川・赤坂・御油三宿渡大川舟橋、申時到吉田宿焉、路程七里、

同十一日、巳時去吉田、今日風雨不尋常、酉時到于遠州今切宿焉、由風雨 秀吉公留滯于吉田也、

同十二日、卯時去今切、乘舟渡一里之入江、未時到濱松宿焉、海陸路程四里、逗留于此者五日也、

同十七日、巳時發於濱松到於天流河畔、諸將欲渡舟橋、

秀吉公臨大天流橋口、親爲下知、自諸將士卒至匹夫已下悉以渡之、而後 御旗下軍衆緩步、被渡大天流・小天流橋上、過池田・見付・袋井等宿、酉時到掛川宿焉、行程八里也、

同十八日、巳時發於掛川、越日坂佐用山下菊川、又越土山過金屋、臨大炊川急流聒聒驚耳、廣一里、其間四十八瀨、騎馬外皆裸裎渡焉、匹夫等沒溺者多矣、申時往駿州藤枝宿焉、行程八里、

同十九日、巳時去藤枝過岡邊宿、則越宇津山名所、經韋子到腰越、有稱阿部川大河、忽以渡之、申時著駿府足洗、行程七里、當城主者松平家康卿也、

同廿三日、巳時發於府中足洗、過江尻・田子浦往清見關、而寄宿於清見寺、行程五里、天氣不善留此地者四日也、

同廿六日、參詣三保明神、今日 秀吉公發大駕於清見關矣、

同廿七日、去清見寺、雖乘船依逆風赴陸地、已過由井宿僅到蒲原宿焉、行程四里、

同廿八日、寅時發於蒲原、爰有甲州流出之稱富士川、湍流喧逐驚耳、然而設舟橋、故容易渡之、而過吉原浮島原、申時往三枚橋寄宿於大中寺、行程七里、酉時登 殿下本營矣、

氏政・氏直聞 秀吉出兵、乃分兵使守諸城、其身在小田原、山中城者松田右兵衛大夫守之、氏政・氏直使北條左衛門大夫氏勝・間宮豐前守好高・朝倉能登守援守之、氏政召此三人告之、且各授刀劍言曰、卿曹其當盡忠、好高曰、君勿勞心、戰若急迫則我必戰死耳、合坐大歎之、朝倉能登守退告人曰、北條家之敗滅、其必不遠矣、山中城者構築太疎不可拒大兵、而令氏政使舊臣三四人守之、則奔舊臣也、嗚呼悼哉、北條家之陵夷也、氏勝若死則吾亦死耳、氏政使北條美濃守氏規守葦山城、

秀吉公分諸將向諸所、使信雄向葦山城、蜂須賀阿波守家政・福島左衛門大夫正則・細川越中守忠興・蒲生忠三郎後任于飛驒守・氏鄉・中川藤兵衛尉秀政・森右近大夫忠政・戶田

氏等四國兵屬焉、使家康卿越長窪到本山中、使近江中納言秀次・堀秀政等向山中城、

同廿九日、秀吉公如前定、遣諸將於諸所、秀吉公亦

發於三枚橋令向山中、久保與石田三成俱有後陣命、故有

大駕後、諸將均進攻之、秀吉公召中村式部少輔一氏曰、

山中之附城去此十餘町、我陣猶遠、其可使傍于附城、一

氏與諸軍同進急攻山中城、秀吉公寵臣一柳伊豆守戰死、

中村一氏能戰、城遂陷、北條左衛門大夫氏勝・朝倉能登

守逃走、松田右兵衛大夫・間宮豊前守好高自殺、秀吉

公大賞一氏之軍功、氏勝又守相州甘繩城、

氏政・氏直使松田尾張守・上田上野介・原式部大輔等守

宮城野口、其兵一萬二千、使千葉新介守湯本口、其兵八

千、使北條陸奥守氏輝・成田下總守・壬生上總介・皆川

山城守廣照守竹浦口、其兵一萬、時聞山中城既拔、而小

田原城中大恐、關左八州亦然、

四月一日、久保去三枚橋過三島、雖伊豆府中、依兵亂荒焉、進山中以陣

焉、路程五里、

宮城野・湯本・竹浦三口張番等聞山中城既陷、而不得支

持、四月一日、退入于小田原城、各兼日廣言皆空虛矣、

同二日、秀吉公見菲山城、越足柄・箱根路、而下湯本

陣眞覺寺、築石壁於松山、秀吉公使群兵大進到小田原城邊、諸軍攻小田原城、城兵能拒之、秀吉公登高處、

而小洩召家康卿曰、足下亦可小洩、因耳語曰、敵在吾目

中、小田原之亡滅在于只今、吾必以關東八州授足下也、

今日久保午時去山中欲箱根之越直路、而大軍充滿于山谷

不得進行、是以赴于權現山越、今夜宿權現山、行程五里、

同三日、發於權現山到於小田原、行程七里也、石田治部

少輔三成構久保之陣屋、而所附與也、久保之附城去敵城

近、而宛如一宅中聞他人語、是以羽箭・鐵炮飛來于我陣

者無有限量、東北西三方堅結間垣、南方海上浮數千船、

無可通一線之間隙也、

羽柴筑前守利家・同息肥前守利長經越後路欲發向于關東、

則殘雪深厚而不能、二月十六日、率三萬騎發賀州、出濃

州經木曾路矣、同道諸將、越後守・上杉彈正忠景勝・信

州之住毛利河內守・眞田源五、共其勢三萬五千既到上野

州先攻松枝城、城主大道寺駿河守及子新四郎、固雖拒之

各急攻焉、大道寺父子降矣、

松山城主上田上野介使家臣難波田因幡守・木呂子丹波守

・金子紀伊守・山田伊賀守守居城、而其身在小田原城、

景勝・利家等攻之、難波田・木呂子・金子・山田知其不

可勝、而降、蓑輪・厩橋・河越三城皆然、又攻北條安房守氏郡居城鉢形、而下之、

景勝・利家來于小田原、而執シツク調ムスブ、秀吉公不大賞之、景

勝・利家且恨且疑而退、秀吉公謂近臣曰、是度彼二人

之功不爲不多、然其拔數城也、皆肯其降焉、其或一城之

守兵屠滅之悉殺之、則一宥一威之法、吾深賞之而已、景

勝・利家聞之、率兵攻八王寺城、北條陸奧守氏輝居城也、

氏輝使橫地監物・中山勸解由・狩野一庵・近藤出羽介等

守之、而其身在小田原城矣、松枝以下降兵等受景勝・利

家命、急攻山下之陣、近藤出羽介防戰而死矣、中山勸解

由・狩野一庵雖爲一千餘小將、極運迫來已滅七百餘兵、

僅聚三百許兵言曰、我浴于氏輝之恩波舊矣、今大兵來侵、

我必死耳、汝輩欲逃則可逃、我豈恨乎、衆僉曰、唯是與

卿等共死生而已、安爲逃亡乎、中山・狩野大悅、既而景

勝・利家之軍兵蟻附于中丸、中山・狩野不敢驚懼發矢飛

炮、城下取死亡者既及數百人、橫地監物見之甚恐奔本城

而逃去、中山・狩野率三百兵與敵兵遇、屢戰屢擊、而後

又歸本城、殘兵僅十餘人皆自殺也、

四月、家康卿使井伊直政・本田忠勝・榑原康政赴相州甘

繩城、諭北條左衛門大夫氏勝、而降于秀吉公、其言及

三度、氏勝遂降、

647 「義弘公御譜中」

天正十八年庚寅、坂東相州之北條氏直企謀叛爲朝敵、

爲追討渠之門族俟暮春之佳期、殿下秀吉有東征之企、

由此息又一郎久保欲從大駕、孟春下旬首途於領國、三

月朔日、從於大駕進發於京都也、

648 「北鄉三久譜中」

天正十八年庚寅、殿下自將師、征伐相州小田原城主北

條左京大夫氏政及其子氏直、俗曰小田原陣、時有台命、又

一郎久保公當出陣不及引率大軍云、以故撰勇敢之士十

五騎、三久在其列、大野治部久高・佐多越後忠增・伊勢

彌九郎貞昌・五代右京友慶・其子少左衛門友泰・梅北宮

內左衛門國兼・平山作左衛門忠續・曾木五兵衛重久・福

島半助忠辰・木村主殿時益・河野玄蕃通親・上床藤右衛

門國寄・中野甚右衛門、一騎名欠、三久也、從兵都合四百五

十人、正月二十八日、先殿下進發東國著陣小田原城下、

數月勞軍務、七月十二日、氏政自殺、氏直降參、以關八

州悉平均矣、殿下又發軍奧州、依之七月十七日、久

保公發小田原赴奥州、奥州亦屬治平、八月十二日、殿
下自會津旋軍、九月朔日入洛、三久勤勞不少、

649 「又七郎豊久譜中」

天正十八年庚寅季春、殿下秀吉公親征關東向相州小田
原、悉誅北條氏之門族、豊久亦隨其軍爲勞苦、而所以九
月歸京也、其後賜歸國暇、而下日州佐土原矣、

650 「樺山權左衛門久高譜中」

天正十八年庚寅、北條某退治之時、應 殿下之命、又
一郎久保公令發向關東矣、久高亦所以爲供奉積勞苦也、

651 「義久公御譜中」

天正十八年、就坂東逆徒征伐、關西諸侯悉以上洛也、以
故又一郎久保主發於領國、三月廿四日上著、同廿八日、
發於京都赴於東國、僅拾五騎步卒已下共四百五十人也、
龍伯往三條橋口見其行列也、次ヲノ木殿石田殿先手
丹波之士也、騎步
已下八百許輩、次石田治部少輔三成殆乎百五十騎許相從
矣、次淺野彈正少弼長吉從三百騎許、都合士卒二千五百
餘人云云、次石川出雲守殿・早川主馬首殿・岡本下野守

殿・溝口伯耆守殿・増田右衛門尉殿、或千人或五百人相
從也、各行粧盡華美矣、

同月晦日、備前宰相殿進發、相從騎步一萬五千人也、
天正十八年三月朔日、依坂東征伐、殿下秀吉公京都首

途也、與玄貳法印同道出粟田口、仕合能且遂見物矣、諸
事盡美以言語非所述也、先陣駿河大納言、已去正月五日
率二萬餘人出張、其次尾張內大臣信雄卿率一萬六千餘人、

同月六日、進發設陣於駿河州三枚橋、後陣諸侯迄三月上
旬、在攝州生田森前後云爾、貴賤上下裝飾所以盡美麗不
可勝言也、

天正十八年三月三日、近衛殿下光臨也、召南蠻人及上
覽矣、

同月四日、候東山 龍山公伸禮詞、迄戌時揚歸鞍鞭也、

同月五日、候 近衛殿下述禮詞、又早旦裁書獻東山、所
以昨日之謝禮厚意也、

同月六日、裁數通書、將令伊地知民部太輔爲使節赴關東、
然而非今日進發也、此日欲參宮之爲首途、而依雨天延引
矣、

天正十八年三月九日、紹巴來訪之次、禁裏之開花被催
拜覽之時詠焉、

「在御文書方」

千早振神代にもやハしら雲の

うへにミきりの花のさかりハ 龍伯

天正十八年三月十日、爲伊勢參宮進發於京都也、

天正十八年三月廿日、伊勢神拜無障導既事終、今日歸洛

也、所不供奉之臣等賀歸京、備盛膳酌美酒也、

「在御文書方」

同月廿三日、花見之時、

白雲のたちかくしたる花のもとを

とひつゝなかき日もくらしきぬ 龍伯

返歌、

咲そめしこゝろの花のちりぬへき

春のあらしのふかすしもかな

「在御文書方」

常盤なる松も色そふ藤なみの

うつろふ水やかゝミなるらむ

「同」

賀茂のだんの躑躅見候て、

神牆のあたりならずは手折ても

かへらまほしき岩つゝしかな

「同」

こゝろなし、

櫻さくよしの、山の木のもとに

花のころもを一夜からはや

天正十八年三月廿六日、於 禁裏有御能、日吉太夫勤之、

爲見物潛逢參 内也、

同月廿七日、從于 龍山公往于千本、見櫻花之爭其色、

于時詠一首矣、

「在御文書方」

とく咲し花はちりても遅櫻

千もとのかけや常世なるらん

花見終、則從 龍山公入金覺寺、勸盛膳賜美酒、且召藝

者有亂舞、乘其興迄日暮催歸宿也、

天正十八年三月廿九日、詣東山 青蓮院、無禮怠、酒食

既終、而後尊圓親王眞筆數多遂拜見者也、

天正十八年四月朔日、爲謝昨日懇志、獻使書於 青蓮院、

使者八木越後入道嘉竺也、從 青蓮院亦有使者來也、

同月二日、辭京都下大坂、從鳥羽乘河舟、酉時下著者也、

天正十八年四月四日、於伊久田間有今春太夫之勸進能、

往其場終日遂見物、慰耳目也、

「義久公譜中」

時鳥こえは雲井にへたつとも
雨にことゝ草の庵りを

同月五日、殿下秀吉公、從關東賜 台書於龍伯及義弘、
記左、

652 「正文在文庫」

急度染筆候、中納言山中城へ今日廿九日執懸、即午刻乘
崩、城主之事者不及申、首千余討捕、其外追打不知數候、
然者明日朔日、箱根山峠へ爲陳取、到小田原表可手遣候
条、落去不可有程候、尙追と吉左右可申聞候也、

「天正十八年」
三月廿九日 ○ 「御朱印」

羽柴薩摩侍從とのへ
嶋津修理（義久）太夫入道とのへ

653 「義久公御譜中」

天正十八年四月六日、島津又七忠豊從大和被參越、遂對
面追細話矣、

「在御文書方」

一殿下陷豆州山中城、而即日賜 台書、由是爲賀勝利、
忽馳价使獻衣服、又報之賜朱印 台書、記左也、

655 「正文在文庫」

爲當陣見廻、裕五遠路到來、懇情被悅思召候、仍去廿九
日山中城中納言自身乘崩、城主始首二千余討捕之、其外
追討不知其數、諸城悉退散候、然者小田原表一里計令居
陣、先手之者二町三町間押詰候、小田原事落居不可有程
候、猶石田治部少輔可申候也、

「天正十八年」
卯月七日 ○ 「御朱印」

嶋津修理（義久）太夫とのへ

656 「義久公御譜中」

天正十八年四月十四日、於泉州住吉小春太夫爲郢曲能、
爲見聞往其場、終日所以慰耳目也、

天正十八年四月廿日、詣住吉設棧敷於三所、終日爲遊覽
也、

657 「正文在文庫」 「義久公御譜中正文在伊作衆樺山藏人入道一鈞トアリ」

就關東御動座爲見舞、鉄炮藥百斤到來、遠路之懇志悅思

食候、抑小田原面事、二町三町間ニ取巻、堀を掘土居を築、堀柵重々被仰付候、海上者兵船數千艘浮置之、一人も不拔出様候、八州之物主共悉籠居候間、干殺ニ可被仰

付候、來月朔日鎌倉爲見物可被成御出候、彼近所ニ有之玉繩城、此方へ相渡、物主北条左衛門大夫走入、命之儀御侘言申候間相助、家康へ被遣候、即右地へ相移、関東之城々悉請取、此方之人數可被入置候、尙増田右衛門尉可申候也、

(天正十八年)

卯月廿三日

○ 「御朱印」

「宛ナシ」

658

「義弘公御譜中」

「正文在松本慶弥左衛門」

好便之間令申候、抑又一郎至東國御出陳、御氣遣令察候、彼表無吳儀候之条、先以可御心安候、何比可爲御上洛候哉、待入計候、委細友枕迄令申候、猶古川久四郎可申候間、不能詳候、謹言、

「朱力キ」

「天正十八年」卯月廿六日

(近衛前久)

(花押)

□津兵庫頭殿

龍

659

「御文庫三番箱中」「義弘公御譜中ニ在リ」

爲端午祝儀、帷五内薄繪二、染帷二、生絹一到來、同北政所へ、帷五内薄繪二、生絹三、悅思食候、猶石田治部少輔可申候也、

「朱力キ」

「天正十八年」五月二日

○ 「朱印」

羽柴兵庫頭とのへ

660

「義久公御譜中」

天正十八年四月廿九日、發大坂於辰時、而酉時上著於京都也、

天正十八年五月朔日、往賀茂見足揃、松下殿出途中賀參越、且得樽酒矣、

天正十八年五月五日、往賀茂見競馬也、

天正十八年五月十七日、紹巴有連歌興行之佳招、往倍其席、迄秉燭所歸宅也、

天正十八年五月廿日、候東山 龍山公、終日聞高話慰心意、揚歸鞍鞭於夜暗也、同廿一日、有使節、我亦進使者、謝昨日厚意也、

此日 龍山公賜捷書、又されの御詠歌贈給ぬ、御書記
左、

661

猶と申候、彼若衆只今參候、かさも無之見事さハ、
まもた、ならず候、日本國大小神祇非偽候、早と御
出候へく候、於御油断者、沙汰之かきりたるへく候、
但御届ハ此分候、於無御出者、意齋兩人申談盃可給
候間、向後不可有御恨候、無御返事間ハ、八幡之さ
かつきのミ不申相待申候、早と御返事可承候、此者
一度ニ早と御出可給候、かしこ、

追而令申候、仍昨日内と御物語申候、かさかきの若衆至
當所來候、かさもこれなく、ことくくなをり申候、弥
若衆あかり申候、盃きこしめし度候ハ、只今不移時刻
早馬ニめし候て、小者一人之躰にて、早と可有御出候、
念者之ある若衆にて候間、承候者如何候之条、不被及沙
汰、可被懸御意候、爲其令啓候、以使者可申候処ニ、路
次遅候てハと、乍聊尔以飛脚申候、恐と謹言、

「天正十八年」
巳下刻
五月廿一日

「龍山公」
東入道

山(花押)

意室

經(花押)

龍伯

參

「在御文書方」

右され歌の返歌、

夏衣うすきおもひをぬき捨て

あしのほわたをたのめ行すゑ

「此御書、正文在國分衆伊地知作左衛門トアリ」

662

「義久公御譜中」

天正十八年庚寅、在京之際、紹巴法橋一會興行之時、所
強發句再三固辭、然而彌請不止、是以不得已而應其求、
即五月廿七日也、

「在御文書方」

梢よりしつ枝も花にあふち哉 龍伯

「雲イ」

663

「久保公御譜中」

五月廿六日、石田治部少輔三成東奥進發也、今日久保登
于本營、大谷刑部少輔吉隆・増田右衛門尉長盛以奔走謁
殿下、今日 殿下賜酒肴於久保也、

同廿九日、三成所請甲冑於久保、故即附與于卯花威也、

此表へ罷通候、以後者菟角不申入候之處、遮而御使者被差登候、誠と過分之至、何様彼使下向之砌□可申上候、然者 関白様於度々 御目見仕、種々忝 上意難盡筆紙候、仍御防戰之儀、緊□候へ共、于今相支躰候、併八州之事、不殘属御案利候之条、小田原之事落居不可有程候間、歸陳之折節委細可申上候、此等之趣、可然之様御披露憑存候、恐々謹言、

「朱カキ」
「天正十八年」六月四日

久保(花押)

伊勢雅樂入道殿

天正十八年六月七日、依紹巴之有誘引、詣祇園神社、昌叱亦同列也、社邊美景歷覽亦已興盡、丁欲歸宿之時、紹巴攜入我於六條道場中文閑庵室、勸盛膳酌美酒非唯我耳、及供奉士卒、忘盛暑之難忍也、
天正十八年六月十日、招民部卿法印於私宅、而所以一日之爲佳興也、紹巴・昌叱亦爲挨拶召座席也、

同月十二日、爲西方寺一見、往于嵯峨入于寺門、則庭前樹木池水不得空過、而綴一首卑歌也、

池水のた、むいはほに浪かけて
夏ををくらす庭の松かけ

此歌の由、紹巴聞付られ候て、如此、
夢宗國師手自石木をかきねうへ給う西方寺の庭、御一見の池水の御口号、近比珍重と、御供之人と何とて不被詠候哉、岩木のこゝろはつかしく候、次の日をくらる、

「在御文書方」

岩た、む道とめ入て池水に

夏ををくらす人のかしこさ 紹巴

天正十八年六月十四日、先參東山 龍山公、而後直到于下京、見祇園會之盡華美也、

對當家可抽忠懃之段、別而顯心底、兩度之神載尤頼數子細感之訖、倍到向後不可有愒易之儀、可爲肝要者也、仍證狀如斯、

天正拾八年

六月十五日

税所越前守殿

龍伯(花押)

「上包」
税所越前守殿

龍伯

667 「義久公御譜中」

天正十八年六月十八日、詣于清水寺觀音、而下向之次、
依桑名與介之有招請、入渠之亭也、

天正十八年六月廿日、詣多々須宮矣、歲阿彌・後藤廣乘
同道也、今日 殿下秀吉公賜朱印台書、記左、
豊後國事云々、「末ニ載置也」

668 「指宿海江田氏藏」

(本文書ハ一四三号文書ト同文ニツキ省略ス)

「義久公御譜中、正文在指宿衆海江田貞左衛門豊行トアリ」

「義久公御譜中」

一將軍家義輝光源院殿後室太陽院殿かくれさせ給ひし時
讀之、御靈前にそなへ奉るなり、

「在御文書方」

末の露消にし野邊の跡とへは、

なをもとつ葉を忍ふ草かな

670

「義弘公御譜中」

「正文在安藤權右衛門」

尙々幾度申候ても、又一郎様遠國御在陣、毎事無御
心元可被思召候、何事無御座候条、乍恐不可有御氣
遣候、次九州何方も御無事之由、肝要存候、

此表之儀、切々可遂注進之處、遠路故乍存罷過候、又一
郎様御在陳之条、毎事得實意候、似相之御用等雖承度候、
遠遠之儀候間、不致御奉公候、心底之通、伊右入迄旦夕
申承候、隨而八州之儀、無殘所屬御存分候、奥州伊達事
茂爲御礼罷出、東口平均迄候、弥小田原之事、干殺ニさ
せらるへき由候て、無御許容候、秋中ニハ可爲一途と存
候、於様子者自伊右入具可被得御意候条、不能詳候、恐
惶謹言、

「朱カキ」
天正十八年六月廿四日
（小早川）
隆景（花押）

小左衛

武庫様

參人と御中

隆景

671

「久保公御譜中」

六月廿日、殿下秀吉公教右筆山中山城守贈一輪於忍城主成田下總守速降。秀吉、山城守即馳牘于成田、成田諾之、山中持成田之回章、以示。秀吉公、秀吉公悅乃召家康卿曰、足下遣成田之書于氏直云、關左八州之諸城皆無不通志于秀吉、小田原其途不完矣、氏直速降秀吉之軍門、全其身可也、家康卿從之達氏直、自是小田原城中群疑泉涌、浮說雲興、氏政遣人於成田曰、速可來此有可評議之事、成田稱病不至、使者三至而途不來、於是氏政又遣使曰、吾子二心之事、吾竊聞之、未知信否、欲知其實、故屢遣价、然吾子未至如何、醫師安栖赴焉、成田應之曰、敵以多兵圍忍城、吾不忍悉殺城中之土女、故依山中山城守而乞降于秀吉耳、斯言非僞也、氏政聞而怒、使山上郷右衛門率兵七八千警守成田之陣、

武州岩付城者氏直之弟北條十郎氏房之居城、而其身在小田原城、聞八王寺・岩付兩城之陷、而小田原城中大懷驚怖、十郎氏房謂氏直曰、此城之敗亡屈指可知焉、不如速依家康卿、附與此城于秀吉、以全城兵之命、氏直罔然無措、松田尾張守者北條累代之家臣也、屬兵數千、八州之人尤敬之、松田謂北條家滅敗之期其在瞬目之間耳、何者諸城盡陷、今所殘者唯小田原也、豈得有利乎、乃密遣使

乞降、秀吉許之、松田大悅、而六月十七日之夜、欲入長岡越中守忠興・池田三左衛門尉輝政・堀久太郎兵于我營、時二男松田左馬助垂淚、以告愚親謀逆之事、氏政使舍弟陸奥守氏輝及岡江雪問之、松田曰、我豈叛于北條家乎、是敵人之誑君而已、氏輝・江雪重曰、左馬助告之、非敵人之誑詐也、於是尾張守辭屈、

672

「義久公御譜中」

天正十八年六月廿一日、於紹巴宅興行懷舊連歌也、
同月廿二日、辭京師下大坂也、

天正十八年七月十三日、詣天王寺奠水於先考也、其翌十四日、往天滿見燈爐、而歸宅之次入田鍋屋之宅也、

同月十七日、巳時發於大坂、與夜半鐘聲俱所以京着也、

「在御文書方」

ひらかたと云所にて詠之、いたミの歌也、

あたし世と消なはいかて置つらん

見るまほとなき朝かほの露

673

「北郷一雲譜中」

天正十八年、太守義久公從京師賜御書於一雲並忠虎、

有正文、左記之、

674 雖新申事候、今度致上洛、安宅殿口柄承得候間、不殘愚

意申下候、然者貴所之事、近年 御朱印被作頂戴、諸公

役之儀不被混當家候キ、此中意分雖有之、公儀之恐ニ候

条、令用捨候、然々可承得儀共候之間、自今以後者、如

先年何篇純熟候之様ニ御分別肝要ニ候、猶委曲ハ白濱次

郎左衛門尉可申間、令省略候、恐々謹言、

七月拾九日

竜伯(花押)

北郷(時久)入道殿

同讚岐守殿

675 「御文庫四拾八番箱中」「義久公御譜中正文在市後崎長右衛門」

上洛以後者、依無題目無音打過候、京都無相替儀候、殊

更 公儀事、能々御丹精之儀肝要ニ候、兼又留守中看

經之事憑置候キ、各無別儀被相勤候之哉、後便之時慥付

を以可承候、近比雖輕塵之至候、見來之佩扇子拾本令進

入候、恐々謹言、

「天正十八年」

七月廿一日

竜伯(花押)

大乘院

床下

676 「久保公御譜中」

七月、北條美濃守氏規附與葦山城於家康卿家臣内藤三左衛門尉信成、依氏政・氏直書牘之來也、 秀吉公使新莊

新三郎・石川兵藏赴葦山而監事、

秀吉公遣小寺如水・羽柴下總守勝雅告城中曰、氏政・氏

直來降可與伊豆・相模兩國、北條安房守氏郡達之、氏政

曰、吾久領八州、而今纔領二州、不如戰死、敢不許和、

氏郡以爲、和若成則我當領上野國、故頻勸氏政以和平之

事、

小田原城中大困、氏直察之使松田尾張守自刎、而後氏直

乘馬率山下郷右衛門到家康卿營、而告之故、家康卿稱之

乃言曰、足下其赴羽柴下總守勝雅陣、達之於 秀吉公而

可也、因是氏直到勝雅陣謝曰、我今降于秀吉之麾下、若

憐氏政以下之城兵而助之、則明日必可去城、勝雅白之、

秀吉公諾之、氏直悅而歸城、即悉出城兵而附與之、 秀

吉公使脇坂中務少輔安治・片桐東市正直盛監檢城中之諸

事、井伊直政・本多忠勝・榊原康政取其城、

氏政・氏輝等居于醫師安柄之室、 秀吉公曰、是度我東

行者爲擊滅北條氏也、今悉宥之、則前言似爲也、吾殺氏

政・氏輝、而欲赦氏直如之何、家康卿然之、依是 秀吉

公使石川備前守・蒔田權佐・中村式部大輔一氏・佐佐淡路守・堀田若狹守到安栖宅、榊原康政受家康卿之命、亦同往焉、石川・蒔田・中村等欲述秀吉公之旨、而口不忍言、氏輝察之、乞湯沐之暇、其後氏政・氏輝各詠和歌、
北條左京大夫氏政、雨雲のおほへる月も胸の霧もはらひにけりな秋の夕風、我身いま消とやいかにもふへき空より來りくうに歸れば、弟陸奥守氏輝、天地の清き中より生れ來てもとのすミかにかへるへきなり 而自殺、氏政時年五十二、人皆慙焉、家康卿持兩人之首、以示秀吉公、公曰、此是不畏帝命者也、乃命石田治部少輔三成齋之、到洛梟於一条反橋、秀吉公使氏直赴高野山、美濃守氏規・左衛門大夫氏勝・松田左馬助・大道寺孫九郎・内藤左近大夫等三十人、凡從者三百人、同赴焉、秀吉公頗加懇意於氏直等、
明年十一月、氏直卒、年三十三、

秀吉公授關左八州於家康卿、賜采地於井伊兵部少輔直政・本田中務大輔忠勝・榊原式部大輔康政、各十萬石附授小田原城於大久保七郎右衛門尉忠世、
 七月十七日、久保發於小田原赴奥州矣、到於大磯寄宿于明林寺、行程四里、
 同十八日、卯時久保去大磯、到甘繩城下宿焉、

天正十八年七月廿二日、朝鮮國使節經洛中到紫野、往其通道見異形裝束也、

天正十八年七月廿五日、依紹巴之有招、先入其宅、後見禁裏經營之無比倫也、

同月廿八日、入大德寺、見朝鮮人之有異形異服異樣也、

同月廿九日、依毛利右馬頭輝元之招扣其門戶、意齋・榊

松・輝元及其臣福原氏・後藤廣乘列于座席矣、疑是易牙

之和調乎、儀狄之旨酒乎、獻酬數巡之際、藝者十人出座

下爲亂舞、乘其興不覺、已迨夕陽也、

同月晦日、爲述八朔禮詞、到于幽齋・民部卿法印・大和

大納言之門戶、各進太刀・馬代也、

678

就在京之儀、祈禱之卷數并別而黃金二兩余到着、寔御懇切之段候、然者伊勘被仰登候条々、今度對蜜藏主具申達候、兼又関東表悉被屬平均、頓而可納御馬様子必定候、備者我々下國茂、今年中可相濟候哉、旁以面可申談候、仍任見來、縮一端令進之候、心緒計候、恐々謹言、

「天正十八年力」

七月廿五日

龍伯御判

福昌寺

『入來家臣東郷善兵衛藏』

左
御座(重時)

村尾殿

十郎左衛門尉殿

宮里殿

阿久祢殿

種田殿

海老原殿

坂本殿

左下

東入
兵部少輔殿

伊与守殿

加治木殿

谷津殿

柳田殿

愛甲殿

田口殿

長田殿

右

岡本殿

山口殿

樋脇殿

肥後殿

原口殿

瀬々殿

萩殿

大迫殿

右

東入
左京亮殿

蒲生殿

岩出殿

横大路殿

采女正殿

平瀨殿

樗木殿

天正十八年庚寅七月廿八日

『御文庫三番箱中』

爲八朔之祝儀、帷子五箔二、生箱三、北政所・拾并簾中取と、

如目錄到來、悦思召候、猶石田治部少輔可申候也、

「朱カキ」
天正十八年七月廿九日 ○ 「朱印」

羽柴薩广侍従とのへ(義弘)

『義弘公御譜中ニ在リ』

『御文庫四拾八番箱中』

長と御在陳之御軍勞奉察候、乍去東國無殘所屬御安利之由、爰許申散候、定可爲事實候、千秋万歳日出度候、仍到又一郎歸之時、安三兵得内儀候欵、自幸侃一左右相待、上京可然之旨申候之故、任其意、七月者延引候、然者今月可致出國候之条、以面上萬端可申承候、隨而銀子二枚任見來進覽仕候、寔表徹志計候、恐惶謹言、

「天正十八年」

八月日

石田治部少輔殿(三成)

御宿所

羽柴兵庫頭 義弘

『御文庫四拾九番箱中』 『義久公御譜中正文在國分衆鎌田新左衛門トアリ』

猶く六月晦日、此日付にて可有御分別候、迎も不可

「義久公御譜中」

天正十八年八月八日、在洛之際昌叱丁連歌興行之時、所

有御同心事与存候て、不申候へ共、昨夕も又今朝も
申越候間、もしく、以別人申候時、從拙者ハ何とも
不申候など、被仰、自然安く、与御同心も候へハ、
われら不届候ものニ可成与、彼折紙種々尋候て、懸
御目候、昨今ハ使者にて申越候、其身ハ肥後國甲斐
宗雲子宗柳与申候者にて、焉也与申候、猶々御内存
承候て、其趣可申候、

昨日友枕かたまで、一昨夜預御使札、御礼令申候キ、明
夕篇不圖可令出京候間、猶其節可申候、扱ハ不存寄山岡
八郎左衛門入道如此申、去六月晦日書狀越候へ共、御六
ヶ敷思召候ハんと存候て、不申候キ、然者節々有無之返
事可承之由申候て、人ヲ越候間、若以他之筋申入候刻、
御同心候へハ、拙者不届候やうに可申与、先得御意候、
如何可在之事故哉、御内證承候て、其趣返事可申候、猶
期面謁候、かしこ、

「朱カキ」

「天正十八年」八月三日

「龍伯公也」
伯老

山「龍山公ノ事也」

「義久公譜中」

強發句、雖迄固辭再三、彌以不止、故不得已而應其求云、
「有御文書方」
龍伯
月夜には香をとめゆかん花野哉
天正十八年八月十一日、民部卿法印依連歌興行被催出座、
雖曰固辭、重以強之、故不得已而所以出座也、公家數輩
・紹巴・昌叱各同席會合也、

「正文在文庫」

一殿下秀吉公聞陷相州小田原城、而誅戮城主北條氏、則
再馳价使、賀勝利以太刀・馬代、相州既屬治内、直征
奥州矣、是以追到會津獻之、又賜朱印 台書、記左、
北條儀被加誅戮ニ付、爲祝儀太刀一腰・馬代銀三枚、於
奥州會津相達候、遠路到着被入精段悦思召候、出羽・陸
奥果迄御人數被差遣、所々物主被相付、御置目等不殘被
仰付、始伊達(政宗)・南部(信忠)・山形妻子(最上義光)爲在洛差上、被明御隙候
条、明日十二日被成還御候、猶石田全頭可申候也、

「片カキカキ入」
「天正十八年」八月十一日

「御朱印」

鳴津修理入道とのへ

686 「義久公御譜中」

天正十八年八月廿四日、詣愛宕山擬懇祈、神拜既終、則於長牀坊備盛膳勸旨酒、獻酬事終、而後下山也、

687 「御文庫廿二番箱六卷中」「義久公御譜中案文有之トアリ」

去歲以來天龍寺在京、奉對 相國種々遂訴訟、公儀調無恙歸帆、于今珍重々々、抑闕東御出馬御粉骨重疊不斜、

故八州決退治、既北條氏政并弟陸奥守被刎頸、氏直一身

到高野山被扶置、因茲東西南北無言不靡、然者今度被仰

出趣者、右之御祝儀遠國端嶋一統可爲言上、貴邦事者、

早速被催綾舟、管絃等無如在船陟肝要之由、稱承畢、

御説之上者、被止是非羨、頓被企上洛者、豈爲安穩之基

欵、累年之失却者雖令察、於遲怠者忽又可屬難題、御思

唯專一々々、高麗人者京着、其外方々粧爲半欵、御法度

火急之儀、天龍和尚存知之前、猶此使僧申合者也、仍扇

子三拾本金銀、令進覽、表嘉瑞而已、不宣、恐惶謹言、

日本天正拾八年仲秋廿一日 修理大夫義久

進上 中山王

688 「御文庫三番箱中」「義久公御譜中案文有之トアリ」

厥后無音罷過、非本意候、仍北條事致滅却、闕東不殘被

屬御手裏、古今未聞之儀候、因茲從諸國右之御祝言可被

申入様被仰出候、貴邦者被催綾舟、管絃役者等無聊尔被

相調上洛肝心之段 御説候、已來種々失墜之儀雖察存候、

於遲引者即時疏可惡候、京法稠趣、天龍寺安多尼屋可被

知候之間、熟談專一候、仍乍些少扇子拾本進獻候、表微

志計候、恐々謹言、
[御譜ノ朱力キ] 天正十八年八月廿一日 義久

琉球國

圓覚寺

689 「正文在文庫」「義弘公御譜中ニ在リ」

今度至于片浦黒船着岸之由言上候、然者糸之儀、商賣仕

度旨申之由候条、先銀子貳万枚御奉行差添被遣候、有様

ニ相場を相立可賣上候、若糸餘候ハ、諸商人ニカハセ

可申候、買手無之ニ付ては、有次第可被爲召上候、此以

後年中ニ五度十度相渡候共、悉可被爲召上候間、毎年令

渡海、何之浦ニても、付よき所へ可相着候由、可被申

聞候、縱雖爲寄船、於日本之地者、聊其妨不可有之候、

糸之儀被召上儀者、更々非商賣之事情、和朝へ船爲可被
作着如此候趣、慥可申聞候、此方より御奉行被差下候ま
てハ、先糸之賣買可相待候、猶石田治部少輔可申候也、

〔御譜朱カキ〕

天正十八年八月廿七日

〔御朱印〕

羽柴薩摩侍從とのへ

690 「義久公御譜中」

殿下秀吉公退治坂東之凶徒畢、而無敵於天下、有樂於後
來、快然有歸京告、欲賀其大功、而天正十八年八月廿七
日、首途京都止宿江州大津、翌日到于八幡山、其翌留滯
于此地也、

同月晦日、往安土見 殿下賀太平、而又宿八幡山也、

天正十八年九月朔日、殿下入洛也、龍伯宿草津、同二
日、歸京者也、

同月七日、又一郎久保主後于 殿下、今日京著也、久保
主今夕來見、賀遠國軍勞與無事歸京也、

天正十八年九月八日、招久保主有饗應之儀、今度關東供
奉士卒悉以召座下、酌盃酒也、

691 「久保公御譜中」

秀吉公率大軍赴奧州矣、伊達政宗迎之於那須野、南部大
膳大夫信直亦拜謁、既到于奧州會津、東州悉平、

秀吉公今度有功之將各所行恩賞、使蒲生飛騨守初忠、氏

鄉領會津仙道白川、居若松城木村伊勢守初号彌一、領葛西

大崎、政宗居于其間、賜尾張及北伊勢五郡于中納言秀次、

參河國內十五萬石于池田三左衛門尉輝政、五萬石于田中

兵部大輔、駿河于中村式部少輔一氏、甲斐于丹波少將秀

勝・加藤遠江守、遠江國內十二萬石于堀尾帶刀吉晴、五

萬石于山內對馬守 豊、三萬石于渡瀨左衛門佐、信濃國

內小室城米祿五萬石于仙石越前守、小笠原于石川出雲守、

伊奈郡于毛利河內守秀頼、諏訪郡于日根野織部、森右近

大夫忠政亦稟恩祿、

殿下秀吉公關左八州中背者屠殺之、降者寬宥之、悉屬平

安、定國主於諸州畢、而八月十二日、自會津已歸陣、諸

將亦從大駕揚歸鞍之鞭、九月朔日、申時 殿下還御于京

都也、久保九月七日、遂京著、即候于法印龍伯公旅館、

所以謁見也、

同八日、依 龍伯公之有佳召、候于華第、則賜盛膳、候

其座者、北鄉宗次郎・幸侃・大野治部大夫・三清、其次
座宗固・澁谷對馬、座次如斯、又自東國扈從來士卒皆賜

盃酒也、

同廿日、久保辭京都下大坂、赴歸國也、

暫時之談話、忽以歸鞍也、
同月廿七日、已時辭京都下大坂也、

692 「義久公御譜中」

694 「義久公御譜中」

「正文在吉田衆春成主祝」

「正文在小根占衆磯永仲兵衛」

猶兼日明後日、口切をと企候處ニ、幸之儀候、必
十四出御まち入候、

大隅國根占湊小鷹丸

船頭
橋和泉拯

只今御返札令披見候、仍而明朝可有御立寄之由、祝着候、
乍去拙者つは愛宕めめし下候、明後日口切可申覚悟候、
おなしくハ明後日十四御出本望たるへく候、御返事待入
候、恐と謹言、

琉球

天正拾八年庚寅九月廿八日

義久(花押)
「御朱印」

下

「朱力キ」
天正十八年

九月十二日

嶋入
龍伯(花押)

祐乘法印

人と御中

695 「義久公御譜中」

天正十八年十月二日、於大坂入義弘主之宿所、終日爲遊
興者也、

693 「義久公御譜中」

天正十八年九月廿二日、依幽齊來訪、忽企茶湯、令後藤
德乘爲手前、主客三人也、晚景候東山龍山公、迄夜暗而

同月四日、辭大坂赴京師、所以酉時京著也、此晚宗固勸
酒食矣、兵庫頭義弘主昨日已以上洛也、

同月八日、招義弘主於茶室、宗叱役手前也、

同月十日、龍山公渡御、此時淨土僧來吐談議、而後爲亂

揚歸鞍轡矣、

舞迫深更矣、

同月廿五日、詣清水致懇祈、下向之次入紹巴之宅中、遂

天正十八年庚寅九月下旬、上著于大坂、是亦爲遂參觀代龍伯公也、

同月廿七日夜、龍伯公自京都下大坂、以故翌日遂參謁述慶賀、而後迨所保國家之細大矣、此間忽以賜盛膳也、

同年十月二日、龍伯公寄高駕於私宿、謹以請待、終日催遊興慰長旅窮困矣、

同月三日、去大坂上京師矣、龍伯公亦翌日自大坂至京都上著也、

天正十八年十月八日、於京都依龍伯公之有高招、速遂參扣、鞠躬候茶亭、則備和調盛膳、酌三巡美酒、而後以宗叱手前賜官焙椽無上茶、受之以頂戴之、碧雲吹不斷白花凝碗面、喫之則色與香味、令目鼻口腹變其常、忘不平事、忽覺到于蓬萊佳境乎、且復唱秦青之遏雲曲、祝萬萬歲、盃酒獻酬不知其巡數也、

黃子環溪先生友賢、生於中華文物之國、遊於東魯德義之門、染目於五經六籍、濡耳於諸史百家、惜乎功成而名未遂之時、不幸爲賊徒所劫奪、遙來于日域之地、流落于薩州之民間者有年矣、義弘聞其故、擢友賢於民間置諸左右、講武之暇、使彼講道義也、近來我入洛居止者三年于此矣、

友賢在于左右、於茲公卿大夫聞彼之學廣博、請學者多矣、是以洛之學易學詩者、從友賢皆師焉、

「正文在加治木柴城權右衛門」

尙々無紛候へ共、刀一腰進入候、

去四日、比紀罷上、其元無吳儀之由物語候、千々萬々日出候、京都之儀も、當分者同前候、可御心安候、尙白周

へ申合候条、可相達候、恐々謹言、

「朱力キ」 又一郎
「天正十八年」 久保(花押)

十月十三日
(家久) 又八郎殿
御宿所

猶々明日之御越治定候哉、御殘多存計候、万一於御

延引者、爰元御出可爲本望候、旁追而可申候、次此

上總鞆大房一懸、折節從東國到來之条、進之候、猶

嶋田与兵衛尉可申候、

明日至大坂御下之由、内々紅葉可懸御目存候處、千萬々

御殘多候、尤爲御暇乞、以參雖申度候、今日者定御用共

可爲御取紛与令遠慮候、此中御在洛節と見廻申、相應馳走申事も無之、隱居不肖散と身上ニ罷成、不立御用口惜次第、不及是非候、於此上も似相之御事承候者、可爲本望候、委曲友枕齋可申傳候、恐と謹言、

〔朱カキ〕
天正十八年十月十七日

〔龍山公御譜〕
(花押)

〔在上書〕
修理大夫殿

(花押)

699
〔義久公御譜中〕

天正十八年十月廿四日、詣清水寺、終夜凝懇祈、明朝宿坊備酒食也、

同月廿七日、於東山寺有連歌、龍山公出座、予亦陪其席、迄深更歸京也、

同月廿九日、於聖護院有法論議、爲聽聞令參詣、終日慰老耳矣、

天正十八年庚寅十一月朔日、丁在洛時、近衛關白大政大臣從一位准后前久公賜初雪詠於東山矣、

〔寫田中藤次兵衛進上〕

とはすともあはれとはみよ都人

700
〔義弘公御譜中〕

わかすむ山のけさのはつ雪
龍山
こ、もと山居、中くとせんの躰、申はかりなく候、はかりをかへりみす令申候、今朝の雪、さそおもしろく候ハんと察申候、龍伯几下、
同月二日、綴右返歌、以進上之、

〔在御文書方〕

初雪のつもれる庭にあとつけぬ

こ、ろハおもひやるかひもなし
龍伯

〔正文在加治木衆圖師平兵衛〕

猶以御出候ハ、明日朝食を御急候てから尤存候、如仰御參内之時、御所勞故無御供候て、無御心元存候キ、將又、明日高麗人出仕申ニ付、各出頭之御事候、御煩も能御座候ハ、御出尤存候、いまた然と共無御座候ハ、不被成御出仕候ても不苦候、旁迫而可申述候、恐と謹言、

〔朱カキ〕
天正十八年十一月五日

民部卿法印
玄以(花押)

羽柴薩_(義弘)侍從様
御報

701 「北郷忠虎譜中」

同十八年秋、忠虎下國、

忠虎獻上鷹一連、殿下秀吉公、是故賜御朱印^(印カ)、有正文、

左記之、

702 鷹一連到來、遠路悅思召候、猶石田木工頭可申候也、

十一月八日

○

「御朱印」

本郷讚岐守とのへ^(忠虎)

703 忠虎獻紅絲三十斤於 秀吉公、故賜御朱印、有正文、左

記之、

704 爲音信、紅系三十斤到來候、遠路之志、悅思召候、猶石

田治部少輔可申候也、

十二月十八日

○

「朱印」

本郷讚岐守とのへ^(上包)

本郷讚岐守

705 「義弘公御譜中」

「正文在加治木飛圖師平兵衛」

先程竜伯様方預御使者候、名乘迄御出之由候条、以書狀

申候つる、明日 上様此地へ 御成候、其前ニ御進物を

上候様ニと申事ニ候、御城へ者何も無御越候間、拙者宿

迄早天ニ御出候て、朝食 參御歸尤候、其通 竜伯様へ

も申入候、必く無御由断、拂曉ニ御越待申候、將亦此間

御上落も不存候而、以書狀さへ不申入候、如在之様ニ罷

成、令迷惑候、旁以面顔可申述候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「天正十八年」

十一月十三日

桑修大

重晴(花押)

羽兵侍從様^(義弘)

御報

706 「義久公御譜中」

天正十八年十一月四日、詣鞍馬寺、入妙法坊爲祈誓、而

後所以歸京也、此時詠之、

「在御文書方」

はつ雪を待うるまでに色こくも

散のこりたるも、みち一もと

天正十八年十一月十三日、與兵庫庫頭義弘俱發京都往大和、

同十四日、入大納言之第伸禮詞、而其翌歸京也、

同月十八日、有堀池彌次郎之招、與義弘俱入其宅、則有

座敷能、吳服・梅枝・小蝶・自然居士・長良等也、

同月廿四日、依舞孫三郎之招、到其屋有亂舞、迨深更矣、

天正十八年十一月廿七日、詣東山 龍山公、聽高話移時

刻、戌時歸京也、

同月晦日、早旦招石田治部少輔三成於茶室、勸茗若兵庫

頭義弘亦出座也、

同日、迄晚景賜歸國之暇、不計大慶非所言之可得而據矣、

707 「義久公御譜中」

天正十八年十二月二日、申時詣清水寺、祈國家泰平子孫

繁榮、以其祈誓重疊、迄戌時欲下向、滿天大雪布地深厚、

以故迷前路、上下共難儀也、

同月三日、早旦爲歸國之首途、詣北野天神矣、今日亦降

雪也、

同月四日、詣平野矣、此晚依幽齊之招、與義弘俱入其宅

也、石田治部少輔亦會于當席、而所議于薩隅法度、被曲

青蓮院高駕於私宅、然而依不在故、從門外忽歸寺云云、

天正十八年十二月五日、詣 近衛殿、告歸國暇、又往石

田治部少輔殿爲暇乞也、此日賀歸國、幽齊其外貴賤來入

其數多矣、

708 「御文庫廿二番箱六卷中」 「義久公御譜中ニ在リ」

指出案文之事

我等相抱諸成物指出之事

一 田島員數并錢成員數之事

一 川役・山役・浦役員數之事

一 田島之外之成物員數之事

右指出之外、聊以隱置事無御座候、以御檢知之上、指

出之員數相應之御扶持之儀被仰付候者、可忝候、自然

構私曲儀於在之者、如何様ニも可被仰付候、縱雖爲親

子兄弟緣者、一言申事不可有御座候、仍如件、

天正十八年 極月五日

709 「義久公御譜中」

天正十八年十二月六日、辰時辭京都往鳥羽乘川舟、戌時

下著大坂矣、

同月八日、詣往吉矣、此日 龍山公賜龍蹄也、

同月十三日、平戶松浦肥前守依所望許諱字、稱其謝禮得

寶刀於我、我亦進所帶之刀於肥州者也、

天正十八年十二月十六日、兵庫頭義弘主俄以上洛、是亦

有東國逆徒蜂起之告、大和納言殿・石田治部少輔殿・
増田右衛門尉殿依發向之有其聞也、

710 「義弘公御譜中」

天正十八年十一月十三日、欲禮詞於大納言卿、從 龍
伯公自京都至大和矣、同十四日、入亞相宅述禮詞、而即
歸宿、以其翌十五日歸京也、

同年十二月四日之晚、依細川幽齋之有招請、從 龍伯公
陪其席也、

同月六日、龍伯公依歸國、辭京都下大坂也、由此義弘
亦下大坂矣、

同月十二日、請 龍伯公於大坂私宿、終日獻酒食祝平安
也、

同月十六日、大雪、義弘俄以赴京師矣、其故何哉、有東
國逆徒蜂起之告、而依清須中納言秀次及石田治部少輔殿
・増田右衛門尉殿發向之有其聞也、

天正十八年庚寅十二月廿八日、秀吉公讓關白職於秀次、
世人稱 秀吉曰 大閤、

711 「御系圖抄」

日新公二女

女子

樺山安藝守善久室

生于薩州伊作城、母薩摩守成久女、

天正十八年庚寅十二月十六日卒、法名通善周慶大姉、

712 「樺山兵部大輔忠助譜中」

天正十七年己丑之秋、龍伯法印令赴京師給、忠助亦以
有供奉之列、其後有京師之日、七十九歲老母寄數行之書、
珍戴再三、而後開緘謹誦焉、其詞、初にハ、君にハ忠節
をつくして怠事なく、朋友にハ信を專にして忘るゝ事な
かれ、中比にハ、こゝろハ暗にあらねともといひ、終に
は、さらぬ別のありといへは、と書留給、其詞艶にして
みたりかハしくミえつるも、いとこゝろもとなくて、請
身之暇、仲冬之際下著、則老母之悅無可比類者、十有余
日無恙、而後罹病痾有平臥之牀者尙矣、以藥飼加療養而
不驗、請貴僧・高僧禱爾于上下神祇、而無其甲斐、雪月
十有六日未之時、生念不亂向西方金剛合掌、而唱南無阿
彌陀佛、宛如睡眠而赴黃泉矣、

「正文當家有之」

通善周慶大姉ハ、「以下左ニアリ」

713 通善周慶大姉ハその心かしこくして、源氏物語などを

おほへ、筆をとり、まなひの窓をひらかむと心をよせしに、いつの比をひそや、蒲生と云所の弓やはけしきに、嫡子椀山の忠副、やたけこゝろのはかなきハ、またはたちのうちにて打死をとく、それよりあまになり、法花八軸を讀誦し、朝夕をこたらず念佛さんまいにして有しか、天正十八年雪月十六日、やそちに及ひかくれられしよしを、予久しく在京せし、下向の道にて傳き、しより、心まとひの折ふしなれば、歌のもとすゑもたゝしからず、身のあきけりとハかへりミ侍れとも、たゝこゝろさしをあらハすはかりになん、

龍伯

ゆくとしのそらにたゝよふあは雪の

春をもまたてなど消ぬらん

714 『入來家臣東郷善兵衛藏』

東郷助左衛門尉殿

(重慶)

市比野名

納拾八谷津殿先

上二段

にうた

天正拾八年庚寅拾二月廿八日

715 (表紙) 天正拾八年自三月至十二月

御日記

天正拾八參月日記

朔日

一 関白様御出馬、阿ハた口ニて御見物、玄貳法印御同心

ニて、御仕合能候、

一二日、紹巴江御使札有、

一三日、御家門様御光儀、南蠻仁被召寄被成御覽、此日

市掃兵衛尉御酒上らる、

一四日、東山 龍山様江被成御礼、戌刻御歸鞍、

一五日、早朝東山江御書進上、昨日の御礼也、此日御

家門様江御禮、

一六日、関東江御書餘多也、御使者伊地知民部太輔江被

仰付、此日打立ハなし、

一六日、御參宮御打立候得共、依天氣惡俄御留也、

一七日、抱節・本因 御意趣被仰、

一八日、本田因幡守下向也、御國元江御意趣、
 一御宿江紹巴被參、酒肴持參、此日内裏之花御覽候へと
 紹巴御吳見にて、御覽有之、
 一廿日、從伊勢御歸路、巨細別紙ニ有、
 一廿一日、此晚澁谷對馬守御酒進上、
 一廿二日、北郷讚岐守御酒進上、
 一廿三日、大和大納言殿江被成 御禮、
 一廿四日、桑山修理太夫殿江御朝飯、夫より玄貳法印江
 御礼、又大政所・小政江御音信、此晚國衆先日御坂迎
 之返報被申、深更迄之亂酒、
 一廿五日、毛利殿使者あり、
 一廿六日、内裏御能御見物、日吉大夫仕、
 一廿七日、千本の花 龍山様被成御供御覽有、夫方金堂
 寺ニ而御会尺アリ、亂舞衆など被召奇、御當座も有、
 御歸宅ハ夜入かた也、
 一廿八日、一廿九日、東山 青蓮院殿様江被成御礼、
 先てんしん參、其後御飯也、 尊圓親王御眞筆餘多御
 覽也、大和守殿茂御座江被參、
 一卯月朔日、昨日の爲御礼、 青蓮院殿様江御使書嘉竺
 參、自東山も御使者有、大谷治部卿殿、これも御書參、

一二日、如大坂御下向、鳥羽より御舟也、酉刻御下着也、
 一三日、一四日、今春大夫勸進能御覽、御芝居ニ幸五
 郎次郎・今春次郎兵衛自兩人食籠折御酒進上、大夫江
 御長刀被下、又大藏貳介也、花幸五郎次郎、今春又次
 郎へも華被下、
 一五日、又七殿從大和御參也、
 一六日、一七日、一八日、此晚秋月方被參、
 一九日、三清高野江參詣、岩縫・西近助・家村源・八木
 助四郎同断、
 一十日、又七殿江御光儀、夜入迄御酒宴、
 一十一日、吉田清右衛門方江朝飯ニ 御光儀、吉清爲御
 礼門迄被參、自 御前ハ御狀にて被仰分、
 一十二日、自高野三清歸宿、坂迎有、
 一十三日、東國より之注進有、大和大納言殿江 御朱印
 之写、自京到來也、
 一十四日、住吉にて今春大夫能爲御覽、 上様御出也、
 一十五日、一十六日、一十七日、一十八日、
 一十九日、川田助七郎元服、
 一廿日、住吉ニ 上様爲御遊御出也、棧敷三所へ被構、
 三度の御振舞、御歸宅ハ夜入也、

一廿一日、一廿二日、一廿三日、一廿四日、岩切
縫殿助御飯被上、

一廿五日、吉岡藏人、高崎爲御使下向、

一廿六日、一廿七日、たなへ屋五郎兵衛尉所江御光儀、

一廿八日、師法印・松浦・吉田清三人御礼ニ御座候、酒

肴被持せ、終日之御酒宴也、

一廿九日、大坂を辰刻御打立、京へ酉刻御着也、

一五月朔日、賀茂の足揃爲御見物被成御出也、松下殿中

途江被出合、御酒進上アリ、

一二月、一三日、一四日、一五日、加茂競馬爲御

覽被成御出、一六日、此日紹巴御宿へ被參、酒肴持

參、一七日、一八日、福崎新兵衛尉於道正宿 御

飯被上、亂舞衆餘多參、夜入迄御酒宴也、一九日、

一十日、此日下衆多々有、

一十一日、一十二日、自紹巴十七日の發句參、

一十三日、一十四日、一十五日、民部卿法印へ 太

守様招請、御茶湯、一十六日、

一十七日、於紹巴有御興行御連歌、酉刻ニ道行、御酒宴

暮かた迄也、

一十八日、此日紹巴江縮面一たん被遣、

一十九日、一廿日、東山 龍山様へ御參上、夜入御歸
駕也、一廿一日、東山より御使有、又自御前も御使

進上也、此日從 龍山様御使たよりに御文も參、また

御詠歌とも有之、同御請御返歌も有之也、

一廿二日、一廿三日、此日香野五郎次郎など被參、は

やし有、一廿四日、一廿五日、一廿六日、

一廿七日、紹巴 太守様を招請候而興行有、御發句 太

守様被遊也、

一廿八日、昨日の御禮紹巴也、御使有、

一廿九日、一卅日、

六月

一朔日、一二日、澁谷對馬守江御光儀、

一三日、一四日、一五日、秀存坊被申請、

一六日、一七日、祇園御見物、文閑寺江紹巴・昌叱御

同心ニて御立寄、御会尺種々也、

一八日、一九日、民部卿法印御宿江請用有、相伴紹巴

・昌叱終日酒宴也、

一十日、宗与江御光儀、此日東山 青蓮院殿さま也、御

使ニ而式紙之儀頼御申也、

一十一日、龍山様江御參上、

二十二日、一十三日、西方寺御見物、并桂所江御光儀、御詠歌有、

二十四日、早朝 龍山様江御參上ニ而、直に祇園御見物有、

一十五日、一十六日、一十七日、

一十八日、清水江御參、御歸駕ニ桑名被申請、

一十九日、龍山様江御參上、

一廿日、た、すへ御參詣、歲阿弥・後藤廣乘被參、

一廿一日、懷舊之御連歌於紹巴御興行、

一廿二日、已刻如大坂御下向、不致御供、京へ逗留仕候間、日記無之候、

一廿三日、一廿四日、一廿五日、一廿六日、

一廿七日、一廿八日、一廿九日、一晦日、

七月

一朔日、一二日、一三日、一四日、一五日、

一六日、一七日、一八日、一九日、此日迄京へ逗留仕候、

一十日、一十一日、一十二日、

一十三日、此日水御まつりのため、天王寺江御參也、田鍋屋中途にて御酒進上仕、

一十四日、此日天満へ燭爐御見物ニ御出、御歸さに田鍋

屋江御光儀、一十六日、大風、

一十七日、已刻御打立、御上洛、夜半程ニ京へ御着也、

一十八日、一十九日、一廿日、

一廿一日、一廿二日、高麗人紫野のこたく罷通候、中途にて御見物、

一廿三日、一廿四日、一廿五日、此朝紹巴へ御光儀、

御会尺過候て、内裏御普請御見物、

一廿六日、一廿七日、一廿八日、高麗人爲御見物、

紫野江御出、廣濟寺御会尺有、

一廿九日、毛利殿招請、相伴衆意齋・栖松・輝元内衆一人、

福原名字欵、後藤廣乘、亂舞者十人程被參、

一晦日、八朔之御礼として幽齋・民法印江御出、また大納言様江も門迄御禮、各へ太刀・馬也、

八月

八月

一朔日、恆例之御祝儀として、喜入殿・柁山殿・北郷殿

・三清御太刀進、諸地頭各中紙進上、國衆少く御樽進上

上也、祐乗坊も此日紹巴・昌叱始餘多被參入御、

一二日、民部卿法印門迄八朔の御礼有、太刀・馬到來、

此日幽齋老入御めし、御会尺有、

一三日、八朔の御礼として、紹巴・昌叱江御使有、杉原

十帖ツ、此日 龍山様御光儀、吉兆大膳房之儀相圖、

一四日、一五日、一六日、一七日、

一八日、昌叱かたへ被申請興行有、御發句被遊、

一九日、一十日、

二十一日、民部卿法印江興行有、懇望候之条被成御出座、

門跡様公家衆餘多、紹巴・昌叱、

二十二日、一十三日、一十四日、一十五日、

一十六日、一十七日、一十八日、一十九日、

一廿日、一廿一日、一廿二日、一廿三日、

一廿四日、愛宕山江御參詣、御日歸也、長床坊にて御会

尺、又中途龍安寺ニ而、西ちん小四郎坂迎被申、

一廿五日、北野江御社參、一廿六日、

一廿七日、関白様爲御迎江州江御打立、此晚大津江御泊、

一廿八日、大津を御打立、八幡山へ御着也、

一廿九日、八幡山江御滞留也、

一晦日、あつかり表迄御指出、御目見有、御仕合能候而、

此夜も八幡江御泊也、

九月

一朔日、申刻 関白様御歸京、此日 大守様草津迄御着

也、

一二日、申刻京へ御着也、此晚宗固御振舞いたさる、也、

一三日、一四日、一五日、一六日、

一七日、又一様御歸洛、御迎之先衆瀬田迄被參、其跡衆

追々也、此晚 大守様御宿江御出也、幸侃其外御供衆

少く祇候有、

一八日、又一様江御寄合、御相伴北郷宗次郎・幸侃・大

野治部大夫・三清、次之間へ宗固・澁谷對馬守參候間、

東國御供衆皆御とをりニ被參、

一九日、又一様・喜入式部太輔・北郷讚岐守・幸侃・三

清江旧例之御酒御寄合、打續伺候衆御とをりに被參、

幸侃ハ御酒進上也、此晝又七殿御參上、御樽進上、

一十日、一十一日、一十二日、一十三日、

一十四日、一十五日、一十六日、一十七日、此日

廣乘江大守様招請、

一十八日、一十九日、一廿日、又一郎殿様如大坂御

下向、

一廿一日、一廿二日、幽齋御座候而御茶湯、後藤德乘

被參、御前共三人、手前德乘也、かたぬきの口きり也、

内座にて麻吉左・三清・宗固へ振舞、已後御茶へ被出

也、此日東山江御出也、夜入御歸洛、

- 一廿三日、此日三清大坂へ爲御使下向、此夜舞有、
 一廿四日、一廿五日、清水江御參詣、御歸きに紹巴江
 御立寄、やかて御歸宿、一廿六日、
 一廿七日、己辰大坂江御下向、
 一廿八日、御館江武庫様始而御光儀、廳而御寄合、
 一廿九日、御兩殿様江一臺御会尺之御酒、終日、
 一晦日、御前ニ神四郎御飯被上、
 一十月朔日、一二日、武庫様御宿江 大守様御光儀御
 會尺、終日也、
 一三日、武庫様御上洛、
 一四日、大守様御上洛、一之臺御供也、酉刻御京着、此
 晚宗固振舞有、
 一五日、一六日、一七日、
 一八日、御宿江 武庫様御招詣ニ而御茶湯、宗叱手前也、
 後三清・宗次郎・堀弥次郎被參、すい茶被給、やかて
 咽有、
 一九日、一十日、 龍山様御成有、此時淨土坊主被參、
 談儀有、それより夜深かた迄亂舞有、御座江 武庫様
 御出也、
 一十一日、一十二日、一十三日、一十四日、
 一十五日、一十六日、一十七日、一十八日、
 一十九日、一廿日、一廿一日、一廿二日、
 一廿三日、一廿四日、此晚清水江御通夜、御宿坊明朝
 振廻被申也、一廿五日、一廿六日、一廿七日、
 東山寺にて御連歌有、 龍山様御出座へ夜更御歸京也、
 一廿八日、一廿九日、聖護院殿様にて法論乱有由候而、
 被成御參、終日御会尺、
 一十一月朔日、聖門様へ昨日之御礼とて御使進上、嘉登
 也、御前江被召出、御盃被下、此日初雪とて、自
 龍山様御歌有、
 一二日、昨日の御返歌、東山江御進上有、
 一三日、一四日、鞍馬江御參詣、妙寶坊にて御会尺有、
 一五日、一六日、一七日、一八日、一九日、
 一十日、一十一日、一十二日、一十三日、大納言
 殿爲御見舞、大和江御越山也、
 一十四日、大納言殿御指出也、御對面ハなし、
 一十六日、一十七日、紹巴へ御出、御会尺有之、
 一十八日、堀池弥次郎 御兩殿なから被申請、座敷能せ
 らるゝ也、足羽・梅かえ・小蝶・自然居士・ちやうり
 やう、一十九日、

一廿日、昌叱江御出、御会尺有之、

一廿一日、一廿二日、一廿三日、一廿四日、此晚舞、孫三郎宿江申請、

一廿五日、宗固 御兩殿被申請、到而御会尺有之、亂舞衆餘多被參、深更迄也、一廿六日、

一廿七日、東山江御參上、戌刻御歸京、

一廿八日、一廿九日、一晦日、此朝石田殿招請にて茶湯有之、武庫様も御出座、此晚御暇御給也、

一十二月朔日、北郷讃州江御寄合、早朝也、

一 二日、申刻清水江御參詣、戌刻御歸宿、大雪にて路次之難儀不及是非、

一 三日、早朝爲御門出、北野江御社參、此日も終日之雪也、一四日、ひ、野江御社參、此晚幽齋江御請用、

武庫様も御出座、石田殿も出合候て、薩隅邊之御置目有之、此日 青蓮院殿様爲御暇乞ならせらる、御留守

之由、中途迄出合申理、御雜掌等嘉竺江被仰置、御歸駕也、

一 五日、石田殿 御家門様江爲御暇乞御出也、此日幽齋其外御暇乞之人衆多候也、

一 六日、辰刻京を御打立、東寺の茶屋之人御酒進上いた

す、鳥羽より御舟にて大坂江者戌刻御着也、一七日、

一 八日、住吉江御社參、此日從 龍山様御馬御拜領、一 九日、一十日、一十一日、一十二日、武庫様御

宿江御請用終日也、一十三日、此日平戸肥州御字被申請刀、一十四日、^{「本マ、」}進上、自 御前も御腰物被

給、一十五日、舟本迄御出也、すくに 武庫様御宿江御光儀、御会尺ハなく候、

一 十六日、武庫様御上洛、俄の事にて、其故ハ東國方一キ起由候て、中納言殿・石田殿・眞下殿可被立由聞得

候て、御立なり、此日大雪也、

義久公
義弘公 天正十九年
久保公

後編
舊記雜錄 卷二十六

716 「義久公御譜中」

天正十八年庚寅季冬、前關白豊臣秀吉公令諸侯曰、人生於天地之間、上自天子下至庶人、壹是皆不能無其業、而各欲鳴其業、丁此之時以治天下之大任、爲我之事業、以故惡逆凶徒蜂起四方、則或往以攻平、或坐以屬治、而日本國中既成一統、不亦說乎、雖然未慊于心者、所以不伐異國、而垂聲譽於萬世也、先伐朝鮮國、而令國主臣事于吾朝、而後宜赴向于明朝、若有不容我之言者、則忽以可慮嚴科也、諸侯各屈其勢無意異之有發言、謹隨其令矣、於茲乎、龍伯亦爲異國渡楫支度得歸國之免、而漸雖

曰日向州細島之到著海岸、被冒嚴寒羅腹痛病於海程、不得旅宿之離去床褥、越年於當地、而天正十九年辛卯正月十四日、入覺島宅也、

717 「佐多氏譜中」

久慶

太郎次郎

永祿年中誕生、母島津左兵衛尙久女、

天正十九年、太守公應一命、三州之所改替其地、

以故久慶去舊領知覽移同國河邊、智覽種子 島氏領之、

慶長九年甲辰六月二十一日死、法名幽山賢心居士、

718 「樺山紹劔日記」

一天正十九年辛卯、九州衆奈護屋江御普請也、規久罷上候而御普請御閉目申候、武庫様ハ高麗御支度被遊候する、龍伯様彼御普請御閉目可有なと、候へ共、更ニ大様ニ御入候而成兼候する間、又奈古屋へ武庫様御上可有とて、先支度をも差置候而、武庫被遊御辛勞候而、如形之閉目御歸候、規久も罷歸候段、武庫御使ニ而、此度兵部太輔御普請ニ付、御奉公其積候、自

今別而御頼候するにて候と、忝之由申候也、

719 「喜入五郎兵衛藏」

吉書

天筆和合樂地福皆圓滿

あら玉の年のはしめに筆とりてよろつものたから我そかき
とる

ころたにまことの道にかなひなはいのらすとても神や
守らむ

君か代の久しかるへきためしには神そうへけん住吉のま
つ

天正十九辛卯正月二日 龍伯

720 「久保公御譜中」

唐人ニ付嶋津殿御軍役人數一萬五千

又一郎殿

一三百本 のほり 五本^十手鐘

義久

一三百本之内貳百本ハ長鐘卅本手鐘

義弘

此外手鐘ハ面々たしなミ次第、廿本手鐘供使之時、又
ハ陣屋之前ニ長鐘計ハ見くるしく候、

一千五百丁 鉄炮

一千五百帳 弓者也、

一六百本こさし物、是ハくそくきせて、

一馬上ハ歴々之衆計、但かちたちにて不成衆いづれも可
爲馬上、然間馬上之員數ハ不相定、馬上之衆ハ甲・具
足可然候事、凡如此、猶以御たしなミ專一之事、

天正十九年

「高麗入前年ニテ、最初御定候衆盛ならん」

721 「御文庫廿二番箱六巻中」 「義久公御譜中案文有之トアリ」

今歳吉兆万々、仍去年者関東へ永々滞留、御苦勞之至察
存候、重疊入唐之打立中々無申計候、然者又一郎上洛之
儀雖申付候、于今延引之儀候、何共迷惑此事情、然處名
護屋普請・唐入彼是打續、難成様子共御推量之前候、乍

去油断仕儀ニ而ハ無之候之条、入念候事ハ眼前ニ候へ共、
國ふりの儀ニ候へハ、不如意之趣不及是非候、將又別而

令申候、從今ハ薩隅ニかゝり家ニ懸候する事ハ、義弘・
又一郎へ直ニ可被仰付事可目出候、愚拙事ハ弥老耄之躰

又一郎へ直ニ可被仰付事可目出候、愚拙事ハ弥老耄之躰

候之間、諸篇可被指置段頼存候、乍去拙者一身ニ自然可被仰付子細共候者、夫ハ菟毛角モ可承候哉、此等之旨於向後御用捨所希候、

「此御案文、義久公御宛書ナシ」

「御譜中ニ天正十九年潤正月欵ト朱カキアリ」

722

「天正十九年欵」「是ハ除クヘシ重復也」

（本文番ハ七二一号文書ト同文ニツキ省略ス）

723

「正文在新納氏」

猶々左京亮へも心得有へく候、以上、

今春之吉兆、重疊不可有休期候、仍而京都無相違之儀、

其元無何事候哉、遠遠故乍存知無音、不及是非候、隨而

者次郎四郎奉公ニ被入精候、可然存事候、弥々近習ニ可

相馴候、爲存知候、石田殿未被成見參候、此等之段笑

止ニ存事候、如何様治少様関東より歸路之砌、參會なき

れ候する欵と存候、猶期後音之時候、謹言、

「朱カキ」天正十九年正月六日

義弘（花押）

新納武藏入道殿

「此御書、忠元譜中ニ在リ」

724

「義弘公御譜中」

「正文在加治木衆圖師平兵衛」

如仰大納言殿儀不及是非仕合候、御書中各へ申聞候、廿九日之御葬靈候間、被成其御意得、御越可爲御尤候、左様ニ候ハ、廿八日ニ此近邊迄御越候て可然候、恐惶謹言、

「朱カキ」天正十九年

正月廿六日

桑修太

重晴（花押）

羽兵様

御報

725

「義久公御譜中」

「正文在田中善兵衛」

覺

一琉球・泉・佐土原之事、

一御唐入仕立之事、付衆盛馬武者出立國ふり之事、

一船之事、

一又一郎殿御夫婦御上洛之事、

一借物返弁之事、

一人質之事、

已上

726

「正文在田中善兵衛」

一又一郎殿夫婦上洛之事、
氣相酒調供衆役人彼是延引之事、

一京都へ辛勞之事、

一名護屋へ拙者參着之事、

一隱居之事、付諸所之事、

一墨付之事、國役之事、

一國替之事、

「御譜中天正十九年ノ正月ニ載タリ」

727

「御文書三番箱中」「義久公御譜中案文有之トアリ」

今春御吉兆、重疊申上候訖、抑在京中 龍山樣節々忝段、

恐悅無極候、罷下砌者、万任取亂、靜不奉得 尊意候事、

殘多愚存迄候、然者雪月十九日大坂致出船、同廿七日日

州細嶋へ着岸候、海上寒風無爲方故候哉、從中途虫氣出

合、于今迷惑之式候、去月十四日漸歸宅候、隨而歌人名

之儀、蒙仰候条、今度令進上之候、可致他見物ニ而者無

之候之間、染患筆候、即御清書可目出候、將又乍聊尔、

紅糸一斤應見來候、彼是以御次、可然様御披露所庶幾候、

恐々謹言、

「朱カキ」
天正十九年 閏正月十日

竜伯

意齋老

728

閏正月十日ノ日附竜伯公御案文ノ書披ニ左之通、宛ハ

意齋老ト有之、

一雪月十九日大坂致出船、同廿七日日州細嶋江着岸候、

海上寒風無爲方故候哉、從中途虫氣出合、于今迷惑之

義候、去月十四日漸歸宅候、

729

在洛中萬御懇切之儀、謹難申謝候、然者依無順風、中途

へ令滯留、去十四日漸歸着候、其後不得幸便無音之段、

背本懷候、倍到義弘可被加扶助事所希候、仍雖些少之至

候、糸一斤五色令進之候、聊表微意計候、恐々謹言、

「天正十九年秋」正月歌
十月廿一日

安宅三郎兵衛尉殿

「天正十八年十二月十九日發大坂、二十七日至細島、有疾、翌年正月

十四日至府、尤天正十九年八月廿六日忠元江御賜書、然ハ八月已前

御着府之事無疑けれハ、十月ハ正月ノ写誤ならん」

嶋津入道

龍伯

「御文庫四拾八番箱中」「久保公御譜中正文在蒲生兼谷山右京トアリ」
 猶と眞幸澤原野之父馬、爰元より可差下之由申候つれ共、然と馬不有合候、然者祢占重虎よりあつかり候月毛栗野へ召置候、是を内小野寺へ被仰付候て、澤原野、父ニ可被入候、時分相應にて候間、不可有御由断候、以上、

好便之条令啓候、京都無吳儀候、奥州之事者伊達逆意ニ付て、未靜謐之由風聞候、遠國之儀候条、邪正難知候、乍去治少爲見廻、年内より大寺大炊助差下候、頃罷上候、彼表之儀何共不被見分躰ニ候、とかく伊達上洛之儀者可難成欵と、取沙汰之由申候、然者 関白様爲御鷹野頃尾州へ被成御動座候、自其直三枚橋迄者可被成御動座之由候て、御陳道具など尾州へ被食寄候など、申散候、更に正儀者不知候、萬一於有 御出馬者、我々事も可出陳、治少よりも大寺へ口上にて、上様於爲御出馬者定我等も御供可仕候、諸事於陳所可有入魂之由承候条、勿論其覚悟に候、就中貴所事上洛可被急之由候、治少よりの返札にも、其方上洛之儀被成書載候間、 竜様へ爲可懸御目進上候、さためて其方も可被見候之条不能細筆候、次 竜伯様被成御下向候間、貴所へ御吳見之儀共種々可在之

731

「義弘公御譜中」

「正文在加治木衆圖師平兵衛」

候、相構々可有承引候、よき上にもよきやうニとおほしめし候ての御吳見などを請はつし候てハ、諸人のあさけり家の恥辱まことに口惜き儀たるへく候、よくく被入念、よき事にもあしき事にも 竜伯様之 御意次第と連と覚悟肝要ニ候、随而いつも申候、御酒過候ハぬ様ニ可有思唯候、幽齋・治少も御酒之儀を返々 竜様へ被成御理候キ、 竜様可被成 御意候、諸事心をゆるし候ハぬやうニたしなみ有へく候、不断身ちかくめしつかひ候はんものも、 竜様へ御分別ニ可相叶人衆をめしをき候へく候、さやうニ候ても人わけを被仕候てハ不可然候、此等のおもむき不可有由断候、猶東國表之様子た、今も到來共候者、追付可申下候、他事期後音候、恐々謹言、
「朱カキ」
「天正十九年」後正月廿日 義弘(花押)
(久保)又一郎殿

御札本望存候、殊鯛共被懸御意候、御懇慮不申得候、随而 上様御歸京之義、來月十日より内との御事候、次奥州面之事伊達も頓而出仕申候、可御心安候、尙期御

上洛之節候、恐と謹言、

〔朱カキ〕
〔天正十九年〕
後正月廿四日

〔前田〕
民部卿法印
玄以〔花押〕

羽兵庫様
御報

732

〔家久公御譜中〕

〔正文在加治木飛城權右衛門〕

猶と謠之事、中山三めしをき、切とけこあるへく候、

將又具足之事出來候、野副帶刀長可罷下時分可持參

候、野副へ被云付候、種と大方相調たる由きこえ候、

可御心安候、其外徒ニ罷居候へぬ様に分別專要に候、

以上、

誠今年之御慶珍重と、不可有盡期候、仍去十二月六

日之書狀、今月十八日令披見本懷候、

一家中子共、いつれ茂勇健之由目出度存候、

一久保へ奉公之儀、聊不可有疎意之旨候、肝要之事情、

弥由断有間敷候、

一奥州伊達逆意之由候て、從旧冬石治少被成出陳候間、

爲見廻使者差下候、頃罷上彼表之様式不見分跡ニ候、

伊達上洛之儀、難有之通取沙汰之由申候、左茂有事に

候哉、関白様今月中旬比方爲御鷹野尾張へ被成御動座、

于今御滞留候、下と申散候分ニ候、尾張より直可爲東

國御下向、御用意之由風聞候、左候者我と事も出陳之

覚悟迄ニ候、老跡之事者不及申候、何共調之儀不如意

たるへきと心遣候、委旨追而可申下候、

一不及申候へ共、学文手習之事不可有由断候、恐と謹言、

〔朱カキ〕
〔天正十九年〕
閏正月廿四日 義弘〔花押〕

〔家久〕
又八郎殿

733

〔川上經久譜中〕

〔正文當家有之〕

奉始上梵天帝釋四大天王、下堅牢地神、物日本六十餘州

大少神祇、別當國鎮守新田八幡大菩薩並開闢正一位、取

分覺島擁護諏方上下大明神 稻荷 祇園 春日 若宮

天滿大自在天神御部類眷属等、神爵冥爵可蒙罷者也、

仍起請如件、

天正十九年 辛卯二月十四日 久保〔花押〕

川上武藏入道殿

734

〔經久譜中〕

天正廿年壬辰即文祿元年也 正月二日死去、年八十四、法號祥翁芳麟居士、

735 「正文在新納氏」

猶々次郎四郎事、頃治少被成見參候、暇之儀可申取
と存候へ共、治少伺機嫌候て延引候、少も無疎意候、
左京亮へも傳筆之通申度候、

奥州伊達上洛遅々ニ付て、可被差向御人衆欵之由候之處、
去四日与風令上洛、京都弥御靜謐之躰候、然者屋形作之
儀并先年已來之借物返弁之事、就中又一郎夫婦在京之始
末難調仕合候之条、鎌田出雲守差下存分之通口上ニ相合
候、念を入られ候て、遂熟談首尾候之様、別而頼入候、
栗野留守居之事も諸事可被添心候、猶鎌雲可申候也、謹
言、

「朱カキ」
「天正十九年款」二月十六日 義弘(花押)

新納武藏入道殿
「此御書、忠元譜中ニ在リ」

736 奥州伊達上洛致遅々ニ付て、可被指向御人衆欵之由候之
處、去四日与風令上洛、京都弥御靜謐之躰候、然者屋形

作之事、彼是 竜伯様御下向已前、雖御談合申上候、弥
在京之始末不大方仕合ニ候之条、鎌田出雲守差下候条遂
熟談、別而馳走頼入候、於様躰者、從 御前可被仰出儀
候之間、猶追々可申候也、謹言、
「同年」 二月十六日 義弘(花押)

新納伊勢守殿

737 「御文庫拾六番箱四卷中」

天爵起請文之事

就御弓馬之儀御尋之條々、不殘心底言上仕候、備者後日
或御親類中、或雖爲他家之方、偏懇望於被申上者、其仁
相應ニ可被仰聞事、肝要奉存候之事、

右之旨於偽申上者、

奉始上梵天帝釈四大天王、下堅牢地神、惣日本國中大小
神祇、別而者新田八幡大菩薩 開門正一位、殊者覽嶋擁
護諏方上下大明神 戸柱 稻荷 春日 若宮諸大明神
永吉惣社 久多嶋大明神 天滿大自在天神御部類眷屬等
神爵冥爵可蒙罷者也、仍起請如件、

天正拾九年二月拾六日

川上武藏入道
芳麟(花押)

「御文庫廿二番箱六卷中」 「義久公御譜中案文有之トアリ」

厥后東國表之立柄如何聞得候哉、無心元存計候、

738 「御文庫廿二番箱六卷中」 「義久公御譜中ニ在リ案文有之ト記セリ」
 今歲御慶重疊、仍在京中別而芳惠之儀、于今欣悅無極候、
 然者雪月十九日大坂致渡海、同廿七日日州細嶋へ着岸候、
 連く乗船不叶故、不醒醉寒風被吹、其寒身ニとをり候哉、
 從中途虫氣出合散と式にて、漸去月十四日在所へ罷着、
 色く致養性候へ共、唐人などの藥不相應ニよつて未尔と
 候、就夫大醫御床敷存計候、然間連歌出座之事、中く不
 思懸躰候、可爲御察候、下國之刻者万取紛、不遂閑談候
 事、殘多申居候、兼又平野再興之儀、其後如何御沙汰茂
 候欤、最前如申候、微少之志等奉加ニ可召加之段所希候、
 旁不可過御分別候、將又玄法印へ、次之時者御心得憑入
 候、隨而紅糸一斤・紫貝十令進之候、乍些少表志而已候、
 恐く謹言、

「天正十九年二月義久公ノ御書也、御宛書も不知、追考スヘシ、義久公
 御譜中ニハ、天正十九年潤正月ト朱カキアリ」

伊地知勘解由左衛門尉殿

一屋形作談合之儀、各召寄數日入念候、先く出物之勘定
 無緩申付候、次第ニ可申登候、將又圖書頭上洛之事、
 貳月者必可爲打立候、

一関東立之事、屋形作祈ニ差合一圓難成躰候、さ候て茂、
 可被停止子細にて者無之候之間、色く榮談半候、就之
 も東表之注進早速承度候、

一久保二人上洛之儀、當春ニハ迎罷成間敷候、其故ハ屋
 形作祈并東國立之実否も未相知候之間、彼是難間事ニ
 候、必定ハ六月ニ可指延欤与存候、何共心遣候、其許
 内外之沙汰聞食、償早くと可承候、先く有之佩申候、

一旧冬海上之寒風身ニ入故候哉、從中途虫氣出合、于今
 散と式候、就夫路次も不容易、清水へ五日致逗留、去
 月十四日漸歸着候、種く養性仕候へ共、未本腹迷惑之
 至候、

京都出合之儀モ耽申究人無之様候、其故ハ三清風氣病
 不定之躰候、諸篇氣遣迄候、隨而生糸五斤進之候、

「此御案文、義久公天正十九年二月ノ御書ニテ宛書ナシ」

「義久公御譜中、天正十九年潤正月ト朱カキアリ」

「御文庫廿二番箱六卷中」

此中無音罷過候、當分御立柄如何候哉、此邦無相易儀候、可御心安候、

一又一郎殿上洛之儀調等一圓依不閉、此度ハ不事成候、八月始者何と成共打立候之様ニ与稠申付候、心遣可爲御察候、然者從白濱二郎左衛門尉所注進之書面ニ、先々又一郎殿一人早々京上候之様ニ与、其邊風聞茂候哉、爲内儀申下候、乍去直之芳翰無到來候之間、無心元候、是又承度候、

一大房（本ノマ、レ）下向之事、爲何遛共候哉、菟角之儀不相聞得候、不審ニ存所候、兼又圖書頭今迄延引之儀、京都者何分候哉、當國者超例年霖雨不艶候て、海陸共往反不輒候故、漸此比北表之海上出船候、彼通路無案内之条、着岸之早遅ハ難測候、巨細之趣者到忠長申合候、一長々在洛之儀候間、諸篇不如意之段、自是致推量候、餘々雖輕微候銀子百目進之候、書言計候、

二月

御書

兵庫頭殿様へ（兼也）

741 奥州伊達上洛致遅々ニ付て、可被指向御人衆欵之由候之處、去四日与風令上洛、京都弥御靜謐之躰候、然者屋形

作之事、彼是 竜伯様御下向已前、雖御談合申上候、亦在京之始末不大方仕合ニ候之条、鎌田出雲守差下候、各

遂熟談、別而馳走頼入候、從 御前可被仰出儀候之間、不能一二候、猶追而可申候也、謹言、

「カクキ」
「天正十九年」二月十六日

義弘（花押）

伊集院（久池）下野入道殿

742

「在伊地知權左衛門家」義久公御譜中ニアリ」

（本文書ハ七三七号文書ト同文ニツキ省略ス）

743

『長谷場越前日記』

一関白様高麗國王江被仰合せ、至末代迄も可爲御甚深之處ニ、如何成御仕合にや、高麗國方依爲首尾相違、滯朝之覚不可然之間、爲散鬱憤對和國之武兵干戈ヲ、頃ハ天正十九年辛卯三月廿日より各出船仕り、可致吳國渡海事堅く被仰出、爲其船津西國之内ニ名護屋と云へる處ニ、石垣の筑城を取構へ、太閤様御下着有上ハ、和中之大名小名も渡唐之外ハ不殘被參陳云々、

744

「義弘公御譜中」

「正文在加治木衆城權右衛門」

猶と今夜もそなたを夢にまさしくミまいらせ候て、
たゞいまけんさん候やうにこそ候つれ、又よきたよ
りの折ふしハ、さいくゝ同事成共、ふミにて申のほ
せ候ハ、うれしかるへく候、又八郎うたひ・てな
らい其外たしなミ、ゆたんなきやうにいけんあるへ
く候、ちやう満事もてならいさせ候てしかるへく候、
手ほんの事もんせきさまへ申うけ候て、くたし候へ
く候、又一郎ふうふのあいたよく候由聞へ候て、み
つからかこゝろには、月ほしのひかり待ゑてしより
もうれしくこそ候へ、折くゝのいけんにも間よきや
うにまうさせ給へ、又者覺嶋・平松へ茂、其より此
方なに事なきよしを、こゝろへ憑ニ申候、よろつめ
てたくゝ、

後の正月廿六日のふミ、やうくゝ此ころあひとゝき候、
まつくゝ其元上中しもにいたり、なに事なきよしめてた
く候、さきにも申候やうに、此度ハいよくゝかしの雪
をもくつもり、老のなミの立かさなれるおも影、あさか
ゝミの見るめ、我なからあさましましきまておほえ候、さて
もくゝけむさん候ハ、かやうにもなりぬる物よと、人

745

「御文庫廿二番箱六卷中」「義久公御譜中案文有之トアリ」

たかへにおどろき給ハんとおもふはかりに候、よの中の
れいとじて、年月の暮行はおしむへき事なるを、はやく
くたるへき折待えてしかなと思ふこゝろにや、月日のう
つるもおそき物にてこそ候へ、又一郎とのせつくゝ其地
へこされ候や、しるへき事に候、又八郎ふうくうゆたん
なきよし、かんように候、「長満御兩人トハ久四郎忠清ト御下君ナルヘシ、長満ハ拾遺、御下君ハ歳ノ御兄弟ニ當レリ」
おとなくしく候や、とりわき御れうにんめつらしく候、
よろつきねんの事ゆるかせに候ハぬよし候、もつともに
候、大しんおち・さんミ・と山ふうふ・とうかうおは、
其外女ニもふうくうゆたん有ましましきむね、よくゝ申き
かせ、よきやうにこゝろえ候へく候、かしこ、
「朱カキ」
天正十九年三月十九日 / / 左

さいしやうどのへ 義ひろ

其已來令無音候、仍薩厂之内伊作と申所へ大汝八幡とて
御座候、大汝と申者爲何通ニ而候哉と、先年在京之刻御
尋申候へは、三輪ニ而候ハんと承候、乍去八幡と申候事
不審ニ存候つれ共、其後子細不相知候之處、彼宮已前再
興ありて、遷宮之時之書物此比見出、有所より到來候、

「歲久一流系圖」

常久

袈裟菊丸 又吉 常陸守 下總守

天正十五年丁亥正月十八日、誕生於祁答院宮城、母祖

父歲久嫡女也、

「是一書ハ義久公御案文也、義久公天文二年癸巳二月九日薩州伊作ニ御誕生ナレハ、大汝八幡ハ御産土神ナリ」

度候、それより御届頼入候、以上、
四月 日
「御譜ニ天正十九年ト朱カキアリ」

神龍院

其ニ大汝八幡大和國三輪之里より勸請之由見得候、貴僧三輪と被仰候つる者不紛其分候、然共八幡と号事爲何儀ニ候哉、無心元候、右遷宮之時之書物今度差上候、於御一覽者可爲御合點候間、其様子細々可注預事所希候、隨而 豊國大明神其已後御無沙汰ニ罷過候、就其爲御初花銀子百廿目差上候、貴老以御分別何方之社衆ニ成共被仰付、國家安全之懇祈頼存候、次到貴院新渡之迦羅一兩令進之候、誠補心緒計候、恐々、
追而二位殿へ御心得候而可給候、是ニも迦羅二兩進

「義弘公御譜中」

天正十五年丁亥四月十七日已喪父、襁褓之中爲孤、漸經五歲鞭竹馬之際、 太守賜忠隣戰死之感牘曰、

747 於先年日州表京衆着陣刻、親父忠隣被遂戰死、謀吳他者也、頓可申理之處在洛相續、于今背本懷畢、右之佳名到向後不可有忘失、仍爲證跡如斯、

天正拾九年

卯月七日

（常心）
袈裟菊殿

龍伯（花押）

今歲關白秀次奉成 行幸於聚樂華第也、

天正十九年辛卯之秋、 秀吉一男兼君 一本曰、稱鶴松君云云、 早世、

當年四月誕生ト云云、 一 由是 秀吉憂悲之情焦思、慘怛之色本曰、三歲、孰是乎、

乾肝、群臣亦多斷髮以示哀情、 秀吉爲忘憂遊清水寺留

滯三日、然而悲哀彌熾涕泣滂沱、於茲乎始有欲入朝鮮之

志、蓋自慰心也、諸臣無如之何矣、

天正十九年、 秀吉公熟謂、古來中華之侵我國者多矣、

本朝伐外國者唯神功皇后西征三韓、是以千歲寥寥焉、今

吾出於卑賤、列於三公何不足之有乎、掌中之珠碎而不返、

泉下之璧埋而不見、幽憂之甚餘齡將蹙、大丈夫豈隕百年之命於此乎、以秀次爲帝都之守備使掌日本國中之事、我將入大明而爲皇帝、去年已馳書於朝鮮以言此事、然而朝鮮未捧答書不可不罪、我思先征朝鮮、朝鮮從我、則爲前鋒而進大明、若亦不從、則悉攻平之直入大明、豈其難乎、乃聚諸臣所以評議孔以急也、諸臣大驚以爲、秀吉悲歎之切故狂乎、頃年軍旅之勞無虛年、去歲漸既息矣、今若出兵於異域、則上下之費弊人民之困勞不可得言、秀吉其狂乎、衆心陰皆如此、然而不得違其言陽對曰、太可也耶、此實神功皇后以降大事也、武將之輝兵威於外邦也非君、則不能成矣、秀吉大悅、而乃俾九鬼大隅守嘉隆於伊勢浦造巨鐵艦數百艘、其中最大者號日本丸、其餘中國・四國・九州之諸侯亦各調軍艦蓄糧粟催軍兵、秀吉下令于諸國曰、來年二月三月諸軍悉可渡海、我當築館於肥前名護屋、而居其地軍旅之爲指揮、其亦有便乎、東國之兵者不便于舟利、可屯于名護屋、依其國之遠近其出兵也、或半之、或三分之一、或五分之一、宜守此法、南海・四國・九州之兵者舟利甚有便、皆可渡海于朝鮮、約法稍定矣、

749 「樺山兵部太輔規久」

天正十九年辛卯、將軍家秀吉公築肥前奈護屋城、規久亦從 兵庫頭義弘主致勞苦者也、

750 「義弘公御譜中」

「正文在加治木衆圖師平兵衛」

以上

御札拜見忝存候、道察様子被申入之由、拙者罷上候て申候共、替儀も御座有間敷候、雖然此ま、打置可申段も、あまり咲止ニ存、罷上今一往道察相談氣遣申度之由、道察迄申候つる、早く可致上京處、関白様大津へ御動座ニ付、治部少定大津ニ逗留可被申候条、治部少歸京之刻ニ可罷上と存、延引申候、明後日十二日ニ佐和山を罷立、十三日ニ必京着可仕候、其間之事いか様之隙入候共、道察も是非ニ在京候様ニ可被仰達候、治部少用所申付候間、明日十一日中ニ、此方用所を相叶可罷上候、諸事可得御意候、恐惶謹言、

「朱力キ」

天正十九年

卯月十日

安宅三郎兵衛

秀安(花押)

義弘様

参人と御中

751 「案文在加世田衆愛德善左衛門定延」

依無指題目、其後者御無音罷過心外候、仍巢鷹之儀從京都被仰付候間、通道之儀求麻へ度く雖申理候、曾以無合點候、就夫如阿蘇表兩人差通度候、當者路次等之儀、無其煩様可被仰付事所仰候、兼又隣所之儀候条、何篇御用等於有之者、互可申承候、恐く謹言、

「朱カキ」

「天正十九年」

卯月十七日

嶋津入道

龍伯(花押)

加藤主計頭殿

参

「此御書、義久公御譜中ニ在リ」

752 其後無音非本意候、栗野へ御移之事如何候哉、連く如申候、家内之儀者不及申候、今度之在京取分心遣候、其□

屋形作之周備等大儀之事共候、彼是可然之様被添御心、御祈念可爲本望候、猶普門坊可被申候間、不能一二候、恐惶謹言、

「天正十九年」

卯月十九日

義弘花押

常喜院

御同宿中

753 「義弘公御譜中」

「正文」

爲端午祝儀、帷子五内薄繪ニ、染帷ニ、生絹一、到來、同北政所江帷五内薄繪ニ、生絹三、到來之候、悦思食候、猶石田治部少輔可申候也、

「朱カキ」

「天正十九年」五月二日

羽柴薩广侍従とのへ

754 天正拾九五月三日の夜、龍伯様御夢想ニ、赤白咲交た

る梅花を壁にさし、御詠歌をと誰やらんす、めらるゝやうにおほしめされ、やかて御夢ハ覚侍ての御歌なり、手折つゝもて来てかめにさす華の色は白妙くれなるのむめ

「此御詠歌、御文庫廿二番箱六卷中ニ有之」

「義久公御譜中、案文有之トアリ」

755 「義久公御譜中」「御文庫三番箱中ニ有之」

爲端午之祝儀、帷子五到來、悦思召候、猶石田治部少輔可申候也、

「朱カキ」

「天正十九年」五月三日



「朱印」

嶋津修理大夫入道とのへ

「義弘公御譜中」

「正文」

猶以源右早く可被下候、急申儀ニ御座候、以上、
追而令啓上候、度く申入候へ共、御返事無是候、本田源
右事定御用可有御座候へ共、是非共早く可被越置候、書
狀にて申達儀にて無御座候間、口上ニ可申入候、然間具
不及申候、可得御意候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「天正十九年款」

五月五日

安宅三河守

秀安(花押)

義弘様

参人と御中

757 「義弘公御譜中」

「正文」

猶以自然此刀御用候者、可被仰付候、以上、

其後以貴面不得御意候条、尤罷上何篇可申入處、私之普
請と申ながら、早く出来候様ニと治部少堅申付故、自分
ニ罷上儀不成ニ付而、乍御造作本源右被越下候様ニと申
入候處、早速被仰付候、則申談、拙者存寄通大形申上候、

可被得御意之条書面不具候、可得御意候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「天正十九年款」
五月七日

安宅三河守

秀安(花押)

義弘様

参人と御中

758

猶く去月已來、聚樂ニ種く怪事在之由申散候付而、
御城之内よりも女房衆など荷をのけ、其外大名衆・
町衆など迄も方く氣遣仕たる由、関白様被聞食付、
荷物を預りたる宿も、荷の主も可有御成敗之由被仰
出、今程御糺明最中ニ候、さて右之一儀承付言上之
輩ニハ、のけ荷之分と荷預りの宿主との一跡を可被
下之由候、きひしき様辨すいりやう有へく、もしく
右之雜説遠國迄も申散、其間共候と、よくく上下
口を問候様ニ被仰付肝要ニ候、依之御檢者・耳聞を
方く江被差出候など、下く風聞候、大かたニおほ
しめし候てハせうしたるへく候、よくく可被仰付
候、関東御陣の砌も、御國下ニて善惡之沙汰仕候ま
しきよし、かたく申付候キ、今以京都之様、或善惡
取沙汰可有御停止候、次 竜様御事、八月ハ可有御
上洛、御用意不可有御油断之由、今度治少より被仰

候、就夫國元衆の分別ハ、もしく國替などのため
ニもやと氣遣にて、種々可申噉仁も可在候欵と存候、
當分安三兵物語候様子ハ、京儀之調にもかくニも
不罷成候、屋形作之事もはたしてハ可難成候、借物
ハ遂日かきなり、外聞らしき事ハひとつも無之候間、
御取次之治少可被失面目事ニ候間、竜様御事もよ
ひのほせ參らせられ、國の置目あつかひの事を京都
より可被仰付、治少之内證ときこえ候、又一郎進退
ニ付而ハ、いかやうにも心を添られ候て、見させら
るへきよし、治少切と被仰候よし候、いづれも奥意
者不存候、とかく 竜様御上洛之事ハ、追而可申上
候、先内々御用意不可有御油断候、就中久保上洛供
衆之事、心安めしつかふへき人衆迄にてハいか、候
間、久保もそとむつかしく可存仁を、供衆之内ニめ
し加られ候へと、治少より承候、如此念を入れられ候
て承儀候間、不可有油断候、よきやうニ此等之旨
竜様江可申上候、以上、

普門坊下向之砌、此文躰にて申下候へ共、遠路之深風自
然之遲速可在之欵と、重而令書載けり、仍如存知、旧冬
今春ニ到り、石治少懇切不□候處、此比者爲何事を被聞

付候哉、はたと相替、島津家滅亡ハ程有間敷被思候て、
取次なども 公儀向迄をと、承候条と多く候、先國持之
侍ハ毛利殿・家康、其次ニハ嶋津にて候、 関白様御用
ニ可罷立事、ひとつも無之候、其謂なたる國ニ一揆起
候とて、先手之人衆ニ被食加候共、無人數にて者可難成
候、不然者 関白様御側ニ可被食列之由被仰出候共、漸
乘馬衆五三人にて、島津と名乗可罷加様も無之候、扱者
御前向御咄衆の御用ニも不罷成、御普請等之御用ニも不
罷立、如此之國持誰人欵長久ニ國をたもち候ハん哉、京
大坂之かよひに、五騎三騎之供衆さへ鍵一本被所持、龍
造寺・鍋島・橘・伊東などの躰ニもおとりたる様式、言
語道断沙汰之外ニ候、 竜様も我等式も、はや兩度之在
京供衆已下迄も、京都之様子諸侍之風躰、見及候ハぬ事
者有ましく候、累年御奉公人之上にて、目口かわきたる
ひつたて、御前向我はと随分あかれ候衆も、一儀不相届
候得者、其促きえ失候事眼前に候、况嶋津事なのに忠儀
も無之、人なみのく振舞なくて、借銀のミ他ニすくれ
候てハ、露のたのミもなき事ニ候、たとへハ中納言様は
ちや殿の金子を借用候、上様被聞召付、似合之御扶持被
遣之候上にて、借物ハ不相届之由、御腹立之事共ニ候、

如此之例をひき候へハ、嶋津事借物迄ニ而在京之儀、早
 竟國之置目ゆるかせ故ニ候、然時者猶以 上様御意ニ入
 間敷事ニ候、 竜様御下向已前、幽齋にて御國之置目を
 始、屋形作之末等条々、石治少被入御念候、然共其内一
 もいまに無首尾候、是ひとへに 竜様御得心に不參故に
 候哉、いたつら事を被仰たる後悔無是非之由、治少被思
 候間、御取次事内ニ立入候ての熟談者不入之由、一途
 ニおほし定られ候ときこえ候、 迎も嶋津家連續者有間敷
 と被見究たる由、くり立く治少被仰候事者、筆も難及
 よし三兵物語候、十分ならは國替、不然者御家滅亡程ハ
 あらしと、をし出候て三兵いはれ候、國の置目ゆるかせ
 なく、宛行借物なくて、乗馬之十人も廿人もめしつれ、
 外聞らしく國持のふるまいにて、屋作人なミニ致周備、
 御家ニもりをさし候て見候へかしなど、三兵いはれ候、
 又諸大名江御普請など被仰付候時、自然被成御有免人衆
 ハ、金銀など致進上、今度之御普請御免許忝之由、御礼
 被申上候事、多く在之由きこえ候、少もむさくどさし
 置る、事ハ無之由候、然處薩隅事、今日迄ハ方く御普請
 をも不被仰付、御扶助一篇ニ候、如此之仕合者後日之御
 爲ニ候間、よく御念入へき事ときこえ候、いつれも

御油断ニおいてハ、御迷惑不可有程之由候、不申及候へ
 共、此書中もしく國元調達之爲ニ、ことをたくミ申な
 と、すいりやうにてハ不可然候、諸神八幡非僞候、就中
 三兵物語ニ、京儀へ精を入候ものハ、惣別國元衆へ氣ニ
 はつれ、 竜様も我等共も國元衆ニ同意候て、京儀をも
 題目と不存寄之由、治少被聞付候由候、誠ニ大事なる儀
 共ニ候、就夫条々申下度事おほく候へ共、我等江墨付如
 何と筆をのこし候、相構くと公界向ニ而之儀者不申及、
 御うちくニても、小姓衆其外御小者已下女房衆などの
 可承所にて、御心安御雜談等もよく被成、御遠慮專
 一候、國元之儀不洩京都ニ相聞候事者、以前方もはやき
 ときこえ候、此等之趣 竜様被聞食、無御隠察誰人ニも
 被仰出候てハ、猶以御國之御爲ニ罷成ましく候間、いか
 にもくひそかに申上、乍憚御口をもかため申候て肝要
 ニ候、次一往雅樂助事、久保上洛供たるへきよし傳承候、
 最肝要ニ候、一往事ハ先年上洛之刻、治少別而被成御入
 魂、於國本知行等可宛行之由、治少より直被仰下候間、
 其旨ニまかせ不可有吳儀之由、我等も證文遣置候、其首
 尾于今無之候、治少被仰たる始末於無首尾ハ、是茂ひと
 つの難題ニ可成候、食列候て、於國元右知行之首尾被相

究候て御肝要候、右之趣いつれもく、我等申下たるにてハ候ましく候、用捨尤候、此謂又一郎殿もひそかにきかれ候て、可然存候、乍重言 竜様へよきやうニ申上候へく候、恐く謹言、

五月七日

義弘(花押)

鎌田出雲守殿

759

「義久公御譜中御文書方ニ有之トアリ」

覺

- 一大佛御造立ニ付而からかね・地かね被仰付候事、付木食上人へ談合申候事、
- 一右之からかね、定而國役ニ可被仰付と存候、何も御由断有間敷事、
- 一伏見御城番ニ付て、人數可被召上由申下候き、然ハ貴所御供衆者可被相殘事、
- 一大刑少殿内閑齋と申仁弟貴所へ奉公させ度由、しきりニ被申候事、付朽網平六事、
- 一出水瀬崎父馬之事、付母駄給候由、六右申上候御礼之事、

以上

「朱カキ」
「天正十九年款」五月十日

760

「義久公御譜中」

「案文有之」

(本文書ハ七四〇号文書ト同文ニツキ省略ス、但シ二月ハ五月トアリ)

761

「御文庫廿三番箱十六卷中」久保公御譜中案文在八木主水元信トアリ

起請文天正十九年
五月廿二日草案

- 一今度以神載可被抽忠懃之趣、謹感懷之至、弥御頼母敷儀候、就夫於 龍伯様・義弘御前ニ自然不慮之邪説可出合刻者、我と進退ニ乍不似合、應事之子細ニ懇可致入魂事、
- 一緣重之儀、依 天下様御愛如此候之上者、向後互遺恨有間敷事、
- 一就其方之儀、萬一讒言之仁可有之時者、委敷可申通、又於下とニ、左様之沙汰被聞付次第承候者、忽糺明之儀可遂談合、殊更代と忠節之佳名吳他之条、到私茂別而指南之儀所希也、就中在洛而已之砌候間、京都共ニ偏可頼入事、
- 又一様より幸侃へ御返書

「末紙ニ、又一様々幸侃へ御神文案」

762 「御文庫三番箱中」 「義久公御譜中案文有之トアリ」

在京中 御門跡様別而被加 貴慮候、尤下國已後可申上
之处、菟角押移、失本懷候、殊更度々尊筆憚入候、無吳
儀被遊下候、寔恐悅之至、于今不知所謝候、隨而當夏從
琉球新渡之酒壺一、任見來令進上之候、近比雖聊尔之儀
候、宜預御披露候、恐々謹言、

〔御譜中朱カキ〕
〔天正十九年秋〕六月二日

大谷治部卿殿

龍伯

763 「新納忠元譜中」

「正文在新納次郎四郎忠饒」

〔本文書ハ一三二一号文書ト同文ニツキ省略ス〕

764 「義弘公御譜中」

天正十九年辛卯、有 殿下秀吉公所令諸候之大事、曰、
明年渡朝鮮國欲征伐八道、其以前日本國中宜正經界奉納
田帳於 禁裏、各思之勿敢慢也、吾在京得聞之矣、然而
未達薩摩、由此使白濱次郎左衛門尉・旅庵、五月廿四日、

首途於京都、六月廿一日、下着於覽島上達 龍伯公也、

765 「正文有之」

大仏殿柱之木貳本被差上候、入情之段、別而悅覺候、猶
石田治部少輔可申候也、

〔御譜中朱カキ〕
〔天正十九年秋〕六月廿五日

〔義久〕
嶋津修理大夫入道とのへ

766 〔本文書ハ七六五号文書ト同文ニツキ省略ス〕

767 「御文庫廿二番箱六卷中」 「義久公御譜中案文有之トアリ」

尊翰之旨謹拜見仕候、仍從京都御彙書之事、以御兩使被
仰聞候、御差出之儀最相認、雖可致進上候、某知行之分
去年從安藝法印使者以下向、田畠・浦濱坪付祥被相濟、
法印公進上之上者、不及是非候、又々此度之様子可申上
候、猶兩使可被成言上候、以此旨宜預御披露候、誠惶誠
恐敬白、

天正十九年

七月朔日

薩州

忠辰

進上 町田出羽守殿

御書之御返書

「御書未カキ」
「薩摩守殿へ御使トシテ桂常陸介・八木越後入道被遣候時、御給候御書之返書写也」

768 「御文庫二番箱義弘公二卷中」義弘公御譜中ニ在リ

猶以 上様近日可爲御下向候間、内々可有其御心得候、薩州ヨリ御左右無之哉、何様御歸國之御用意專一候、以上、

爲盆之御祝儀、御帷從 義久五ツ、御自分五ツ御進上候、則於大津遂披露候處、御祝着候旨被成 御朱印候、次私へ御帷二被懸御意候、寔御懇情之段畏入令存候、猶以面拜尊可申入候、不能細筆候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「天正十九款」

七月十五日

石田治部少輔

三成(花押)

羽兵庫様

御報

769 「義弘御譜中」

申下候へ共、來 [] 可致進上之 [] 旨 []

仰出候間、追々令啓候、 [] 之前帳之事、諸國へ去六月初比被仰渡候、薩隅之事者御私のため、不慮ニ去年治

少・幽齋 竜伯様へ御熟談被成置儀、奇妙なる仕合にて候、然處今日迄壹所一郷之差出も無上着段、なにとしたる事候哉と、幽齋を始をのくもたえられ候に、とかく返答可申様無之候、もしく其國もとにて帳など可被作用意もや候らん、中々なるましき事にて候、以其故治少・幽齋よりも、本帳之事者於京都可有沙汰之由、白濱次郎左衛門尉・旅庵にて被仰下候、爰元壹万石水帳さへも、増田右衛門尉殿以指南調候へ共、度々仕直候て、やうくの事にて進上申躰ニ候、いわん哉國元などにて、すいりやうて相調らるへき帳などハ、なにの御用にも立ましく候、不入事ニ手間を被入、數日被押移候事、きりとてハ不可然候、早竟ハ村敷・屋敷・田畠并種子蒔足付國枘にて米・大豆等收納いかほと、有様しるし付被差上候者、京判にて被遂算用、御前帳作らるへき事、京都にての御沙汰たるへき旨、返々被入御令、治少・幽齋被仰下候、就夫筆者并其名くの肝煎案内者相付、可被差上候由候き、然處一ヶ村之分とても、いまに無上着候、如此候てハ、京都にて本帳可被作事も、一月なとにハ事成ましく候、はや諸國よりハ大方被成進上候由候、乍重言一ヶ所宛成共、次第く可被上候、隨而屋刑作之事、

「義弘公御譜中」

いよく難成事笑止迄に候、あまりの事ニ、近日以使者様子可申之由、相存計候、此旨 竜伯様へも可被申上候、毎篇如此儀御前へ被申上候てよりハ、早竟御前之 御分別にてこそ候はんなど、候て、老中手前かもいなき事のミ累年致見聞儀共ニ候、當世さやうに候てハ、國家之ため不可然、□いよく、かわり有へき儀者何ケ度も被申上、老中せいに入らるへき事肝要ニ候、猶追々可申候、恐々謹言、

「朱力キ」
「天正十九年秋」八月五日

義弘(花押)

平田左近將監殿

本田下野入道殿

伊集院右衛門大夫入道殿

町田出羽守殿

天正十九年、秀吉遣書于琉球、其趣曰、吾勃興于蓬茨、須武威之運六十餘州既入穀中、故殊域遐方來庭者不少、吾今將征大明、是天所授也、最尔琉球未通聘帛、吾欲遣兵征之、而原田孫七郎以商舶之有利、故屢往來于琉球、比日俾近臣達告吾曰、速赴琉球說本朝征明國之旨、則其

來享不可疑焉、是故余暫宥之、來春出師之日速可來謁、若怠而不至、則其必遣大兵燒其城郭、麀其島民可運于掌上、琉球得此書、而大驚、使官臣鄭禮齋之赴大明、依福建巡撫使趙參魯、而告日本入寇之旨、又江右人許儀近歲在薩摩、而事醫業、與同鄉朱均旺相議、乃依福建守臣告之、大明帝未敢恐之、唯命海邊兵士、整調軍船而已、琉球亦不及回翰、而止焉、

天正十九年、秀吉定渡海于朝鮮國與屯于名護屋之軍兵也、小西攝津守行長其兵七千、宗對馬守義智其兵五千、松浦式部卿法印鎮信其兵三千、有馬修理大夫其兵二千、大村新八郎其兵一千、宇久大和守其兵七百、凡兵一万八千七百人爲一列、加藤主計頭清正其兵一万、鍋島加賀守直茂其兵一万二千、相良宮内大輔其兵八百、凡兵士二万二千八百人爲一列、行長・清正拈鬪、隔日可勤先陣之命也、黑田甲斐守長政其兵五千、大友豊後守義統其兵六千、凡兵士一万一千人爲一列、島津兵庫頭義弘其兵一万人爲一列、福島左衛門大夫正則其兵四千八百、其外諸士凡兵士八千七百人爲一列、蜂須賀阿波守家政其兵七千二百人爲一列、長曾我部土佐守元親其兵三千、生駒雅樂頭其兵五千五百、凡兵士九千二百人爲一列、小早川左衛門佐隆

景其兵一万、立花左近將監宗茂其兵二千五百、凡兵士一万五千七百人爲一列、毛利右馬頭輝元其兵三万人爲一列、大凡陸路之兵士十三万人也、九鬼大隅守嘉隆其兵千五百、藤堂佐渡守高虎其兵二千、脇坂中務少輔安治其兵千五百、加藤左馬助嘉明其兵七百五十、海路之兵九千二百人也、

其外兵士十萬餘者可屯于名護屋也、

秀吉又別聚兵士六萬、蓋朝鮮國渡海之兵十三萬餘雖衆多、而大明多兵若來援焉、則爲當之也、

771 「義弘公御譜中」

「正文在加治木衆圖師平兵衛」

御湯治爲 御見廻、御帷子五、則致披露被成御朱印候、御歸國之事、近日大坂へ直ニ御成候間、其節御暇之義可申上候、將又御軍役先書如申候、壹万五千にて候、なごや御普請者、右之三分一ほと割付候へと、兩三人へ被仰付候、其段無隱候間、各少も如在有間敷候處、自我等申候者退而如何候、能く御入魂候て、御普請可有御沙汰候、上様方御懇候共、御普請御軍役等之儀者御爲候間、可成程被入御精尤候、次ニ我等へ帷ニ被懸「字不見」、猶於大坂可申承候、恐惶謹言、

「朱力キ」
天正十九年

八月十五日

薩（義弘）厂侍從様

御報

石田全頭

正澄（花押）

772 「御文庫廿二番箱六卷中」

定

一奉公人・侍・中間・小者・あらし子に至るまで、去七月奥州へ御出勢より以後、新儀ニ町人・百姓ニ成候者有之者、其町中地下として相改、一切をくへからず、若隱置に付てハ、其一町一在所可被加御成敗事、

一在く百姓等、田畠を打捨、或商、或賃仕事ニ罷出輩有之者、其者の事ハ不及申、地下中可爲御成敗、并奉公をも不仕、田畠もつくらざるもの、代官給人として堅相改、をくへからず、もし於無其沙汰者、給人過怠にハ其在所めしあけらるへし、爲町人百姓於隱置者、其一郷同一町可爲曲言事、

一侍・小者によらず、其主に暇を不乞罷出輩、一切か、へへからず、能く相改、請人をたて可置事、但右者主人有之而於相届者、互事ニ候之条、擲取前之主の所へ相渡すへし、若此御法度を相背、自然にかし候ニ付て

774

一燒酒

目錄

壹麴

謹上 嶋津修理大夫入道殿

(義久)

中山王

萬曆十九年 仲種廿有一日

[朱印]

773

「御文庫二番箱義久公一軸中」「義久公御譜中正文有之トアリ」

今春直林寺爲使節下向、無恙上着候哉、然者爲関八州追
伐之祝儀、今度紋船令渡海、萬端可然之様、御調達憑入
候、國家表微之間、雖不献方物、表樂人等之儀式、爲使
節差上建善大龜和尚・茂留味里大屋子、委曲付于彼舌頭
者也、雖輕薄土産錄于別幅、聊表禮儀而已、恐惶不宣、

ハ、其一人之代に三人首をきらせ、相手之所へあひわ
たさせらるへし、三人の人代不申付ニおひてハ、不及
是非候之条、主人を可被加御成敗事、
右条と所被定置如件、
天正拾九年八月廿一日 御朱印
「奥ニ」
大閣様御置目写

777

「御文庫四拾八番箱中」「久保公御譜中正文在評定所トアリ」

776

「御文庫二番箱義久公一軸中」

(本文書ハ九五ニ号文書ト同文ニツキ省略ス)

「此御書、忠元譜中ニ在リ」
新納武藏入道殿
(忠元)

先日祇候之刻、神文被差出候、雖不新候、一段神妙之儀、
珍重存候、弥向後不易之鬱憤、此方以可爲同意候、爲其
如斯候、恐と謹言、
「朱カキ」
天正十九年八月廿六日 龍伯(花押)

775

「正文在新納氏」

謹上 嶋津修理大夫入道殿
「上色」
目錄

琉球國

萬曆十有九年八月廿一日

一太平布 貳拾端
一苧羅 貳端
已上

永く御辛勞之段、不及是非候、仍石治少様方兩使楠本右京案内者にて、去十五日ニ參着候、然者此方 公儀之爲御船、拾艘可作せ申由被仰付候間、其用意最中候、種々取亂御察之前ニ候、然処ニ貴所爲船五艘可作之段、幸侃より長壽院まで被申渡候哉、到愚老ニ不承儀候へ共、長壽院事も 公儀之御舟を餘多主取作せ候之間、一所ニ者難調候条、貴所船之事ハ、先以式そうも三艘も作せ候て可然由申候、 公儀之船成就候てよりハ、又々可申付候、兼又法元右近事、隼・はい鷹をすへ候て、其地へ可參由、弘羽弓藏前より申候坎、彼法元事ハ、如御存之鷹餘多主取かハせ候間、可參事難成存候、其方鷹も同前ニ致格護候、さてハ別仁ニも可被仰付候哉、左候者、尔々なる方之墨付などを以、留守居之老名數中へ可被仰渡事尤候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
〔天正十九年〕九月十九日 竜伯(花押)

〔久保〕
又一郎殿

778 「義久公御譜中」

就朝鮮國征伐、欲築 殿下本營於鎮西、仍相攸於肥前州奈護屋、將使鎮西諸侯悉往其地致土石勞功、龍伯亦爲到

其地、天正十九年十月、已發覺島丁將過隈城之時、忽有采薪之憂、而不得回頭、由是兵庫頭義弘依異國渡海、去九月中旬下著、代吾十一月赴夫地矣、

殿下秀吉公催五畿七道之太軍、明年渡朝鮮國、征伐八道、朝鮮國者在大明國正東、而朝日昇六、則先得鮮明、故以之名焉、八道者、京畿道、慶尚道、全羅道、忠清道、江原道、黃海道、平安道、咸鏡道也、而後欲侵入大明國、薩摩州之地、隣於夫國、仍可渡海之旨、賜朱印台書、且琉球國之師旅、亦混我旗下、而可渡楫也、

779 「正文在平松水源寺」

高麗國御出張之文書

唐土御征伐之事、來年春季之朔日御出勢到に、日限被相定早、抑於日域前代俊傑之良將雖有之、速不能掌六十余州、況今從吳國幅濔事、未來猶可無其例者欤、然間諸卒爲此節条、於武具・馬具等鍍金銀、以虎豹裏飭美麗可令用意、若疎之出立於有之ハ、可被処流罪之旨所被仰出也、先年高麗國王以勅使令歸依之間、於彼土亂妨狼籍、可被加御成敗候、縱朝鮮國雖不屬幕下、斯時爭對本朝戰干戈、更漢土專文書保世和國、以弓箭治國、夫吾朝雖爲小國爲智惠國、今亦 秀吉以抽威名号武勇第一之國必然矣、先

780 薩州南方山寺之事、大隅薩摩兩國以勸化物被成御勘忍候

軍勢魁之事、筑紫之物主加藤主計頭清正、小西攝津守行長、黑田甲斐守長政等相添九州士卒先陣之、毛利右馬允輝元一家・四國侍等爲式番備、此外段と勢對馬之地可令渡海、於日本者尾州之中納言・會津少將兩家之輩殘置令守帝都、可建立彼大加監也、國と諸侍到下と以着到、召供數万艘之艤、而槽楳楫立双、嘲弄眞介兵共楚立之津湊盪着、百余萬騎之軍兵如恆砂競懸、放火煙靄波響、翻風旗、先輝日、甲冑其威光可欺天魔、波旬敵在屯者挫之、臨戰場者、抹崩之割込追拂、生捕族者掛磔、加餘勢決雌雄、彼土武士共可慄振事眼前也、然而累年於勳戰功者、四百余州一篇切隨事有何炊、先高麗國可打入、肥前之國到彼渡口名護屋津、可有御動座之条、可拵城郭、加藤・小西・黑田・毛利等爲棟梁、九ヶ國人數召集也、從陸地・舟路運步大石小石、四方廣大積拳、磊樓門之柱者伸鉄、殿主之葛連雲、壹岐・對馬爲目之下、可直下往還之海路、不可有普通之大切、是又於末世可成吳國退治之遺跡者也、仍執達如件、

天正十九年九月下旬

〔御譜ニ此三字ナシ〕
御朱印

欽、然間肝付郡之内鹿屋・高熊・申良・小原・柏原・高山・宮下・富山・始良・西俣・野邊、彼諸所之儀者、右

兩國可爲同前由、幸侃被申置候条、如其相應勸進可入事可爲肝要、但後年之儀茂難測者也、仍證文如件、

天正十九年九月廿一日

伊集院兵部少輔
忠恆花押

781 〔圖書頭忠長譜中〕

天正十九年辛卯、殿下秀吉公催日域東西之軍、欲征朝鮮國、先築本營於肥前州名護屋、由是 太守龍伯公辭洛歸國矣、忠長者爲所實在聚樂也、

782 〔正文在島津圖書久通〕

此間者令不音候、仍馬一疋 栗毛 雖無見立候、從奧口上候、乘安形早足之様申來候間進之候、委曲友枕齋可申傳候、隙之透來臨可爲本望候、猶嶋田与兵衛尉可申候也、

九月廿三日

〔近衛前久〕
〔花押〕

嶋津圖書頭とのへ
〔忠長〕

「義弘公御譜中」

御普請之次第

「朱カキ」
「名護屋欵」

一 石牆横式百七間、但七尺間、此内高所四丈五尺、
一地ならしニ大石崩所横六間長さ三十四間、此内高所之石
八尺餘有之、并谷ミテ之分四方廿六尋、此内ふかき所九ひろ、
一 小屋數參百八間、但三間六間之家、
二間五間之家、
三間三間之家

已上

「朱カキ」
「天正十九年」

「御文庫廿二番箱六卷中」

就名護屋普請之儀、今度舟本へ參、數日順風待居候處、
虫氣出合散く爲躰、寔迷惑至極候、依夫兵庫頭不圖罷登
候、俄之儀にて可爲遲參事、彼是背本懷候、併諸篇可然

様御入魂所庶幾候、猶町田出羽守可申達候、恐く、

「朱カキ」
「天正十九年」十月

「義久公御譜中、案文有之トアリ」

「義久公御譜中」

「正文在寺田惣右衛門」

関白様來春就入唐之儀、貴國當邦混而可爲壹万五千軍役
之旨、兵庫頭義弘承之下國候、就夫軍衆等被相催可有渡
海事、且者謂遠嶋羈、且者扶桑之軍法可爲無案内之間、

軍衆之事爲私免除候、然則七千人之兵糧拾ヶ月之分、先
被相償、來二月以前當國坊之津迄令着岸、從其到高麗唐
土可有運送用意肝要候、就中從去拾日於肥州名護屋泊、
関白様旅閣之普請衆、應右之軍役被仰付候、俄之儀候之
条、可申通様無之、于今延引候、是又七千人兵糧之外、
金銀穀精之間無緩疎可有馳走候、次彼行之事異國無偏洩
之様、旁御思惟尤候、恐く謹言、

「朱カキ」
「天正十九年」小春廿四日

修理大夫義久(花押)

謹上 中山王

「義久公御譜中案文有之トアリ」

「御文庫廿二番箱六卷中」

猶く直林寺書狀日付ハ、六月十一日にて候事無紛候、

何とて琉球使僧之儀共不書越候哉、無心元存計候、

依寒中弥御辛勞之段令察候、仍普請場之儀、京都之はず
ニ違、重疊儀共出來候欵、迎召究之事可難成候哉と、自
是存計候、乍去何と様ニも御才覚可目出候、爰許普請衆

787

「御文庫三番箱中」「義久公御譜中案文有之トアリ」

猶と諸篇之儀、老敷衆へ重疊申出候へ共、唯我々之爲計を覚悟候て、少モ御爲之儀を不存事耳候、弥笑止までに候、兼日御存知之前候へ共、始末如何成行へく哉と、無心元事計候、

今度名護屋行之事、以御入魂被召置候条、涯分可致養性候、定而頃者可爲御打立候哉、寒中と申、御辛勞難申入候、兼又從安宅三之書狀、具令披見候、某事無殘所不入（安宅秀安）機由聞得候、何共慮外至極候、ケ様之儀を連く存、先刻幸侃上洛之時仁判紙なと雖指登候、自中途歸宅候、結句判紙茂隨身候之間、弥石田殿へ無音ニ罷成、迷惑之仕合不及力候、將又前日久保栗野へ越着之砌、老敷衆一人モ爰

かさミの分無緩申付候、兼又某養性之儀無油断候、結句頃者右之膝を病、齒モ痛候て、彼は無爲方様子候、不及了簡候、次稅越・比紀從最前罷登、于今一段心遣之儀候覽、肝要之至候、此旨懇ニ可被仰聞候、恐と、
「朱カキ」
「天正十九年十一月」
兵庫頭殿（義弘）

「義久公御案文也」

788

「御文庫三番箱中」「義久公御譜中正文有之トアリ」

今度就流球船之儀、祈念之事被申候、抽丹誠護廣供一七ケ日執行候、則卷數・札守并爲音信板物式端參候、弥祈念之義疎意有間敷候、猶使者可申候、穴賢とと、
「朱カキ」
「天正十九年十一月三日」
嶋津修理大夫入道とのへ（花押）

許へ不有合候哉、（瀬戸口重治・重色）刺瀬安房介兄弟共ニ留守之儀ニ候て、諸事聊尔之爲躰ニ候つ覽、于今笑止之至候、彼是爲可申分染筆候、旁期後音之時候、恐と謹言、
「朱カキ」
「天正十九年十一月二日」
龍伯
兵庫頭殿（義弘）

789

「御文庫四拾九番箱中」「義久公御譜中写在鹿屋衆三浦勘左衛門トアリ」

嶋津修理大夫とのへ「上巴」 性舜

北郷讚岐守質人妻子

人質番組 此外伊集院幸侃質人

新納武藏質人

「此ノ所スリハケル也」
此三人常詰也、

一番

嶋津左衛門入道殿

孫子可有御上候、

肝付中將

親類年寄之子式人

新納武藏入道

次郎四郎左京可被相替候、

二番

嶋津又四郎殿

実子可有御上候、

種子嶋左近太夫

親類并年寄之子式人

入来院又六

親類としよりの子式人

三番

嶋津圖書頭殿

実子可有御上候、

根占七郎

親類としよりの子式人

喜入式部太輔

実子可有御上候、

以上

右三組之内へ、本田下野入道・町田出羽守・平田左近將監、此三人も相加、一組ニ四人宛にて候、雖然此三人御役人ニ付而、時之到而御用之仁、此内一人宛京都ニ被召置度由、色々御理之儀候条、如此別ニ書付申候、縦雖爲御供、三組之内之可爲質人候、義久・義弘・久保御在國之時者、如最前一人宛三組へ相加、可有御在京候、右替之日限者七ヶ月宛ニ相定上者、私之爲談合被相替事堅可

爲停止候、以上、

天正十九

十二月二日

石治少

三成(花押)

義久様

義弘様

参人と御中

「右写置といへとも文字ノ異同も有之、考拠ニ供ス」

790

「写在鹿屋衆三浦勘左衛門」

(本文書ハ七八九号文書ト同文ニツキ省略ス)

791

「正文在澁谷次郎左衛門」

今度兵庫頭下向之刻、以御懇之儀泉之事承候、尤之子細候、御兩所如御存知、御朱印之地ニ候之処、薩摩をはなれ別所ニ付而罷出候、殊ニ水帳并石役奈子屋之御普請などの儀申通候へ共、一向無承引候、何共咲止之至候、さては今分ニ候ハ、別方へ被召替、いつミハ薩ニ可被相揃之儀頼入候、國中之相はなれ候事、誠迷惑ニ存候、以此等之趣可然之様、御取成所仰候、恐々謹言、
[天正十九]
十月二日
竜伯(花押)
石田治部少輔殿

(細川)
幽齋老
御宿所

三成判

「右ノ裏ニ有之」
嶋津入道

「上包」
幽齋老

竜伯

石田治部少輔殿

御宿所

「此御案文、四拾八番箱中ニ在之、糺合ス」

「義久公御譜中ニアリ」

792

「義弘公御譜中」

「寫」

覚

一大隅薩广日向之内もろかた郡に在之御藏入并寺社領給人方諸成物、不殘指出被仰付、其面ニ判形候て可有御

取事、

一御家作入目之事、指出之應員數可被仰付事、

一又一郎殿・同御女中様、來春早々可有御上洛事、

一又一郎殿御在京中、慥成老中可被付置事、

已上

「朱カキ」
「天正十九年」極月五日

玄旨判

793

急度被仰遣候、其方事鉄炮以下令用意、此方ニ所務等申付候とて相殘奉公人共相改、悉召連、無御渡海已前、來春高麗へ可罷渡候、最前雖相改申付候、可罷立者、不寄大小殘居候者、猶以可被成御成敗候間、成其意、堅可申付候、留守ニ居候ハて不叶者ハ書立候て可申上候、隨而兵庫頭、又一郎妻子、其外留守仕候者之妻子をも、同前ニ早々至于大坂可差上候、然者、御扶持方可被下候間、上着次第、於大坂師法印・松浦讓岐守兩人ニ申届、人數等書付、右兩人墨付取候て可申上候、御歸朝少之間之事候条、能く可申付候、猶淺野彈正少弼・石田木工頭・木下半介可申候也、

「朱カキ」
「天正十九年」十二月十四日 ○ 「御朱印」

嶋津修理太夫とのへ

「義久公御譜中、正文有之トアリ」

「此書、在文庫」

794

「新納旅庵譜中」

天正十九年辛卯十二月十七日、發於京都、使於名護屋、

同月廿九日下著、達 太守命於幽齋・石田治部少輔殿、
越年於任世旅宿也、

795 「義久公御譜中案文有之トアリ」

「御文庫廿二番箱六卷中」

東國へ兩度御軍勞之儀難尽書面候、尤節々雖可申通候、
依遠邦無音罷過、于今背本意候、次御歸陳之由承及候之
間、早々申入候、然者名護屋御普請之儀ニ付、愚拙打立
候之処、於中途虫氣出合、俄義弘指替罷登候、聊無緩候、
到唐入之儀者寄々与申隨不可致馳走候、猶大膳房へ申含
候、恐々、

「朱カキ」
「天正十九年十二月 日」

石田殿

796 「御文庫廿二番箱六卷中」 「義久公御譜中案文有之トアリ」

「新納伊勢守琉球へ御使之時之案」

就綾船遲怠之儀、從京都重疊御崇不淺、過半拙者緩之趣
稱被仰下之條、彼芳墨相副、今度用使札、貴邦之疎略殆
被決、私之咎事外聞実儀無曲次第、更難盡筆舌、同者無
厭却早々其務所希也、抑入唐之催、都鄙被勵精誠段無紛、

并名護屋普請、別而爲九州之手柄、一稜可有之様御下知
如斯、因茲右之調等顯先翰畢、首尾無愒易急速可被究達
之事、尤可爲肝要、其故者天下統一統之國役何之端嶋通之
乎、万一無沙汰之輩者、即刻可被加成敗旨堅被仰定、巨

細者新納伊勢守申含、仍鉄參百斤令献進之、微小之至不
及是非、不宣、恐惶謹言、

天正拾九年季冬十九日 「臘月、御譜中ニ在リ」 修理大夫義久

進上 琉球國王

797

先度如被仰遣候、來三月高麗へ被成御渡海、御仕置被
仰付、可爲御歸朝候、

一義久事渡海候而可然候、早速用意候て、淺野彈正渡海
之刻、同前ニ可被罷渡候、

一新納武藏事、妻子者京都へ差上、其身者義久召連可被
罷渡候事、

一大隅薩广日向殘置候留守居共、妻子之儀も、入念相改、
京都へ可上置事、

一高麗在陳者、此方留守居、帳面載可被上候、其外侍共
不相渡付而者、急度可被加御成敗候条、相改可有言上
事、

一從高麗用所と候てもとし候船共、其舟主兵糧其外雜物

已下、積候ニ付てハ可相渡候、積物無之付てハ、御兵

糧可被遣候間、早々名護屋へ可差越候、爲其被遣御奉

行候、不可有由断候也、

〔朱カキ〕
〔天正十九年〕十二月廿八日
〔御朱印〕

義久

幽齋

〔義久公御譜中、正文有之トアリ〕

798
〔義久公御譜中〕

天正十九年辛卯十二月廿八日、秀吉公讓關白職於秀次、

世稱 秀吉公曰大閣也、

大閣謂、古來中華之侵我國者屢矣、然本朝伐外國者、神

功皇后西征三韓之後千歲寥寥、而今吾出自卑賤、既履鉉

臺、何不足之有、方今掌中之珠碎而不返、泉下之璧埋而

不見、幽憂之甚餘齡將蹙、大丈夫豈隕百年之命於此乎、

以秀次爲帝都之守備、使掌日本國中之事、我將入大明而

爲皇帝、去年馳書於朝鮮以言此事、然朝鮮至今不捧答書、

不可不罪也、我思先拋大明而征朝鮮、朝鮮從我、則爲先

鋒而進、若不從、則悉攻平之而直入大明、豈其難乎、乃

聚諸臣而評議、諸臣大驚以爲、秀吉公歎哀之切故、秋去

一男乘君早世、其狂乎、頃年軍旅之勞無虛年、至去年而漸

既息焉、今若出兵于外方、則上下之費弊人民之困勞不可

得言、秀吉公其狂乎、衆心皆如此、雖然不得違 秀吉

公之言、皆對曰、太可也耶、是固神功皇后以來之大事也、

武將之耀兵威于外邦也、非君則不能成矣、秀吉公大悅、

乃命九鬼大隅守嘉隆、於伊勢浦造巨藏艦數百艘、其舟之

最大者號日本丸、其餘中國・四國・九州之諸候亦各調戰

舸、蓄糧粟催軍兵矣、

大明國之商船渡來于薩摩州、交易往還自古昔至今來無間

斷者尙矣、先是大明商客之中、有稱許三官（兼忠）「明國名知次者、
第幾可書」者、

留滯于領國中、以醫術甚鳴焉、我漸聞之能糺實否、而後

召膝下使三官診脈、而服湯藥、則得驗氣者速也、尔來定

予之藥師、加扶持候近習令不去、天正十九年辛卯、大

閣秀吉公丁可朝鮮國征伐之旨於令諸侯之時、明人等就淺

野彈正長政、捧訴狀曰、薩摩藥師三官者裁捷書遣中華、

秀吉公聞此之言忿怒不斜、忽造糺斷爲三官之越度矣、是

以 秀吉公命有司曰、新鑄鍋可煎三官、先告此故於家康

卿、卿報曰、彼之不正非言之所得而據、大閣怒氣尤至

極焉、衆人難寬宥乎、我熟慮之、匪啻三官一人、日本居

住明人等其皆如此、因此一事朝鮮征伐之非所不能乎、然則忿怒之餘任心行微事、而後若其聲漏達異邦、則推國法

是非曰、和人之度量不甚廣焉、以之思焉、所細事之爲日本瑕瑾不可不除、予之所願則捨三官之不正、宥死罪止輕

科、豈人皆不謂寬仁大度哉、大閣聞至理之所有許諾、忽以不加小科解黑索之拘攣、使三官如元任心自由行步矣、

是亦非大氣、爭如斯乎、蓋診慮之謂、家康卿之名言、所諸士之雖曰雲梯不可迨也、念是加懇志於龍伯之初乎、

799 「久保公御譜中ニ在リ」

(本文書ハ七二〇号文書ト同文ニツキ省略ス)

800 「左衛門督歲久譜中」

天正十九年辛卯、太守法印龍伯公渡御於祇答院、賜寶

刀龍啼已下、丁此之時興行於和漢百韻、

ふりも來ぬ雨をこめたるわか葉哉

鵬呼雲上名

すめる夜八月の宮こも遠からて

此末略之、連衆「和」珠長「漢」黑成「漢」虎岳「和」晴蓑「和」紹劍「和」

瑞岳「漢」大願寺後住「和」宗哲「和」篤和「漢」宗鶴「漢」珠玗「和」相良式部入道「和」

花嚴「大願寺住持」

龍伯

花嚴「和」權山兵部太輔入

珠玗「和」相良式部入道

「和」比志嶋紀伊守
「和」八木
嘉竺
利貞執筆

801 「新納忠元勲功記」

一天正十七年丑正月十七日、從 貫明様忠元江御使書を

以、年首之御嘉詞、且大口方之消息可被聞召上、倍用

賢慮候様被仰付、同晦日從 松齡様も御賀札忠元江被

成下、一唯様并忠増等質人之御暇被爲盡御手不相濟、

左候処右馬頭征久者石田家老安宅三郎兵衛取成ニて相

濟、不被得其意御事候得共、直ニ御朱印爲被下人ニ而

被任 公儀之由、大口御城普請之儀、去夏以來入精肝

煎致周備候、御褒詞御下國之上可被仰謝、併 貫明様

ニハ不被爲好哉ニ被聞召上候由、又飯野御留主ニ節々

見廻上、大慶ニ被思召上、弥御頼思召旨段々難有爲被

仰付由御座候、

一同年五月廿四日、此前 大閣西征之時分より、伊集院

幸侃挾野心、京方ニ内應任、一箭も防戰不任、表向者

忠義之躰ニ馳廻、和降之御取成仕、其身質人として敵

陣ニ馳入、御三殿様より却而先ニ肝付一郡を致拜領、

其上 御舍弟家久様迄も京方ニ構議殺之、漸々募權威、

其子源次郎忠眞に御家を爲繼度心底有之事、 貫明様

松齡様疾に御覽付被爲在、諸人見及候も乍有之、致言上者一人も無之、結句幸侃ニ追從申輩數多ニテ、容易ニ御内談難被洩、其比比志嶋紀伊守國貞・鎌田出雲守政近兩人前後を不願言上爲被仕由、然処從 御兩殿様忠元等江被仰知せ、御内密爲被仰付儀共有之、追々無二之忠臣被爲吟味、第一諸人幸侃江合躰不仕様密々可廻計策旨、三ヶ条之御内用被仰付、尤幸侃一味之方ニ洩聞得候而者不相成事ニテ、前書ニも一ヶ条被仰聞、愚意申上候儀と書出、其事ハ態与不書載由、此日忠元并本田因幡守正親・八木越後守嘉竺・比志嶋紀伊守國貞・鎌田出雲守政近・伊地知勘解由左衛門重元(マ)宗員・嶋津圖書頭忠長・阿多掃部介忠辰・平田左馬助増宗・平田左近將監歳宗・伊地知伯耆入道増也・平田豊前守宗位・村田雅樂助經宜・吉岡藏人久延・山田越前入道理安・稻留新介長辰・伊勢雅樂入道任世・川上源五郎久辰・平田美濃入道舜蘆貳拾人連判之起請文奉呈上、則 貫明様并 松齡様も御袖判迄爲被加置由、右ニ付同六月廿六日 貫明様より一ヶ条被仰出候処、懇切之返答、殊ニ墨付差上、乍案中御頼母敷御喜悅被思召上、弥向後無別儀可抽忠節趣之御感狀被成下、同八月廿四

日鹿兒嶋 御發駕、九月廿四日大坂 御着船、左候而其秋 松齡様御下向ニテ、飯野御城より栗野御城ニ爲被爲移由御座候、

一同十八年寅九月 松齡様御上洛、其節被召列候哉、忠元嫡孫次郎四郎忠光事、兼而被仰付置上洛仕、御近習ニ爲被召仕由、左候而二男忠増事者其節御暇被下、同十二月十九日 貫明様大坂御出船、同廿七日細嶋江被爲着、忠元も被召列候哉、此比爲罷下由御座候、

一同十九卯正月六日從 松齡様忠元江年頭御書被成下、次郎四郎忠光近習相馴、入精致御奉公、石田殿御對客未相濟御笑止思召趣、且忠増ニも心得候様難有被仰下、其比奥州伊達政宗未被爲上洛、御人衆可被差向世評ニ候処、同二月四日与風上洛有之、京地靜謐、頃日忠光治部少輔殿御對客相濟、同十六日鎌田政近被差下、又忠元江御賜書を以彼表屋形作并其以前御借財返弁、且一唯様御夫婦御續料等、能く致首尾候様ニ与之可遂吟味、栗野御留主ニも萬端心添可仕旨被仰付、左候而忠増ニも御傳筆、忠光事も右通難有被仰下、同八月忠元鹿兒嶋江參謁、貫明様江神文拜呈仕、然処同廿六日神文差上、雖不新候、一段神妙被思召上、御鬱憤事ニ

付而者、弥向後可爲御同意趣之御褒諭忠元江被成下、此神文も幸侃惡逆之御内密ニ可有之与申事御座候、

一同年十月二日、此時分御國より被爲差出候人質を、石

田治部少輔三成番組被相分ケ、賦書 貫明様 松齡様

御宛にして被差上、一番者嶋津左衛門入道殿祢答院領主 歲久入道晴

兼 孫子、肝付中將加治木領主三 郎五郎兼三、親類并年寄之子二人、新納

武藏入道大口地頭忠元 入道拙齋爲舟、実子左京弥太右衛門 忠増初名、孫次郎四郎、

次郎兵衛忠光事、二番者嶋津又四郎殿清水領主 以久事歿、実子、種子嶋左近

太夫種子嶋領 主久時、親類并年寄子二人、入來院又六清敷領 主重時、親

類并年寄子二人、三番者嶋津圖書頭殿申良領主忠 長入道紹益、実子、

根占七郎根占領 主重張、親類并年寄子二人、喜入式部太輔喜 入

鹿籠領主久道、実子、每番三人宛、三組之内ニ本田下野入道貞 入

人道、町田出羽守久倍入 道存松、平田左近將監宗 歳、其比之御

家老三人間ニ言人ツ、繰合在京にて、右之一組宛ニ相

加、四人宛にして七ヶ月交替可爲質人、其上 貫明様

松齡様 一唯様御三殿間ニ御一人ツ、御在京被爲在、

左候而右組合外ニ北郷讚岐守都城領 主忠虎、実子、伊集院幸侃

肝付郡 主忠棟、新納武藏守、此三人之質人ハ別段常詰ニ被仰付、

前文人數皆古來一所持、且御家老衆にて、何れも大身

耳ニ御座候処、忠元一人只大口地頭共仕居候身分にて、

右列之番組ニ被召入、殊ニ御國中第一大身成都城、又者肝付郡主扨同様常詰ニ爲被仰付事ハ、兼々 太閤忠

元武勇被爲感居、別而被入御念、右通爲被仰付趣、三

成此年十月 十三日、書中ニ御座候、

一同年秋之比、 太閤御朱印を以、來春朝鮮征伐被仰出、

肥前名護屋江御陣所被相立ニ付、諸大名被爲召寄御普

請有之、就夫同十月 貫明様茂鹿兒嶋御出馬にて、隈

城迄被爲立候処、御病氣被爲起、折柄 松齡様ニも朝

鮮御渡海ニ付、此年九月比御下向被遊居候間、則爲御

名代、同十一月名護屋迄御參陣、同十二月廿八日 太

閤御朱印にて 貫明様早速御用意候而、淺野彈正同前

可有御渡海、武藏事も妻子者京都江差上、其身ハ御渡

海ニ被召列候様、段々ケ条書を以被仰渡、旧冬写上置

候文書中ニ御朱印全文写載置候間、此場江者略仕候、

(本文ハ底本ニ欠ク、鹿兒島県立図書館本ニヨリ補フ)

〔表紙〕

義久公	天正二十年	即文祿元年也
義弘公		
久保公		
後編 舊記雜錄 卷二十七		

802

〔久保公御譜中〕

寛

一又八郎殿御公家成之事、
〔一ノ字欣〕〔朱カキ〕

一知音御求、

一小嶋屋道察へ点ニ可被仰合之事、

一馬乘源兵衛尉事、

一上井神五郎ニ役被仰付候事、

一椀山權左衛門尉ニ御旅中之役被仰付候事、

一村尾笑栖之事、

一相良吉右衛門尉ニ代官之儀、幸侃被申付候事、

〔朱カキ〕
〔文祿元年か〕

803

〔義弘公御傳中〕

文祿元年壬辰二月廿七日、首途於栗野、三月中旬、到着于肥前名護屋、四月十二日、與諸將共發名護屋、五月三日、著船于朝鮮慶尙道之釜山浦岸云々、

804

〔正文在平松水源寺〕〔義久公御譜中ニアリ〕

掟

今度大明國御動座ニ付之國々海道筋、其外軍勢陣取之在々地下人百姓等、家を明於令逃散者、可爲曲事、宿々町なミ如有來商賣可仕、自然陳被往還諸人、或押買押賣、或乱妨狼藉之輩可爲一錢切、其外狼儀於有之者、如御法度可被加御誅罰者也、

天正廿年正月五日

御朱印

〔御譜ニ此三字ナシ〕

805

〔以下義弘公御譜中ニ在リ〕

〔写〕

〔朱ニテ〕〔上書〕

〔從當閔白様御朱印〕

條々

一唐入ニ付而御在陣中、侍・中間・小者・あらしこ・人夫已下ニ至迄、かけ落仕輩於有之者、其身の事ハ不及申、一類并相抱置在所可被加 御成敗、但雖爲類身つけしらするにをひてハ、其者一人可被成 御赦免、縦使として罷歸候共、其主人慥なる墨付於無之者、可爲罪科事、

一人足飯米事、惣別雖爲御掟、尙以給人其念を入可下行事、

一遠國より御供仕候輩ハ、軍役それくくに御ゆるし被成候条、來十月には、かはりの儀可被仰付候間、上下共に可成其意事、

一御陣へ召連候百姓之田畠事、爲其郷中作毛仕可遣之、

若至荒置者、其郷中可被成 御成敗旨之事、付而、郷中合於有之者、兼而奉行へ可相理事、

一御陣へめしつれ候若黨小者ニとりかへの事、去年之配當半分之通かし可遣之、此旨於相背者、とり候もの、事者不及申、主人共ニ可爲曲言支、

右條々、於違背輩者、可被處嚴科者也、

「朱ニテ即文祿元年也」
天正廿年正月 日 御朱印

「此写、御文庫二番箱十一卷中ニアリ」

806 一壬辰 文祿元年正月十二日、大地震動、細河殿下向、三月廿八日、又一様高麗立、七月十八日、金吾於滝水死ス、

807 「案文在之」

「自 龍伯様 又一郎様へ御神文 草案」

起請文

今度上洛之事、某頼入儀ニ而者聊無之候、從京都數度被仰下趣申理迄候、然者心底無別儀之条、行末爲私見捨申間敷事、

右之旨若於令違犯者、

天正廿年正月十一日

「此御案文、御文庫廿二番箱七卷中ニアリ」

「義久公御譜中ニ在リ」

808 「義弘公御譜中」

「正文在入佐勝左衛門」

新春之御吉兆幸甚々々、萬々不可有盡期候、然者年頭爲御礼、御宿所へ遂參上候処、去年御下向之由、曾以不存候き、殊更縮羅三端被懸御意候、御懇意忝次第候、高麗

御出陳之由候、必々御在陳之内可申述候、若又爰許御用

之儀可被仰付候、不可有疎意候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔文祿元年〕

正月十五日

堀内安房守

氏善(花押)

嶋津兵庫頭様

まいる人と御中

809 (本文書ハ六三八号文書ト同文ニツキ省略ス)

『右、正月廿七日、栗野御首途、日州濱浦より海上不順ニ而、二月廿

二日、大坂御着也』

810 「正文在文庫」「義久公御譜中ニ在リ」

琉球之儀、今般大明國御發向之次有改易、物主雖可被仰

付、先年義久取次御札申上候条、被任其筋目、無吳儀被

立置、則爲与力其方江被相付候間、唐入之儀人數等令奔

走、召連可致出陣候、於令油断者、可被加御成敗旨、堅

可申聞候、次薩州内出水之薩广守事、一國義弘仁被仰付

上者、陣普請等一手仁可相勤候、幸忠辰与親類之儀候之

条、相互令入魂、自他之爲可然様ニ裁判尤候、猶二位法

印・石田治部少輔可申候也、

〔カキ入也〕
〔天正廿年〕
〔即文祿元年〕

正月十九日

○「御朱印」

羽柴薩广侍従とのへ

嶋津修理大夫入道とのへ

〔此写、御文庫廿二番箱七卷中ニ同案數有之〕

811 忠辰譜中ニ文祿元年壬辰、就朝鮮國征伐、賜 殿下秀吉

公朱印御教書、記左、

812 其方儀陣普請等者、兵庫頭一手ニ可仕候、薩广一國義弘

爲進止被仰付上者、可成其意候、殊更不遁間柄之儀候、

自他可然様ニ互入魂尤候、猶二位法印・石田治部少輔可

申候也、

〔朱カキ〕
〔文祿元〕
正月十九日 御朱印

〔出水〕
嶋津薩广守とのへ

813 「忠辰譜中」

文祿元年依 殿下秀吉公之有嚴命、催師旅迄孟夏、渡海

于朝鮮國也、

文祿二年之春權病痾不得勞軍務、而徒以在釜山浦矣、匪

啻不到軍陣、密揚歸帆、經七ヶ日著名護屋之岸、則有風

聞之難遁、曰、薩摩守忠辰雖渡朝鮮國不赴軍陣、徒緩然

而在釜山之海浦矣、此事既達 殿下之上聽、我之家危殆如風燈也、聞此變事、則不歸出水再渡楫朝鮮國、而在加德島矣、此間有改易之 嚴命、仍病惱逐日增重火急、不經數日八月二十七日、死異國之島嶼畢、年四十一、法號通津宗要大居士、

814 「薩摩守忠辰譜中」

前太守龍伯尊君曰、薩摩守忠辰對天下盡不忠、匪嘗會改易之難遁、於當家亦瑕瑾非甚是乎、且復先是 殿下秀吉公西征之時、不發一矢無一戰功、而却爲指南謀我之外城、其罪不容誅、由此絕彼家之後矣、至子子孫孫勿立後嗣云云、

815 「義久公御譜中」

「寫有之」

追而令啓達候、

一出水之事、被對御兩所被成御朱印候、薩州へ同前候、

大方副狀ニ雖令申候、猶以巨細顯紙面候、御陣御普請

如前々、一手ニ可被仰付之由御意候、其通堅可被仰觸

候、猶兩人罷下候間、於其地引合可申、其御心得專一

候、

一琉球之事、是又被成御朱印候、先年對龜并被仰付候段、雖連綿候、御断之儀達 上聞、龜井替地被仰付、如前

と可爲御与力之由被仰出候、如此之儀者、且御取次之故、且琉球國御礼被申入候筋目候、此上御入唐之刻疎

略之躰候ハ、可有吳御沙汰之由被仰出候間、右之通急度被仰遣、別而馳走被申候様ニ御入魂肝要候、先度

内と被仰上候綾舟之儀も于今遲滯候、此度急与被指上候様ニ御入眼可爲珍重候、

一御着陳迄者、義久在名護屋にて待付被申可然候、義弘之儀も九州之面と人數をさきくへ相立、於名護屋被

相待御出馬候ハ、其次ニ御分別可然候、尤早竟惣並無相違様可被相計事專一候、猶追と可申候間、先令省

略候、恐惶謹言、

「朱力々」
「天正廿年」
即文祿元年

正月廿一日

幽齋

玄旨

石治少

三成

匠作入

羽武庫

人々御中

816

「義久公御譜中」

「正文在田中善兵衛」

就御唐入、不可致油断之旨、度々被仰候、誠尤存候之条、其趣堅申付候、然者連々御存知之前無覚悟之故、及此節三四方之儀難弁候、就中唐入馬武者以下、如形雖申付候、田舍之國ぶり殊更遠嶋迄之渡海候間、一圓難相濟候、乍不調法義弘可罷立候、又一郎夫婦上洛仕候、我等事茂名護屋へ御動座前ニ可參着之由承候、仕立等萬可見苦敷様子、御推察相過候、餘々喚止之躰、可爲言語道断、如此之段兼日爲御心得、乍若輩一人急ニ指登候、此旨兩所

以御入魂、能々治少老・幽齋老御取合所希候、恐々謹言、

「朱カキ」
「文祿元年」
正月廿六日

嶋津入
竜伯(花押)

安宅三郎兵衛尉殿

麻生吉左衛門尉殿

御宿所

817

「喜入久道譜中」

「正文在當家」

猶々打立之日限相通候之時、聊以不可延引候、以上、旧冬以來致相談候唐入之儀、寔々前代未聞之故、萬可難

成之通案中候、雖然皆同無殘所被仰付候間、涯分諸篇可

被入御精事此節候、備者從京都一左右次第可罷立候、以其前自爰元可有注進、其翌日栗野へ致參着、可被成御供事專一候、爲後日染筆候訖、恐々謹言、

「朱カキ」
「文祿元年」
正月廿七日

義弘(花押)
龍伯(花押)

喜入式部太輔殿

818

「本文書八一〇五八号文書ト同文ニツキ省略ス」

819

「御文庫四拾九番箱中」

今度入唐之儀付て徳役之事、各肝煎之由候、誠大切存候、不及申候へ共、國家之爲此節候之条、弥無油断候者可爲喜悅、謹言、

二月廿一日
義弘(花押)

村田雅樂助殿

平田左馬助殿

吉田美作守殿

長壽院

820 急度被仰出候、高麗儀、對馬守・小西攝津守打越、三月

中ニ可相極之旨、先度申上候、然者兩人ハ高麗へ可相移

候、主計事ハ、高麗へ一里二里際之嶋へ可陳取旨被仰出

候、各ハ至對馬可着陳候、四國衆者壹岐ニ令在陳、對馬

守・小西一左右可相待候、異國者手ぬるきと存、あなつ

り申間敷候、御目少御養性付而、三月十日比可被成御動

座候、十日比御出馬候共、依様子早舟ニても、不移時日

可爲御着座候間、不可存油斷候也、

〔天正廿年〕 二月廿七日 ○ 〔大關御朱印〕

薩摩侍從とのへ

821 「義弘公御譜中」

殿下秀吉公興起朝鮮國征伐之大謀、使日域四方諸侯無大

無小詳田賦渡其地、故義弘及息男又市郎久保亦有渡楫之

命矣、是以文祿元年壬辰二月廿七日、首途於栗野、從軍

等未修終軍陣兵器、以故不得進發、僅廿三騎今日供奉也、

822 「久保公御譜中」

殿下秀吉公朝鮮國征伐之大謀、使日域四方諸侯無大無

小詳田賦定兵數渡夫國、故嚴親 義弘主及久保亦有渡楫

之命、由是文祿元年壬辰二月廿七日、首途於栗野焉、從
兵等未修終兵器、以故未得進發、僅廿三騎今日所以扈從
者、然仍留滯于大口待從軍之到來、三月上旬發于夫地到
於肥前唐津、而窺諸將之群集、俟渡船之未到有日于茲
矣、

大樹前關白豊臣秀吉公爲朝鮮國征伐之勤指揮、三月發於
京都、四月下著肥前州名護屋、漸航海之期有近日矣、然
而薩摩舟船未有一隻到當津、四月十二日、諸將已解纜於
名護屋渡壹岐島、我父子不得已、而求得賃船渡于壹岐勝
本、海程十三里而有逆風無順風、與諸船俱送數日於此、

故遠望海上、而領國舟船未曾到著、父子及扈從臣等絕言
語際、數根藤左衛門尉頼元私船九端帆也、只一隻到于此地、
則頼元曰、爲之於 義弘主之乘船者可乎、 義弘主欣然
許諾、俾久保乘夫船矣、
四月廿八日、與諸將俱解纜於壹岐島渡於對馬、海程四十
八里也、

五月三日、解纜於對馬到著於朝鮮國釜山浦、海程四十八
里、今日剛風、白波滔天黑雲靄靄、不辨前後左右方所、
是以漸明朝 義弘主乘船無恙知到著之故也、
同四日、發於慶尙道釜山浦、歷忠清道チンシヤブ、費數日於途中到

〔北郷忠虎譜中〕

文祿元年壬辰、因 秀吉公之命、兵庫頭義弘公 又一

於京畿道ケンギョウ王城、則又去王城守永平城、又江原道カクラン中有稱金化キンカ之地、可警衛夫地、以山中惡地五穀不熟、菜根亦不甚多諸般窮困、以故諸將辭此地去、所以予之父子爲警衛也、

〔新納旅庵譜中〕

文祿元年壬辰、朝鮮國征伐之時、太守兵庫頭義弘公、又一郎久保主、二月廿七日、首途於栗野、旅庵亦有供奉之列、留滯于大口之際、有可使京都之命、由此三月五日、發於大口、於中國達替米弁濟之儀於石田治部少輔殿、下肥前唐津反命 太守也、於此之時有命曰、安宅三郎兵衛尉殿薩摩下向也、旅庵亦共下薩摩、有可替米弁濟之運知謀高命、及固辭數度而不敢以許、不得已而歸薩摩、憑安宅氏所以貳萬七千石之致首尾也、

〔守右衛門尉影久譜中〕

文祿元年壬辰春、影久爲 義弘主從軍航朝國、而勞所所軍務、

郎久保公航于朝鮮國、忠虎爲從軍、同年三月三日發都城、凡相從輩者、北郷又五郎久根・同勝右衛門尉久兼・同彌左衛門尉忠政・同四郎右衛門尉久武・同久五郎久吉・同千次郎久種・同伊助久滿・同式部少輔久賴・同源左衛門尉久觀・同喜左衛門尉久陸・本田藏助親幸・小杉新七・土持吉右衛門尉重綱・和田與左衛門尉・同伴兵衛尉正綱・津曲太郎兵衛尉兼親、其外乘馬數十騎、兵卒數百人也、同十八日、着于肥前國名護屋、同四月十二日乘船、翌曉解纜、其日著于壹岐國風本、同月二十三日、著于對馬國府中、同二十八日、發同國飛崎、而著岸于朝鮮國釜山浦、同五月初日、發釜山浦、同十八日之夜半著五城、同二十五日、從公赴江原道警衛金化城而越年、同二年正月、日本諸將胥議、諸軍可集王城云云、依茲同月十六日去金化、同十九日歸王城、于此晋州牧司出兵、欲遮釜山浦與王城之通路、依之 義弘公御父子遷京畿內龍仁城、而欲支牧司、忠虎同二十一日、出都到龍仁、爰大明有和睦之儀、同四月二十一日、歸陣于釜山浦、然大明兵依不退、和平破欲攻牧司、同五月十三日、到昌原城、同七月、到于全羅道守巨濟城、俗稱唐島、此間處々合戰盡粉骨、家臣或被疵或戰死者多、同年閏九月六日、賜暇歸國矣、先是弟宗次

郎三久從同年六月渡海、依之使三久留朝鮮、而副忠虎之兵令從 義弘公者也、

826 「圖書頭忠長譜中」

文祿元年壬辰三月廿八日、 義弘主 久保主親子率薩隅日三州之兵、渡楫于朝鮮國、忠長在京師聞其事矣、

827 「桂神祇忠訪譜中」

文祿元年壬辰、朝鮮國征伐之時、 兵庫頭義弘主之爲扈從之列、五月、到于彼國、勞軍務者共六ヶ年也、

828 「樺山太郎三郎忠征規久譜中」

天正廿年壬辰、 兵庫頭義弘主蒙朝鮮征伐之命渡海之時、有供奉之列、且近習之爲小臣、于時傳御馬之術於 義弘主、時時習之、而粗有得其術者也、

829 「大田吉兵衛忠好初忠綱」

文祿元年壬辰、朝鮮國征伐之時、 太守兵庫頭義弘・又一郎久保主與諸將俱渡楫難海、忠綱有供奉之列、文祿四年、應 殿下徵、 義弘公揚歸帆、直上洛越兩年、而後

再渡楫于朝鮮國、此間不去膝下抽臣節、大明大軍攻朝鮮國泗川新城、于時討強敵一人也、

830 「新納忠元譜中」

「正文在新納次郎四郎忠饒」

今度三ヶ条、以神載深甚被顯心底、寔爲當家之爲我等、旁神妙候、春日 八幡 天滿天神茂御照覽、何様同心之儀、毛頭不可有忘却者也、

「朱力キ」
「文祿元年」二月廿八日 龍伯(花押)

新納武藏入道殿

「上包」
新納武藏入道殿 竜伯

831 猶久不申通、御床敷存計候、仍此道服一ツ、見苦候へ共、折節有合候間令進入候、以上、

玄旨下國之由候間令申候、其以來遙久不申通候、切々以書狀も可申述處、何角取紛乍存無音心外ニ候、先年尾山にて申承候事、于今難忘存候、近日御國衆高麗御渡海之由候、定而御息など可爲其分候、御心懸令察候、自然上方御用候者可承候、不可疎意存候、猶期後音候、恐々謹

言、
〔朱力キ〕
天正二十年二月廿八日
〔細川忠興〕
〔花押〕

新武州入道殿

御宿所

伏見方

羽越中

832 「御文庫廿二番箱七卷中」 「義久公御譜中案文有之トアリ」

就入唐之儀、御懇札畏悦之至候、仍義弘近日中可打立之
条、諸篇芳慮之段所希候、某事茂難而可罷登候、旁到名
護屋可申承候、兼又假屋普請之人夫過半召置候、猶追々
可申遣候、爰許之儀無緩申付候へ共、不如意之爲躰にて
迷惑仕候、於萬端可被加扶助事本望候、併以面可申據候、
恐々、

二月

賀藤主計頭殿

833 「義弘公御譜中」

「正文在桑幡左馬」

御立願之狀

正八幡宮御法樂

御入唐留主中之間

一 毎月一七日參籠之事、

一 毎月一百韻連歌之事、

一 壹千度參詣之事、

右、奉爲 御立願之趣者、藤原義弘并久保御兩殿就御

入唐、御武運長久、得大勝利、四海太平、船中安全、

軍兵繁茂、殊者公私如意、歸國安意、一々御願皆令滿

足奉御立願申處如右、

天正廿年 壬辰二月吉日

息長道武

834 「義久公御譜中_{天正廿年}ニあり

「此本在御文書方」

樺山玄佐の家にて詠之、

あつさ弓やそちの年の末になを

いくことふきの春にあハまし

「右同」

子細有ての返歌、

池水にふかきねさしのかくろいて

ひきわつらへるまも草かな

『盛香集』

一文祿の初、惟新王朝鮮國ニ御渡海の御首途ありし時、

樺山安藝守入道玄佐、

君か爲名のためとりしあつさ弓
「イニ家の爲とり傳へにしあつさ弓とアリ」

八十しあまりの身こそよわけれ

『全』

一新納拙齋も年長よハひかたふきて、漸御船元迄見おくり奉りて、

あちきなや唐土迄もおくれしと

おもひし事もむかしなりけり

『全』

一惟新公武藏江御返歌、

もろこしややまをにかけて心のミ

かよふおもひそふかきとはしる

又拙齋奉祝て、

から立や身のれはやかて歸國哉

『樺山紹劔自記』

一天正廿年壬辰、太閤様奈古屋迄御下向、茲年目城之人

衆高麗國へ發向、如此之日記別卷有、規久武庫様之御

供ニ而先勢也、權左衛門久高者又一様之御供ニ而渡海

也、高麗之都押通候而、おらんかいなど、云奥く迄打

廻候而、又都へ打歸候而番也、雖然赤國と云るニ目城

衆行不着所有、是を責候するるとて談合也、敵ニハもく

そと云るしやくハんか城也、程なく責取、其國打隨候

而、無手ニ立者としてハ心安し、去五六月本朝を立て高

麗具郡ニ而越年、寒事雖不及是非候、乍去年之暮之い

となミ杯と申處ニ、十二月廿六日きんはいと云所ニ陣

替、年越候する宿なしとて住居る處ニ、規久御宿は、

久高我が宿へ御坐候得とて寄合候而、せはしきながら

心廣き越年也、如形之祝共ニ而、

山端は立て春待霞かな

久高

天か下ハけふ立春の外もなし

規久

旅衣寒さ重て降雪や新まる春の名立成らん

規久

新玉る春ハ雪が明初て名のミそ霞む遠近の山

久高

如此候而、打慰むをことふきニ而そ有ける云々、

『長谷場越前自記』

般若寺別當坊
參

一彼の珍客ハ當國ニテ御年菅ツこさせられ、改る彈月の十九日ニ此國を御打出給ひて、如名護屋御參陳被成也、然ハ追付て 竜伯様も同廿日ニ御出馬ニて、如御陳御參上ましく、せバ一段之御感也、懸りける処ニ 兵部太輔入道殿の御取次者、無別儀社見得ニける、去程ニ 義弘様・同又一郎久保様吳國ニ御渡海ましく、せバ、三ヶ國之軍兵も各御供被申、有時ハ海上ニうかんで風波之難を凌宛、或時者上中下迄身を海底ニ沈ん事を痛す、菅岐對馬を懸ケ渡し高麗之地ニ着船して陸へ上りて被陳取、日本勢を待合せ奥陳を被攻、其國の數々ハ別の帖ニ記すなり、

840

「義弘公御譜中」

「正文在加治木兼白坂與一左衛門」

就渡唐之儀、名護屋へ罷出候仕合、可然之様以 御神慮不失義弘面目、當家長久候而、無吳儀於致歸國者、八木百石宛七年、
愛宕江可奉拜進候、以此旨御祈念所仰候、仍願文如件、

天正廿年

三月五日

義弘(花押)

842

「正文在文庫」 「義久公御譜中ニ在リ」

841 義弘父子待從軍之到著、三月上旬、發於大口到於肥前州唐津、而窺諸將之群集、俟渡船之未到有日于此矣、

先度琉球國へ御返書之儀、御出馬時分御取紛故、只今彼跡書能被加御披見候処ニ、上意ニ不入候条、被認直被遣候、最前之御朱印ハ可有返上候、次使者爲糧料銀子百枚被下候、被得其意可被相達候、猶石田治部少輔可申候也、
〔朱カキ〕
〔文應元年〕三月十四日 ○ 〔御朱印〕

嶋津修理大夫入道とのへ

843

「義弘公御譜中」

「正文」

去月廿一御狀、今月十四□於関戸拜見、旅庵口上□

承届候、

一又一郎殿并御女中□早々可有御上洛候旨、□數度申下候処、無其儀段併被輕 上儀仕合、不及是非候、

先度民部法印御使ニて、悉在京之女郎衆御改候、又一

郎殿御内儀于今無御上由候て、上様御機嫌惡候、誠

御家□まて候、拙者事以外相急□、一兩日中其地致

參着□懸御目候、又一郎殿御女中御上御延引候者、幽

齋□御取次斟酌□承□御心中難計候間、無

義候、

一又一郎殿可有御渡唐由候て、至而御着陣之由候、□

各御番組之事候間、毛利□渡海次第御人數不殘被差渡、

御父子者御小者一人にて□それへ參着候、□御人

數□

一上様へ御借用□御返上之儀少も相延□聞在儀共

不可然候、并□御兵糧米此二色急度其地へ被取寄可

然候、不可有□其様子具旅庵へ申□上様至而奈

子屋御□

一又一郎殿并御女中御上洛之儀申盡候、此返事旅庵態差

下候処、其否有無不承候段、無曲候事、

一此書狀參着次第□慥ニ御使可被相越候、□書狀進

候間、奈子□事可被仰越儀專用候、恐惶□、

〔朱力キ〕

〔天正廿年款〕

三月十四日

石治少

三成(花押)

羽兵殿

御報

844

「御文庫四拾八番箱中」

「義弘公御譜中正文在加世田衆伊加倉三左衛門トアリ」

「正文上文切ル、

いかゝに候、去年秋段米にて、一年中ニ借銀ことく

返弁可事成候由候キ、さてハ米之分量も大かたしれ

候之間、京都かハシニ申定候、唐人ニ取まきれ、替米

不成之通とり沙汰之由候、更不及分別候、唐人こしら

へ飯米等ハ出物べちに候、式斗四升段米ハ、去秋より

諸所へ相揃候辻、いかゝ成行候哉、各被相究、様子く

ハしく承度候、借銀之儀も 竜伯様最前御在京ニ御借

用候、其後我等上洛に借用候、兩分相混利平等過分成

候事、各存知之前に候、唐人ニ付、借銀返弁候ハてハ

不叶事候、不相届様子も我等へハ不承候て、かけの取

沙汰おもしろからず候、

一久保女中無御上洛候、三年前方被仰儀候之処、無御承

引事不及是非次第候、治少御腹立可有推察候、御上洛

候ハてハ、御家之御ためニ罷成ましきの由、我等しる

て申候、幸侃取分同心ニ被申候つる事、いまによく相

あたり候、以來之御ためを被申候事、ちか比たのもしき

儀候、なをくも申す、められ、急度御上洛專一に候、
一竜伯様此地へ無御出事、治少御無興候、早と御出候て
可然候、其方かいふんきもいり可被申候、

一其方不被罷立候、煩散と式に候共、をして可被參之由、
我等久保方も文を可遣之由、治少被仰候、病牀にて參
陳成ましきの通、能く申理候へ共、京風ハ煩出合候て
も、さし當る儀ハ申分もならず候間、是非共可被參之
由申遣候へと被仰候、此様子山伏も同座ニきかれ候、
罷成まししく候へ共、打立肝要候、

一我等打立候てのあとハ、國もとの様子何たる分別にて
參陳候哉と、皆く申爲候て、唐入之事ニハかもはず、
ゆるりと在之由、治少被聞食付之通、昨日被仰候、如
此之儀共風聞候へ者、何事もゆたんのミに候上めいわ
く迄ニ候、爰元の様子、ますくおひたしく候、唐
入ゆたん候ハ、時節到來迄に候、夜白御きもいり可被
成のよし、かこしまへ可被申候、爲心得申候、かこし、

〔文政元年〕

三月廿六日

義弘(花押)

伊集院右衛門大夫入道殿

〔御文庫廿二番箱七卷中〕「義久公御譜中案文有之トアリ」

今度安宅三下着、御懇切之儀候、諸篇可遂熟談之条、
本望此事情、

一久保女房衆上洛之事、日州舟本へ早速雖罷出候、天氣
惡ニ付、舟一圓不廻候て、徒ニ滯留候、併頃ハ日より
モ能候間、定而舟モ廻着候覽、さ候者追付出船モ可有
之事、

一愚拙早く可致參陣之処、持病之虫火急ニ候て、種々養
性取紛候、其上年寄共萬指合儀候て、乍老耄愚意計を
以、替米等諸事之儀雖申付候、一廉無之何共迷惑仕候、
于今延引候、然者安三幸下向候、誠得力巨細致談合候、
隙明次第やかて可罷登事、

一御物式千石之事、并御馬之飼、彼は無油断候、先日銀
子少く指登候、夫にて可致校量趣ニ候、其元にて兵
庫頭へも可被仰聞候、從是も懇ニ可申通候、

一家中之者共遲參之事、稱申付候、于今ハ不相殘、皆く
罷登候事、

一琉球綾舟之儀ニ付、南林寺宅万与八左衛門尉指登候之
処、中途にて安三參会、先く被召烈來着候、即琉使者
居所へ昨日八日遣之候、彼口から直ニ爲可申入候、馳
而兩人可參候、其節又可申達候、寔雖不新候、愚進退

之事、貴所御一人頼存、如此候上者、始末御扶助之義、尤所仰候、於心底聊無別儀候、不及申儀旁期面談候、恐と、

「此御書、龍伯様御宛書知レス、月日ナシ」

「御譜中、文祿元年孟夏欵ト朱カキアリ」

「朝鮮日々記」

一羽柴関白秀吉文祿元年壬辰ノ三月ヨリ高麗入トシテ、日本國ノ軍兵ヲ卒シテ九州ニ下リ、肥州名護屋ヲ高麗ノ渡リ口トシテ城ヲ^(櫓)棚、秀吉下向ニテ、諸國ノ家陣トシテ名護屋ヨリ廿里、平戸ヨリ八十八里ノ渡海ヲシテ、先壹岐ノ風本ニ着ク、内嶋之浦々ニ大船小船幾千万艘ト數ハ知レス、其ヨリ五十里ノ渡海シテ、對馬ノ東ノ浦・金ノ浦・オミ瀬戸迄舟ハ思々ニ着クナリ、内島ノ内ヲ一日乗テ西方ニ參リ、わんの浦ニテ船揃シテ出船ノ次第ヲシテ、前手ハ九州大名ニハ豊後大友左近將監・豊前住人森壹岐守・筑前住人黒田甲斐守・筑後住人屋那川ノ橋左近太夫・肥前住人鍋嶋加賀守・松浦法印・有馬・大村・日向住人伊東修理亮・秋月長門守・高橋右近太夫・嶋津又七・薩摩住人嶋津兵庫頭・肥後住

人加藤主計助・小西攝津守ヲ前トシテ、大船五百艘對馬わんの浦ヲ出シテ行ク、是ヲコソ見レ、諸國ノ舟對馬ノ浦ノニ掛ル舟、鱸網ヲトリ柱立、櫓槳ヲ取ハ天地モヒ、キ立、神モヲトロクヤウニシテ、思々心々ニ取梶面梶 行ク程ニ、四十八里ノ渡間ヲ、四月廿六日ノ卯尅ニわんの浦ヲ出して、朝鮮ノ内釜山浦ニ申酉尅ニ着、其ノ外南北ノ浦嶋ニ付舟ノ數、幾千万艘トハ知レス、朝鮮人ハ對馬ヨリ万ト馳掛候而、舟ヲ見テ臆クシテ山野ニ逃ケリ、然々者ハ都ヲ指シテ皆ノク成リ、日本人ハ其アタリ五里ナリ、間ハ發向シテ、少ク降ル敵ニ追ツキ討者モアリ、取者モ有リ、其ヨリ釜山浦ヲ陳ニシテ、備前浮田中納言ノ大將軍ニシテ、天下奉行衆、其外ハ國々大名小名并居タリ、脇陳ノ盛リニ竹島ハ鍋島殿、安郷ヲハ伊東殿・島津又七殿、其外ニモ有リ、こもかいハ豊前守橋殿・秋月・高橋、其外ニモ有リ、加徳唐島崎迄嶋津殿陣也、

尙以右之三ヶ条之事、能様以談合可被閉目段、專用たるへく候、乍重言此等之趣於相調者、後日ハ可御心安候、偏才覚頼入候、

國元之儀依不調儀、石田殿殊之外惡心ニテ候つれ共、別
而相頼候之条、從其被成御入魂、安三兵既被差下候之間、
各入念替米并御進上米等之儀、相調候之樣頼入候、隨而
太守樣此地へ御上着、遅く不可勝之由候之条、近く可被
差急事專一ニ候、兼又御祈仁御上洛之儀、無御油断樣ニ
急可被申上候、此三ヶ条さへ於相調ハ、御家も可爲御安
泰かと存候、自然右之内一ツも不相調候ハ、啖止迄た
るへく候、各肝煎此時候、恐く謹言、

〔文應元年〕

卯月一日

義弘御判

伊集院下野入道殿

吉田美作守殿

比志島紀伊守殿

稅所越前守殿

以上

848

去年以來者、書狀ニ而も不申入、無御心本存候、然者就
鷹之巢儀、被成 御朱印被下候、然共於椎葉山、前々巢
本多候間、其元ハ罷下事延引申候間、先く使者遣、巢本
相尋申候、萬事憑入候、次去年申置候鳩之儀、此使へ御
渡被成候て可被下候、 御朱印持せ申候間、御受取可然

候、猶期後晉候、恐く謹言、

〔天正三十年〕

四月二日

落合新八郎

重次(花押)

新納武藏守殿

849

〔正文在新納氏〕

猶く左京亮普請付て、夜白辛勞無申計候、

好便之条染筆候、仍留守中國元之儀、諸事頼置候之由、
定任世可申達候、然處此地迄可罷出之由候、病中彼は大
儀至候、兼又渡唐船一圓不廻候、外聞実儀無是非次第候、
乍去九州衆なミの事候ニ、先くかり船にて 武庫樣令御
供渡海候、いづれも見參候刻可申候、恐く謹言、

〔天正廿年〕

卯月六日

久保(花押)

新納武藏入道殿
(忠元)

850

〔正文在新納氏〕

猶く今度出陳之調不事成ニ罷出候儀、且ハ 竜伯樣
御身上之御爲、且者御國家之爲にと存立之儀不淺候、
旁得其意度候、老岐嶋之事、小嶋にて兵糧以下求候
事にも不成候由候、國よりの見つき及遅く候者、や

かてうへニのそミ候へき儀必定候、無御油断被仰付

候て可被下候由、竜伯様江可被申上候、已上、

其後以書狀成共可申候之處、取紛無其儀候、

一渡唐之用意并替米之事、首尾難調之由、石治少被聞通、

竜伯様へ可有御入魂之由候て、安宅三郎兵衛尉殿被差

下候、石治少存分ハ諸神八幡も御照覽、何としても

御家御長久にまし〜候へとの存分不淺ときこえ候、

安三兵被差下候儀共、大方之事にてハ無御坐候、能

被成御熟談、いかやうと首尾候様ニ可有御才覚候由、

切〜可被申上候、國之儀不調ニ付てハ、何を申候而も

御滅亡不可有程候、不可有御油断候事候、

一渡唐船壹艘も不廻候て、外聞実儀迷惑申候、九州衆な

ミの儀に候間、先〜かり船にて我等夫子令渡海、人衆

者殘置候、國よりの船上次第可罷渡旨、申付跡に候、

左京亮ものこし置候へきとの儀も候つれ共、小者一人

にてなり共、側を立退ましきよし申候間、先食列候、

やう〜五六端帆之船十そうほとにて渡海候、あはれ

をと、めたる事にこそ候へ、中〜申もいか、に候、

恐〜謹言、

「朱カキ」
「文祿元年」卯月六日

義弘(花押)

新納武藏入道殿

「此御書、二通共忠元譜中ニ在リ」

851 「御文庫廿二番箱七卷中」義久公御譜中ニ在リ

綾舟御進物如之儀、石田殿被聞、笑止之由候て、昨日

七日安宅三下着候、就夫直被仰通候之条、加愚札候、可

然様才覚肝要候、恐〜、

「朱カキ」
「文祿元年」卯月八日 竜伯 草案

琉球國

建善寺へ

852 龍伯様御上洛中、於神前御被可申由被仰付候、毎日無油

断御祈念可被申候、祓之事ハ爲何祓ニても候へ、其方存

知之前ニ候する条、不能口能候事候、恐〜謹言、

「天正廿年此款」 長壽

四月十一日 盛淳判

二之宮隱岐守殿

853 「義弘公御譜中」

日本文祿元年壬辰者、即大明萬曆廿年也、大樹前關白

豐臣秀吉公爲朝鮮國征伐之勤指揮、三月將赴筑紫、群臣獻諫曰、君在名護屋遙應朝鮮、則大明朝鮮書牘往來其必

多矣、攜有文才者而可也、若不然、則尺牘來時何得知其意旨乎、秀吉曰、吾可使明朝鮮人拋其文字、悉知吾

國以呂波何難乎、豈徒攜學生乎、群臣不得覆稟、其夜

秀吉魏思、乃使相國寺僧承免、南禪寺僧靈王、東福寺僧

永哲共赴名護屋、廿六日、秀吉出京、使洛人見其軍粧、

此夜 秀吉到攝津國茨木、而後進馬、四月初、秀吉到

安藝廣島、而留稽一二日、又遊嚴島眺望社邊、進到長門

國府拜仲哀天皇・神功皇后社祠、又臨赤間關到阿彌寺、

寺中有安德天皇之小影及平家一族之畫像、古人賦詩詠歌

者、皆貼置之於其側、寺僧出語故事、秀吉悅、遂進到

肥前名護屋、諸臣受命經始旅館、秀吉分施四十八萬人

之米穀於諸軍及舟子・馬芻、

海路諸將到九鬼大隅守嘉隆宅、而評軍事、各裁誓詞以示

其衆凡七條、其一曰、船中之軍議最可擇其宜、其二曰、

諸船若臨危難、則可相救之、其三曰、若得聞敵謀、則可

互告之、其四曰、忠功之淺深不可有私曲偏頗、其五曰、

盜他人之軍忠以爲我功必可固禁之、其六曰、每將必可出

諜船二艘、其七曰、告事於名護屋、則必問監察使、而後

達之、不可私告也、七條之約法既定、若有罪犯、則靈神其罪之、誓盟事畢設酒宴、

諸國之軍衆悉以群聚肥前州名護屋、漸待得渡楫佳期、各

迄將解纜之時、而薩摩之舟船未有一隻之到當津、不得已

而求得賃舟、先欲渡壹岐島、四月十二日、與小西攝津守

行長・加藤主計頭清正・黑田甲斐守長政等諸將俱、解纜

於名護屋渡於壹岐風本、而數日爲逆風諸船共被留、是以

遠望海上、而領國未曾到著、父子及扈從臣等所以失計略

絕言語也、丁此之時、數根藤左衛門尉賴元之私船九端帆也、

只一隻到于此地、則賴元曰、爲之於義弘之乘船者可乎、

吾欣然許諾、俾久保駕夫船、吾駕加治木舟五枚帆也、者也、

854 「北鄉三久譜中」

文祿元年壬辰春三月、義弘公・久保公應 殿下秀吉公

命航朝鮮國、三久爲 公之從軍在陣于朝鮮國、陷數多城

郭抽戰功、

855 「北鄉氏庶流系圖抄」

四郎右衛門久武大放助久猶之子、

文祿元年壬辰三月、忠虎帥渡海于朝鮮國、久武從之、

天正廿年壬辰、殿下豐臣秀吉將軍家欲伐朝鮮國、催日城東西之士卒、秀吉公亦渡御于肥前奈護屋、兵庫頭

義弘主・同又一郎久保公率薩隅日之兵、三月廿八日、到于奈護屋、于時久保公召出久高於屈居、欲朝鮮征伐之

爲從軍、於茲改姓名任樺山權左衛門尉、且賜貳百斛之領地、使久高爲陣中之執事、雖然數年之依逼塞、家臣兩三

輩之外莫從到者、是以教申木野・天辰兩所士卒悉寄久高、以勸家老之役、無恙著朝鮮之岸、已過京畿、將臨年、十

二月廿六日、忽以稱金化之地爲陣所、以月迫不得營作、與兄規久俱同宿會新年矣、

朝鮮國有奧陣之日、義弘主・久保公於會合之席、有賜一萬石之地於久高之約、謹以爲拜謝畢、

857 「征韓傳略」

一文祿元年壬辰明萬曆二十年、○朝鮮李昭二十九年、○朝四月

十三日、行長・義智・鎮信・純玄等直侵釜山、西征日記、吉

野覽書・懲感錄、釜山之民與我邦往來、互市或有通婚姻

信等據松浦家記、者、彼稱之倭戶或麗倭、平撰我軍以爲鄉導、征伐記、

行長令曰、兵器外不須攜、速拔城因敵糧而會食、鍋島家記、

釜山城背高山據要害、兵凡二萬餘、征伐記、釜山僉使鄭撥

偶出獵絕影島狼狽入城、我兵隨至四面雲集、懲感錄、自後

山下視發銃、城兵不支逃散、我兵追擊城兵殲焉、征伐記、

○大開記曰、斬殺八千五百餘人、虜獲二百餘人、○又按鍋島家記曰、

李雄・李一雲守釜山城、李松遣孟明伯援之、城陷、孟明伯戰死、李雄

等名諸書所不載、故不採焉、不移時城陷、鄭撥死之、釜山沿海鮮軍列

戰艦數十里、水軍將藤堂高虎將取唐島、按、本邦呼

半竊進船奪哨船百餘、上陸放火、我軍續進取哨船上陸、

監軍與衆議、將白其功于名護屋、加藤嘉明亦在座、竊

避去遽令手下發船、監軍馳使之曰、相約共進、勿獨

先、嘉明曰、少年輩乃爾、非親往恐不得止也、言畢直

去不顧、見勢不可已諸將亦進、朝鮮哨船四十艘餘爲前

列隔里餘、戰艦浮海無數、嘉明以寡兵冒矢砲、一跳乘

敵船、兵士相從疾戰奪敵船十艘、餘船不能敵引去逃後

船間、諸將亦奮擊將奪敵船、鮮人素練水軍善操舟、且

善射多、廻船雨射、衆寡不敵死傷無算、衆軍將退、脇

坂安治怒突入敵船死、戰部兵半盡、安治室老諫曰、徒

死無益、先避銳、強令上岸、鮮兵遂奪安治船、衆益不

競、征伐記、來島通泰挺衆指揮中矢而死、蜂須賀家政臣森

村春擊奪舟二艘被傷而死、長曾我部元親亦苦戰、燒敵

船從兵多死、土佐島津義弘見其進退難令部下曰、我

物語、

兵勿必取敵船、來往馳走破敵船中間、彼求戰惟射而却之、部兵如令、鮮人果勞倦不能復戰、歛兵而退、監軍議曰、此役高虎乘夜奪敵船、先侵唐嶋、然敵適寡而無大勞、如嘉明敵船就明處多爲備、而寡軍挺衆親奪船艦十數、其功無比倫、告之秀吉、秀吉大喜、賜狀賞之云々、略ス、

「御文庫廿二番箱四卷中」「義久公御譜中片書ニ御文書方トアリ」

薩摩之内

鹿兒嶋寺社領

一寺付 廿參町三段參畝

一上地 四拾六町六反七畝

薩摩之内
谷山

一寺付 參町壹段壹畝參分

一上地 六町貳段貳畝參分

薩摩之内

伊集院

一寺付 拾八町九段貳畝拾七分

一上地 卅七町八段四畝廿五分

薩摩之内
市來

一上地 廿四町參段貳畝

一寺付 拾貳町壹段六畝

薩摩之内

永吉

一上地 七町六反八畝拾分

一寺付 參町八反壹畝廿分

薩摩之内

日置

一上地 四町八反七畝拾四分

一寺付 貳町四段參畝十分

薩摩之内

平佐

一上地 貳町五反壹畝廿分

一寺付 壹町貳反參畝廿分

薩摩之内

山田

一上地 參町五反

一寺付 壹町貳反五分

薩摩之内

隈城

一上地 七町五畝拾分

一寺付 參町五段五畝廿分

薩之内も、つき
百次

一上地 參町九段參畝

一寺付 壹町九反六畝

薩之内
串木野

一上地 拾八町六段

一寺付 八町八反

薩之内
高江

一上地 六町貳畝

一寺付 參町壹畝

薩之内
吉田

一上地 拾町壹段四畝拾七分

一寺付 五町七反八分

薩之内
伊作

一上地 廿貳町六段九畝拾四分

一寺付 拾壹町參反四畝六分

薩之内
阿多

一上地 拾壹町四反四分

一寺付 五町六反七畝拾六分

薩之内
田布施

一上地 拾參町四段四畝拾分

一寺付 六町六反壹畝拾九分

薩之内
加世田

一上地 廿參町壹段七畝四分

一寺付 拾壹町五反七畝拾六分

薩之内
川邊付山田

一上地 拾九町六反五畝廿分

一寺付 九町八反參畝廿分

薩之内
大口

一上地 卅七町參段參畝拾分

一寺付 拾八町六反六畝廿分

羽月

一上地 拾貳町

一寺付 六町

薩之内
平和泉

一上地 貳町貳段

一寺付 壹町壹段

大隅之内
帖佐

一上地 貳拾壹町五反九畝廿四分

一寺付 拾町七反九畝六分

大隅之内
蒲生

一上地 拾五町七段六畝

一寺付 七町八反八畝

大隅之内
曾於郡

一上地 拾町五反廿七分

一寺付 五町貳反四畝廿八分

隅之内
馬越

一上地 拾貳町貳反五畝

一寺付 六町壹段貳畝

隅之内
曾木

一上地 七町參段三畝拾分

一寺付 參町六段六畝廿分

隅之内
壹山

一上地 壹町八段六畝廿分

一寺付 九段參畝十分

隅之内
湯之尾

一上地 五町參反參畝拾分

一寺付 貳町六反六畝廿分

隅之内
吉松

一上地 參町八段壹畝

一寺付 壹町八反七畝

隅之内
栗野

一上地 六町壹段拾分

一寺付 參町五畝廿分

隅之内
横川

一上地 參町六反五畝廿四分

一寺付 壹町八段

日州内むかき
穆佐

一上地 七町六反

一寺付 參町八段

日州
大崎

〔本マ、レ〕
一寺付 壹町壹反四畝拾分

一上地 貳町二反八畝廿分

日州
松山

一上地 八段六畝廿分

一寺付 貳町貳反八畝廿分

日州

加久藤

一上地 貳町壹段四畝廿分

一寺付 壹町七畝拾分

日州まんく八だ
馬関田

一上地 四町六畝廿分

一寺付 貳町參せ拾分

日州
小林

一上地 六町四反五畝拾分

一寺付 參町貳反貳畝廿分

日州之内眞幸

吉田

一上地 四町壹段廿分

一寺付 貳町壹段

日州

野尻

一上地 九段參畝拾分

一寺付 四段六畝廿分

日州之内

藏岡

一上地 參町四せ

一寺付 壹町五段壹畝

日州之内

内山

一上地 壹町七段四せ

一寺付 八段六畝

日州

志布志

一上地 廿四町八段

一寺付 拾貳町參反九畝十分

日州

飯野

一上地 貳拾參町壹段六畝

一寺付 拾壹町參段參畝

右、寺付貳百四拾壹町四反歩ハ此外也、

上地四百八拾參町七段歩此外有、

隅之内 下城

隅之内 隅麥刈 本城

日州之内 綾

日州之内 八代

日州之内 紙屋

薩之内 高橋

隅之内 敷祢

薩之内 喜入

薩之内 入木院

隅之内 根占

薩之内 宮之城けたうみん

隅之内 清水

隅之内 加治木

隅之内 垂水

一上地 貳町四段七畝廿歩

一寺付 壹町參反壹畝

牛祢

寺社は方めんきよ、但半役もあり、

一 鹿兒嶋 大乘院 田數廿町

一 同 莊嚴寺 田數四町

一 同 福昌寺 田數廿八町

一 同 安養院 田數六町五段

一 同 淨光明寺 田數拾貳町

一 坊津 一乘院 田數參町五段

一 顯娃 是ハ奥神領 田數拾町

一 飯野 開門 田數參拾町

一 白鳥 田數參拾町

『在吉松般若寺』

覚

- 一 同 狗留孫 田數參町
- 一 隅之内 霧嶋 田數卅町
- 一 正八幡 田數卅町
- 一 薩之内 八幡 田數四町
- 一 八幡新田宮 田數廿町
- 免許寺社領分
- 都合貳百町五段
- 天正貳十年卯月吉日
- 一 寺社家所領田畠共ニ三分二を被召離候事、
- 一 小寺社家ニ到迄、右一同之可爲御扱事、
- 一 寺社家共ニ當持共格護之仁かくせられ懇意事、
- 一 持合之方かくれさるニおひてハ、諸人へうらせられへき事、
- 一 一町ニ付、上田者銀子百目、中田者七十目、下田者五十目ニ被相定候事、

一代物者金銀米錢之間可然事、

一畠方ハ其所之祢宜御給次第たるへき事、已上、

天正廿年四月十四日

般若寺領此度京纏之田數之事

本坊分

田方參町六段貳畝七步

分米四十五斛貳斗八升五夕

島方貳町八段廿四分

分米拾三石五斗六升三合二夕

右之田畠打出廿四石六斗貳升七夕

脇坊分

田方參町貳反一畦廿步

分米廿八石六斗壹升九合

島方壹町八段六畝十分

分米十貳石三斗五升七合九夕

右之田畠打出十七石貳斗二升二合八夕

惣以上打出都合四十六石六斗三升七合五夕

『義弘公御譜中』「正文有之トアリ」

「義弘公御譜中ニ在リ」

禁制

高麗國

急度被仰出候、高麗江渡海之儀、九州・四國・中國船共相揃、軍兵可罷渡旨、最前雖被仰出候、無御心元被思召ニ付、紀伊國警固舟、藤堂(齋藤)佐渡守被仰付、并九鬼大隅守(安也)脇坂中務少輔・加藤左馬助、備前之警固船重而被仰出被遣候条、各申談令渡海、高麗之舟付へ陣取候而、御注進可申上候、但順風能く見測可相渡候、越度無之様ニ可被入念候、先勢行詰ニ付、今日十九至于小倉被成御着座候、猶黑田勘解由可申候也、
「カクカキ也」「朱カキ」
「天正廿年」 卯月十九日 ○ 「御朱印」

文祿元年四月廿五日夜半、強風漸減、然白浪未穩、爰小西攝津守行長謂、海濤若穩則諸船可皆發、不如先人而速入王城也、其夜潛解纜到對馬豊崎、其夜諸將等平明驚行長舟之不見、而均解纜進歷五六里、忽被逆風吹、又歸風本也、

「義弘公御譜中」

羽柴薩摩侍従とのへ

「義弘公御譜中ニ正文有之」

掟

高麗國中

一軍勢甲乙人等、監妨狼藉事、
 一放火事、付人取事、
 一對地下人并百姓、臨時之課役、其外非分之儀申懸事、
 右条々、堅被停止之訖、若違犯之輩於在之者、忽可被處嚴科者也、
「御朱印」
 天正廿年四月廿六日 ○

一御法度如一書各判形を仕、在くへ遣之、地下人可召直事、
 一兵糧改事、公方米分者悉相改、藏へ可入置事、
 一百姓・町人還住仕候て有之者共ニ、米錢金銀を相懸不可取之、但捨置於不立歸者、可改置事、
 一高麗へ越候人數兵糧無之者ニハ、切手次第ニ扶持方可相渡事、
 一かつゑ候百姓於有之者、見計、かつゑさるやうに令分別可申付事、
 一在く所々放火仕間敷事、付今度乱入刻、人捕仕候ハ、不寄男女其在所くへ可返付事、

一法度以下猥於在之者、有様ニ可申上旨誓紙を仕通、各

ニ可申聞事、

一高麗渡口より都迄之路次通御泊所、城々有之而、各明
隙次第ニ御座所之普請可仕之旨、可申渡候付、在番仕
候城近所、其者法度以下申付、知行方札明可仕事、
右之趣能く相守、諸事無油断可申付候也、

天正廿年卯月廿六日

○「御朱印」

羽柴薩_一侍従とのへ

右条々、御奉行共ニ被仰付、雖被指遣候、御法度之儀、
衆へも爲可被知、如此候也、

「在御案文御文庫廿二番箱七卷中」「義久公御譜中ニ在リ」

「正文在新納氏忠元譜中ニ在リ」

就入唐、此節ハ弥公役稱、世間茂危故、當家一段折角之
至候、因茲地頭職分各獻上之儀定候欵、然ハ拙齋事者累
年之粉骨及度々、諒吳他儀候、併除軍功、先々衆並之合
点尤令感悅畢、於向後聊不可有忘却者也、仍證據如斯、

天正廿年卯月廿八日

龍伯(花押)

新納武藏入道殿

「上巳」
新納武藏入道殿

龍伯

急度被仰遣候、於京都都被思召候者、名護屋ニ三十日も御
坐候て、先々ハ人数をも被遣、其上ニて可被成御渡海
と思食候へ共、名護屋へ御着座被成候へハ、片時も急御
渡海有度候条、各手前舟有次第、隨奉行相添、至名護屋
可差越候、御自身可被成御請取候、渡海之衆人数多少之
儀者、舟數ニて可相見候条、荷物悉上置、商人舟迄手前
持内相改、可差越候、此時ニ候条、少も於油断者、其曲
有間敷候、委細安國寺(忠魂)西堂・寺澤忠二郎兩人ニ申合候、
尙以各油断候て舟越候ハすハ、御直之船計ニて、一万式
万にても高麗へ無御座、すくに大明國へ可有御座候条、
八幡大菩薩各ニこされ候ましく候也、

天正廿年「壬辰」

卯月廿八日

○「御朱印」

羽柴薩_一侍従とのへ

「義弘公御譜中ニ在リ、糺合ス」

「御文庫式番箱中義弘公ノ巻」

急度被仰遣候、於京都云々、

「卯月廿八日付御朱印同案左之通、義弘公御譜全文アリ」

嶋津又七郎とのへ一通(豊久)

松浦刑部卿法印一通(鎮信)

羽柴安藝侍従とのへ一通(毛利秀元)

羽柴土佐侍従とのへ一通(長宗我部元親)

宇久大和守とのへ一通(純玄)

鍋嶋加賀守とのへ一通(直茂)

羽柴備前宰相とのへ一通(宇喜多秀家)

秋月三郎とのへ一通(種長)

來嶋兄弟一通

羽柴薩門侍従とのへ一通(森弘)

小西攝津守とのへ一通(行長)

羽柴對馬侍従とのへ一通(宗義智)

「又七郎豊久譜中」

羽柴小早川侍従とのへ一通(隆憲)

有馬修理大夫とのへ一通(晴信)

加藤主計頭とのへ一通(清正)

福嶋左衛門大夫とのへ一通(正則)

生駒雅樂頭とのへ一通(雅正)

戸田民部少輔とのへ一通(勝隆)

毛利壹岐守とのへ一通(吉忠)

蜂須賀阿波守とのへ一通(家政)

黒田甲斐守とのへ一通(長政)

伊藤民部大夫とのへ一通(重)

大村新八郎とのへ一通(嘉前)

夫 豊臣秀吉公雖生民間、天性寛仁大度剛毅大勇、且已

補任關白、奮武威施政道、故有 朝敵之起四方、則往以

退治、所向莫不降伏、是以尺地無非其有也、一民無非其

臣也、既歸一統矣、雖然未足其心、而渡于大明朝鮮共欲

入于手裡、築陣營於鎮西肥前州名護屋、終土木之功、則

文祿元年壬辰之春、催于日域東西士卒到于名護屋、巖數

「正文在島津安藝守久雄」

千之軍艦選將帥定行伍、季春解纜令渡朝鮮國、豊久亦引三十餘騎歩卒、共五百餘員馳隨其軍、著船於釜山浦與諸將俱攻入都門、而國王以下逃去、無一人之有敵兵、同五月上旬、發於王都赴於奥州、平安道・ハンケン道・ハン海・カアン道共四道入手裏、カアン道之内有稱春川之城、豊久警衛之際、朝鮮人六萬騎寄來、所以攻責甚以急也、雖然似無人者、未有一人之發出城門、敵軍乘之進于城壁、于時鐵炮一百餘挺、同時所發之者迄于十度、敵軍將退、乘其變出城門、五百餘人爭先防戰、敵軍已敗、追亡逐北斬獲五百三十餘員、其中王都之大將クハンサス・カアン道之將カウセン得兩輩之首、經兩日後築頸塚矣、其外所屠殺于街巷不知其數也、此時家臣戰死者脇岡勘五郎・雨田乗介・野々村傳右衛門・八木仲藏・平井與右衛門・松浦神助・木下助六等也、被傷者不遑記也、其聲既達大將之聞、則得感贖矣、

急度被仰遣候、於京都都被思食候ハ、名護屋ニ三十日も御座候而、先々御人數を被遣、其上にて可被成御渡海と思食候へ共、名護屋へ被成御着座候へハ、片時も急御渡

海有度候条、各手前船有次第、慥奉行相副、至名護屋可指越候、御自身可被成御請取候、渡海之衆人數多少之儀ハ、船數にて可相見候間、荷物悉上置、商人船まで手前

持内相改、可指越候、此時にて候条、少も於油断者、其曲有間敷候、委細安國寺西堂・寺澤忠次郎兩人ニ御舍被遣候、尙以各油断候て船越候ハすハ、直御手船計にて、一万二万にて高麗へ無御座、すくに大明國へ可有御座候条、八幡大菩薩各々こされ候ましく候也、

「朱力キ」
「文祿元年」卯月廿八日

鳴津又七郎とのへ
(重久)

870 「義久公御譜中」

文祿元年壬辰之春、依朝鮮國征伐之有大謀、日域四方諸將悉屯肥前州名護屋、龍伯亦在彼地矣、四月之末、家康卿罹大病臥床褥矣、典藥數輩以、大閤秀吉公台命不去座右、盡醫術勸良藥、而未有藥驗、三官聞之曰、以、家康卿舌頭、去年自己之宥死罪、續身命不蒙小科不爲屈居、所寤寐緩々然者、其厚恩高於太山深於蒼海、只所願者、丁此之時參進座下、迨診脈勸良藥、報舊恩有此時訴焉、仍使喜入大炊助久正告渠之所訴於、家康卿、卿即爲許諾、

召座右迄診脈、退告曰、傷寒不輕脈證也、卿曰、服用三官之藥、於茲典藥數輩同意曰、此間勸湯藥者依、秀吉公台命也、自今已後於被用三官之藥者、速可及、秀吉公台聽、故就石田木工助被達、台聽、大閤報曰、我嘗聞之、明人藥方不甚和順、各先書配劑互致糺、以其上服藥可乎、是以各書配劑謂藥方之至理、三官皆見配劑書曰、延壽院玄朔藥方甚好、其餘不合病證乎、聞此言而、家康卿決定于三官之藥服用、仍留居三官於名護屋營中、使渠良藥於諸醫之調合目前、且三官自煎藥勸之、殆乎一七日許、已令迄復本、家康卿欣々然、昇金帛於三官者甚以多矣、於此時藥方餘多傳受三官云云、貴賤皆云、如此者亦無隔心龍伯之所致也、

871 「義弘公御譜中」

行長在豊崎、馳心於朝鮮而逆風未止、四月廿八日、海上不穩而爲順風、慮諸將等渡來、酉時解纜凌風波進、而到釜山浦、朝鮮國慶尚道、海口之地名也、即進攻城、朝鮮兵二萬餘守焉、飛羽箭如降雨、然而行長頻放鐵炮、急攻之遂拔之、鏖八千五百餘人虜二百餘人、乃召狄鞬而問近隣之諸事、答曰、去此三十里程有一城、曰登萊、行長聞此言向諸士言曰、

今晨之奮戰無可比類者矣、今日緩衣帶解鞍馬休憩而可也、然而登萊聞釜山浦已陷而拒守、若密則拔之、其或不易乎、且我陷朝鮮之兩城於一日之中、播武名於天下、受秀吉公之深感、則不亦大幸乎、汝等努力請攻登萊、衆皆同之、以故行長午下刻率多兵、發於釜山到於登萊攻城、城兵聞釜山已陷慶衆兵之故、周章不得防之奔壘逃走、行長之臣小西主殿助・木戶作右衛門等追北斬首九百餘級、行長大悅陣登萊、息人馬者也、

文祿元年四月廿八日、與諸將俱義弘父子解纜於壹岐島、渡於對馬望見諸國軍船、匪啻飾華美、其數亦衆多也、以故慙自船卑陋與少寡、而繫己之船於島陰、窮困之至非言語之可得而伸也、

小西行長將進兵於忠清道忠州、狄鞮曰、忠州者地形最美、是王城之衛護也、驍將數人領兵士六七萬、守焉、糧粟豐盜且能射者多矣、彼城全故朝鮮王城未大亂焉、行長領之、備前宰相浮田秀家者其軍在第八列、秀家恐行長先于諸人而疾進深入有不虞之變、若曬屍於異域、則秀吉公之損失也、我亦施恩於彼既有年矣、尤可憐之至也、不可不救、家臣等亦皆云可也、因是五月初日之夜、解纜於對馬、翌早到著于釜山浦、行長之家人守釜山浦者喜秀家之渡海、

而詳言行長戰功之事、秀家感之、五月二日、裁尺素贈行長、行長大勸也、

加藤主計頭清正被奪先陣於行長、而大恚曰、履行長之過路亦不憚于我心、乃進船於熊川登陸路、而聞行長之軍功大怒曰、今日以後不可使他人爲先鋒、唯吾勤之耳、

行長聞清正等既到著、則與家人俱胥議曰、進忠清道陷忠州城彌揚勇武、弟小西主殿助及本戶作右衛門等亦勸之、是以行長率軍衆疾進其地、丑時也、遽攻忠州城、夜中以發于不意、城兵大亂驚駭爭先逃走、然而五六千人殘留、發矢揮刀連干戈奮戰太甚、行長俾忍兵五十許到城後燒山下、城兵不得防禦、逃走死亡者不知幾千萬也、

朝鮮王李^{リョウ}哈聞忠州城之陷、而狼狽北逃于義州、國妃及太子臨海君^{イハイ}君^{シユナ}璋^{シユナ}顛沛逃于兀良哈矣、

文祿元年五月三日、義弘父子著朝鮮國釜山浦岸、翌旦向國中所以進發也、

872

「義弘公御譜中」

加藤清正・同遠江守・黑田長政・鍋島加賀守直茂等忠州城邊當辰已在廣野、各屯彼地、而招行長欲決于都入之評議、五月六日早朝、行長來于此焉、清正進曰、吾必爲前

鋒矣、行長笑曰、朝鮮之先陣者我也、是 秀吉於日本所決也、今若私改之、則敗 秀吉之法也、我決而不可從焉、清正曰、法令縱雖如此、而前陣者在其武勇而已、行長怒將相鬪、直茂制曰、先陣固在行長、然而行長以其謀既拔三城、今也、入于王城、則行長・清正相分進兵者可也耶、行長心服曰、自此地至王城其路有二、南大門者行程百里許、其間有大川、東大門者行程百餘里、雖纒遠、而其間無大川有大山、隨清正之所好而已、直茂等感之、清正曰、縱有大川、而吾其隨行程之近、進于南大門云尔、

三月、尾崎新兵衛正義・持永右馬允盛政以上戰場詳かならず

五月、脇岡勘五郎島津豊久の臣にて、從て朝鮮に就し、春川城を成り、敵を防ぎて死之、下皆同じ、雨

田乗介・野々村傳右衛門・八木仲藏・松浦神助・平井

與右衛門・木下助六、

六月十七日、伊地知勘解由左衛門重元此月十五日、高麗俗雄山に於て戦死ともあり、家臣等七人も亦同じく死之、隈元金兵衛重元、大峰太郎三郎同上、高橋

吉次同上、宅間源太兵衛同上、源左衛門姓なし、同上、鎗持覺助

同上、中間藤太兵衛同上、伊地知源五宅間・隅元等

七月十八日、伊東雅樂助心岳君瀧ヶ水にて自殺めされし時殉死、以下皆同じ、西牟田

「古御文書三番箱中」

隱岐守・本田四郎左衛門・本田次郎五郎・東郷刑部丞・中馬源介重次・大山帶刀長・奥彦助・小川四郎兵衛・大迫隼人介・上床新介・鎌田因獄佐・竹下助八郎・鶴田主税助・長倉兵部少輔・成合城介・村松主殿助・内田主馬首・古川與次郎・有川新五郎・木脇民部丞祐春・切通小七・三原源六年十六、子孫東郷の士也、宮内伊豫守・島田右近丞親宗・鱧讚右衛門・大山首馬、十一月、松永左右衛門戰場詳かならず

義久

時しもあれけふ又夏に咲かへる池の藤なみにやハ見ん

近比之珍重なる御作意、殊勝に存候、以口上承候趣も能と分別申候へハ、猶いまさり候欤、夏又春尤存候、

「以上一通」

観音薬師 上のおしやかに はなる、と や、こや 屋を見す て、は えゆくさいの

竜伯

松の葉は夕日なからの時雨哉

あらはるゝこゑや浪間のさよ千鳥「友トモ」

神かきの雪やしらゆふ風もなし

「右一通」

875 「古御文書三番箱二卷中」

嶋津殿(印)

「張紙」
「印文義久」

夕たちの朝またきよりかゝり來て

なかれのつゝみこゆるしら波 龍伯

薩州大守嶋津殿 夕たちの □

龍伯短 壬辰五 神田印

「按ニ、壬辰ハ文祿元年ナルヘシ」

876 「義久公御譜中」

「正文在野村但馬盛綱」

先年於日州抽忠節之儀、于今令欣悅早、然処今度大隅山

田城之事懇望之条、即任存分、弥到向後可勵奉公之狀如

件、

天正廿年五月三日

竜伯(花押)

野村備中守殿

野村備中守殿

竜伯

877 「義久公御譜中」

「正文」「御文庫三番箱中」

端午爲祝儀、生絹三・染色二・帷子五到來、悅思召候、

猶石田治部少輔可申候也、

五月三日 ○ 「朱印」

嶋津入道殿

878 今度唐入之儀被仰付、既武庫父子被致渡海候之上、拙者

亦名護屋可參由承候之條、即應其儀候、寔數年在京故、

國家雖令困苦、各以熟談高麗へ之見次、并なこや在陳京

都調其外執代等、又者船手之儀、夜白無油断可指上事頼

入候、當家一難儀相及事眼前候、然處不入精仁有之者、

任京儀可致其成敗候、併各於入魂者、當家可令連續之条、

弥才覺專一候、仍證跡差出候之上者、縱令雖有無理之儀、

國家之爲たらハ、善惡可同心之間、可御心易候、然時者

捨遠慮可扱者也、仍狀如件、

天正二拾年

五月四日

龍伯(花押)

伊地知伯耆入道殿

本田右衛門佐殿

新納旅庵

山田越前入道殿

稅所越前守殿

鎌田出雲守殿

本田因幡守殿

川上參河入道殿

新納武藏入道殿

平田美濃守殿

町田出羽守殿

「町田久倍譜ニハ此宛書通ナリ」

「義久公御譜中」

「案文有之」
「朱カキ」
「名護屋御留守之兼江」

今度唐人之儀被仰付、既武庫父子被致渡海候之上、拙者亦名護屋可參由承候之條、即應其儀候、定數年之在京故、

國家雖令困苦、各以熟談、高麗へ之見次、并なこや在陳

京都之調其外執代等、又者船手之儀、夜白無油断可指上

事頼入候、當家一難儀相及事眼前候、然處不入精仁有之

者、任京儀可致其成敗候、併各於入内心之間可心易候、

然時者捨遠慮可扱者也、仍狀如件、

天正廿年五月四日

龍伯

本田右衛門佐殿

新納旅庵

山田越前入道殿

稅所越前守殿

鎌田出雲守殿

本田因幡守殿

川田參河入道殿

新納武入道殿

「此書、旧時之写と宛書異同有之、爲參考写置候也、川田ハ川上之誤歟と考らる」

「正文在町田家忠倍譜中」

覺

(龍伯)
(花押)

- 一進上斛之事、付大豆之事、
 - 一代米之事、
 - 一高麗・名護屋・京都見次之事、
 - 一軍衆立かさミの事、
 - 一夜白談合可入精事、
 - 一被仰付御下知ニりくつ可申仁ハ、籠者をもいたし、稠急ニ可扱事、
 - 一耕作無油断可申付事、
 - 一舟作未進之諸所、糺明之事、
 - 一反米人別徳役米、かり賣地首尾之事、
 - 一返地配當可急事、付眞最すましき事、
 - 一諸所上所領、可相糺事、
 - 一右之條々、不事濟内ハ、爲何自用有といふ共、歸宅すましき事、
 - 付、皆究而の後ハ、拙齋・肱枕・利安・鎌雲事ハ、
 - 二番替ニ二人宛、在鹿兒島たるへき事、
- 天正廿年五月四日
- 「正文在加治木衆城權右衛門」「久保公御譜中ニ在リ」
- はるかにひさしくをしうつり候へハ、いよく御めつら

しくこそ候へ、くにもとよりのふね共、一そうものほり候ハて、こゝかしこかりふねにて、やうくきのうかうらい國ふさんかいと申どころまで御わたりなされ候、われらも御とも申候、くにくの大ミやう小ミやう、いづれもく舟をかさり、われもくとうち渡られ候に、ちんふねにて事をくれになりたち、とまりくにてさへも、忍ひくにまかりとをり、ちぢんのおそれをなしわつらひ候、まことにあはれをとゝめたる事に候、なかく申もおろかに候、やかてくミやこのことくまかりとをり候間、おいくたよりをもとめ申こし候へく候、又八郎・長満へもにはやう心え候てたまはり候へく候、かしこ、

「朱カキ」
「文祿元年」五月四日

隅州くり野うち城
さいしやうどの 又一郎
まいる申たまへ

「義弘公御譜中」
「正文在加治木衆城權右衛門經秀」

その、ち日數になり候へハ、子共いづれもくめつらしくこそ候へ、くにもとまかり出候みきりより、こんどのちんたち、よいいとゝのをりかたく存候つれ共、つもり

の舟共いまにのほり候ましきとハ夢にてもおほえず候、
名護屋より壹岐へもちんふねにて、供衆五六人めしつれ
まかりわたり候、それよりハいつれのうらくも船と、
めのよし候て、賃舟などの儀もなりかねて、しきね藤
左衛門尉ふねにて久保つ海^{「本マ、」}せしめ、我等ハくによりかへ
米こき候加治木よりの五まいほにて、つしまへわたり候、
中くとも衆なとめしつれ候事ならず候、國くにの大ミヤ
う小ミヤう舟數をかさり、われもくと打わたられに、
かり船の事にて時分をくれ、諸くん衆の跡になり候間、
こ、かしことまりくしのひわつらひ、あはれをと、め
たる事にて候、ことさらつしまよりかうらいふさんかい
と申候ところに、きのふまかりつき候、と中より風あら
く、うミのおもてくらやミになりて、ふね共こなたかな
たはしりちり、われも人もゑい候事筆にも及かたく候、
又一郎殿船にもやうくけさこそたつねあひて、名こ屋
と壹岐ハ十里ほとも有へく候、壹岐と對馬ハ三十里、對
馬なたるり三十五里程と申候、それよりかうらいふさん
かいと申みなとハ四十八里といひ候、かのわたりくの
舟心ち、とかく可申様なく候、ふさんかいと申候在所ハ、
八万間と聞をよく候つる、見え候ふんハ家數百程あるへ

きと見え候、弓前なれ候ハてはたらきなどの事ハ、手に
もたち候ハぬよし候、かうらいの事ハなによりもたやす
く、今月中にあいすむへきときこえ候、追付今日四日國
中のやうにまかり出候間、おいしくたよをもとめ申こ
し候へく候、就中又八郎長満むすめ心得あるへく候、外
山ふうふ・大しん・とうかうおは・おちさんこ女な共、
其外細所定衆・かうしんふうふ、其外めしつかい候上中
下、りうしなきやうにほうくう候へと申たく候、又きね
んの人衆いつれへも、從其心得憑入候、よろつ申度事ハ
兩山はかり候へ共、打出候みきりに候へハ、海きハのす
なの上にて、火をともしかき候間、まつく筆をさしお
き候、よろつめてたき由、さきくより可申候、かしこ、
「朱カキ」
「天正廿年」五月四日

宰相殿

よし弘

883

任風便企一書候、仍其地之船一圓不參候而、拙者壹人
遅陣ニ罷成、迷惑之至候間、賃船を以、卯月廿七日對
馬名室之湊より、任順風漸今月三日ニ高麗ふさんかい
ニ罷渡候、此地之事、先手之衆ふさんかひを始、城と
餘多責崩、近日都可事濟由申散候、同四日ニ船ニ而都

江入、河口ニ押かゝり、夜昼先々江可尋行覺悟ニ候、
 一毛利壹岐守殿者、こもかひ口といふ所江着陣之由申候、
 亦中途船ニ而尋申候得者、ちやはんと申城を被取卷候
 處ニ、無程落去ニ付、都江被取入由申候、如何様ニ候
 而、毛利壹州江可尋逢候哉、七日八日或十日路程爲
 押隔事ニ而茂候ハ、國廣道筋餘多ニて候半俣、終ニ
 行逢事罷成間敷候、是茂遅陣故ニ候事、
 一今度御唐入ニ付、軍役可相調由、老中談合を以承候處
 ニ、今船壹艘茂不參、御家御國ヲ傾ル迄ニ候事、
 一龍伯様御爲、御家之御爲ヲ存知、身命ヲ捨、名護屋江
 茂能時分ニ參候得共、船延引之故、日本一之遅陣ニ罷
 成、自他之失面目、剩先之様仕合可惡事覺悟之前ニ候
 得共、別条ニ可仕様無之候間、公儀之御使ヲ待、菟
 茂角茂可罷成意ニて、無念千萬候事、
 一萬一先之様仕合茂あへしらいニ而、御宥免之儀共候ハ
 、國元見次之事、涯分精ニ被入候而可然候、先手之
 衆者米其外用意存分ニ有之候得共、我々者國元無見次
 而者相續ましく候、此心遣茂遅陳故ニ候事、
 一あまりく遅陳迷惑ニ而、五枚帆ヲ壹艘借出候而令乘
 船、去月對馬わたりヲ渡候、誠ニ小者者人ニて鎗ヲ五

本共不持、高麗迄渡候事、淺間敷爲躰涙もと、まらん
 仕合ニ候、船着とまりニ而茂、身を忍ふ様ニ候事、吳
 々國元噉ヲ恨入候事、
 一安宅殿下向を以、種々精ニ被入、替米をも大概可相調
 様ニ承候而、三兵芳情之短筆ニ難尽候、彼在國中、又
 八郎所よりも折々音信可有之事、
 一旅庵此中より辛勞申候、涯分安宅殿江令入魂、諸事ニ
 肝煎肝要ニ候事、
 一各如存知、常住我々地躰之事、先年 上様薩州江御動
 座之時、命ヲ被助置刻、二ヶ國餘令拜領、京都江茂壹
 萬石被下、諸士之中別而辱御詞ヲ被加、殊ニ名物肩衝
 を始、種々御高恩深重ニ候条、自然之折節者何様ニ茂
 御奉公可申心懸ニ候處、今度船依無參着、日本一之遅
 陳ニ罷成、累年之心懸茂無ニなり候事、生々世々口惜
 次第ニ候事、
 一久保事、無吳儀令同心、尤珍重ニ候事、
 一又八郎其外子共之事、肱枕ヲ頼入候事、
 一銀子少々所持候茂、替米之返辨ニ遣候、殘候茂船賃ニ
 成候間、一圓無之候而、不如意千萬ニ候事、
 一山田理安・鎌田出雲別紙を以可申候得共、任急便無其

儀候、心得可被申候事、

一大炊兄弟別而奉公申候、餘ニ船延引之間、大炊事ハ壹岐江召置、舟肝煎ニて、爰許江者久右衛門吉人召列候、船不自由之故、任世なども壹岐江殘置候而、此地船追付候供之衆茂なく、誠ニ不興千萬ニ候事、

一重言ながら、大閣様江御奉公何様と存候處ニ、此心懸茂無ニ罷成、遅陣候事御糺明之時、如何様成科ニ茂あり候はん存計ニ候、

龍伯様無御存知事ニ、逆心之者共より仕崩さる、迄ニ候、逆心ヲ企候者之事、後日顯然可申候事、

「文政元年」

五月五日

義弘

(川上忠智)

肱枕

まゐる

新武入・左京無何事奉公申候半、鎌田出雲・藏人無恙候哉、白坂美濃・周防・菱刈大膳・藏人・新次郎・軍三郎堅固ニ奉公申候、伊勢弥八郎・彌九郎・任世勇健ニ候、一々別紙を以可申候得共、急便候間、肱枕より心得可被申候、各涯分留主之儀頼入候、

「正文在山川士濱崎倉松」「義弘公御譜中ニ在リ」

渡唐船一圓不廻候之条、彼舟にて高麗江渡海候船頭、粉骨無比類候、仍可加褒美之間、歸國之刻、栗野へ可罷出候、仍狀如件、

天正廿年

五月六日

義弘(花押)

伊勢長門入道殿

885

「正文在本田作左衛門官親」

渡唐船一圓不廻候之条、彼舟ニ而高麗へ渡海候船頭、粉骨無比類候、仍可加褒美之条、歸國之刻、栗野へ可罷出之旨可申聞候、仍狀如件、

天正廿年

五月六日

義弘(花押)

本田紀伊入道殿

886

「御文庫二番箱義弘公二卷中」「義弘公御譜中ニ在リ」

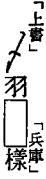
明日就陣替、別儀たるへきと存候、各之儀ハ不存、拙者ハ先其分申付候、次夜前右馬・幸侃御出ニ付而、彼是申承令満足候、何も先陣ニて可申承候条、令省略候、恐々

謹言、

「朱カキ」

「文政元年」五月八日

清正(花押)



御返報

清正

加主計

887 「正文在新納氏」

御出陳以來者無音罷過、所存之外候、誠長々其地へ辛勞「鹿兒シマヲ指玉カレ」

可爲御窮屈候、雖然近日御引陳之様ニ、此元申散候、必「是月三日至釜山浦御左右、十日申木野船ヨリ知レケド、栗野迄ハ知レサルニヤ」定候者、武庫様御父子之御左右、即刻示預度候、尙重「朱々キ」而可申談候之間、不及細筆候、恐々謹言、「天正廿年」

五月廿四日

拙齋老 御宿所

又八郎 「自栗野所賜書」 忠恆(花押)

「此御書、忠元譜中ニ在リ」

888 「義久公譜中」

文祿元年壬辰夏之孟、殿下秀吉公已下向肥前州名護屋、

龍伯亦爲參候于其地、五月八日、未時首途於鹿兒島、西

時到着於伊集院、同九日、午時發於伊集院、申時到於申

木野矣、十八日、申木野湊之船從朝鮮國歸着曰、義弘主

父子無恙到着釜山浦、仍去六日書簡帶來也、

文祿元年五月廿三日、連日有逆風無順風、以故祈順風於

申木野諏方大明神以神樂、且復爲法樂詠一首、

「此本在御文書方」

夕す、みさ山をろしにさそはれて

つなきし船の出るミなど江

龍伯

文祿元年五月廿六日、午時解纜於申木野、揚遠帆於順風、

迨日暮到着上飯島也、

同月廿九日、未明出船於飯島、同夜五更著樺島之岸矣、

六月二日、辰時解纜於樺島、發於櫓聲行船之際、忽逆風

起而不得行船、僅經二里許之海程、繫野母之湊也、同四

日、未明解纜於野母、酉時到於澤瀉「澤瀉」、海潮不順、仍繫此

海岸矣、同五日、未明解纜、不留船於平戸、揚船帆於順

風、海路無事未時著名護屋之岸矣、即達到著旨於安宅三

郎兵衛尉、由茲稱石田治部少輔殿使、安宅三郎兵衛尉來

于旅宿、即日往治部少輔殿陳所、據禮詞以太刀一腰・白

銀二枚・米二百石也、安宅三郎兵衛尉亦昇米五十斛、又

往大谷刑部少輔殿、述禮詞以太刀一腰・白銀三枚也、

同月六日、石田治部少輔・大谷刑部少輔・増田右衛門尉

・木村常陸介・羽柴藤五郎已下七將就朝鮮國渡楫、今朝

解纜所渡壹岐島也、

同月八日、自薩摩至名護屋諸船、悉以糺之、船奉行長東

大藏殿・石川兵藏殿・今一人、共三人見記帳面也、

小西行長聞于加藤清正之進南大門、則使生捕之練于泳游者二十餘人、速赴南大門到大川、悉流散河中及近邊之舟筏、清正未知如此之巧、抵掌撫劍馳志於王城、馬蹄如飛臨大川、而見之則湍流聒々驚耳、廣十餘町、清正察其不可徒涉、上下于河邊以求船筏、而無之、又尋淵瀨之可涉地、而是亦未嘗有之、不得如之何、陣于河畔而費其日也、五月十日、行長向王城到東大門欲入、而關門堅鎖、石壁高聳、門之高也十餘間不得敢入、或人謂行長曰、若開門傍之水門、則或五十人或百人其可得入乎、行長從之、然而水門方五尺以鐵打焉、行長以下心屈、時木戶作右衛門脫鐵炮臺、以其筒推爇之、則水門得開、行長令軍士曰、莫亂列、莫濫貪、莫入酒家、而後整衆以入遍見王城內外、而無一人之有敵兵、行長使從兵分守四門矣、五月十一日、清正之先陣到于王城、令開于南大門、守者答曰、小西攝津守行長昨日已入王城、俾余曹守四門、若有要事、則可入五三人、於多兵者固可禁之、其人歸而言之、清正憤恚尤甚、曰、今也入王城何益之有乎、不如追

國王王子、陣于城外聚家臣相議曰、吾志欲先驅而入都、故破 秀吉之制法而不顧、然而被巨川隔、而行長既入矣、吾心焚蒸憂懼不安、吾將追國王太子、明朝進發、則追及若其難乎、今夜亥時吾必可出兵矣、因是家人皆整軍備、少焉召莊林軍人佑密告曰、速可聚兵焉、然後清正率兵、而潛所以進發也、已歷數日、過咸鏡通到兀良哈境、而不知國王之所逃去、雖然王子兄弟后宮以下聞在會寧城金五是即國城女直與朝鮮之封疆、所稱宋之徽宗皇帝也、之告、則清正謂、是實自天所以與吾、疾進其地發闐聲放鐵炮飛羽箭、宛如疾風雷電、從王子來敗羸之兵數百人無少休憩、水穀不入口四五日、故手足不起精神太疲、不有可一戰之念、是以不得防禦、已以請和、清正諾之、且遣使曰、吾今馳追及之、君豈得逃乎、宜人清正之陣、王子之近臣應之曰、日本大將若助王子、則可遇對、若不助之、則於此地而王子自裁而已、清正重告曰、豈安殺乎、王子速來我陣、則懇請 秀吉、而必繼其命、且兩國會盟修好結暱如前古乎、王子何懼之有、縱雖不然、而必王子之命無危矣、我言非僞、依是王子心情和悅、使人言之曰、頃日我及臣從飲食絕口、清正宜入此壘而饗我、然則厚惠豈有如此者哉、又言曰、清正勿率多兵而至、唯十人許而可也、清正謂、外邦之人其誠否不疑乎、故率數

百人各令持饗應之具、而至以東方爲太子座、以西方爲清正座、有拜答之禮、威儀肅整事畢設膳羞、酒既三巡、時清正從臣爲配佳肴奔走者多矣、王子之臣從俄驚謂、清正誣王子而將害之、即彎半弓向清正欲發之、清正叱之、語音不通、故彌進、清正殆危、然而不知所可爲焉、清正漸謂、中華以印章結約盟、因取其印貼紙而投與之、且握王子以爲質、既而得靜、清正捕朝鮮太子臨海君肆、次子須和君瑋、懷歡而送之於京城、馳書於名護屋而告 秀吉公、此時國妃與王子同去、侍婢不多、類係一物而覆面、其物一尺許、蓋牛脯也、先驅將捕之、清正曰、勿視顏面、勿侵犯、勿觸犯、遂爲不知之、而贈飲食、乃使逃行、朝鮮人畏清正之威勇、且感其有情、雖然後陣亂入、發朝鮮王先祖墳墓、賜 協指 冶工 及黃金五千兩矣、

諸將於京都決評議、分兩道令進發、加藤主計頭清正已向東北平咸鏡道、小西攝津守行長向西北征平安道、陣平壤舊都、所以相從之士、對馬侍從、有馬修理大夫、松浦刑部卿法印、大村新八郎、五島若狹守及行長弟小西主殿助、大村右衛門尉、共從兵二萬餘人、設陣於六個所、號行長之陣於本營在中央、遠京城百五十里、此間築傳城、大友豊後守義統二個所、黑田甲斐守二個所、毛利右馬頭之先手小早川筑前守、吉川左衛門尉、柳澤氏是等三箇所、共七個所之要害、高壘深隍爲久遠設施矣、

890

『大口篤原氏藏』

坪付

薩州牛山院大口之内

大田名 岩城次介先
壹段 長町

永代買

已上

文祿元年六月吉日

新納武藏入道
爲舟(花押)

「燒キレ」

891

『上原氏家藏』

坪付

日州求仁院志布志之内

一 永泰寺先
伊屋松門

三反九畝 大丸

一反五畝 地蔵免
同処

貳反 山の口

壹段 山乃くち

七畝拾歩 松か迫

一反七畝 同処

二反 同処

一段五せ廿五口 北の迫

貳反 同処

一反四畝 同処

已上一町七段八畝五歩

天正廿年六月吉日

(本田)

三清

(平田)

歳宗

(町田)

久倍

(伊集院)

幸侃

(島津)

忠長

上原筑前守殿

892 「御文庫廿二番箱十一卷中」「写アリ」「義弘公御譜中ニ在リ」

覚

一手前請取代官所之内ニ御座所於有之者、其代官留守申

付、其郡之物成納可入置事、

一法度以下事、其請取之代官所之内、手前と堅申付、

百姓以下可召直事、

一扶持方事、手前代官所之内を以可下行、遠路相越候間、

下々中食是又可被遣事、付代官不仕衆にも、其手前く

兵糧可相渡、組々衆不相替可爲一陣事、

一高麗都方大明國境迄、つなきの城々普請、爲先衆申付、

其代官くとして在番可仕事、

一其地罷越、物主共つかひ女持可申候、即女之ふちかた

可被遣由、被仰付候事、

以上

天正廿年六月三日 御朱印

黒田甲斐守とのへ

毛利壱岐守とのへ

(上書)

御朱印写

黒田甲斐守とのへ

毛利壱岐守とのへ

893 「御文庫廿二番箱十一卷中」「写アリ」

先懸備之事

一七千人

一五千人

(行巻) 小西彌津守

(余義忠) 對馬侍従

一 三千人
 一 貳千人
 一 千人
 一 七百人
 合壹万八千七百人

松浦刑部卿法印(鎮忠)
 有馬修理大夫(晴忠)
 大村新八郎(嘉忠)
 宇久大和守(五島) (純玄)

一 壹万人
 一 壹万二千人
 一 八百人
 合二万二千八百人

加藤主計頭(清正)
 鍋島加賀守(直忠)
 相良宮内大輔(頼忠)

一 五千人
 一 六千人
 一 二千人
 一 壹万人
 一 二千人

黑田甲斐守(長政)
 羽柴豊後侍從(大友義統)
 毛利吉成守(吉成)
 羽柴薩广侍從(義弘)
 高橋九郎(元德)
 秋月三郎(種長)
 伊藤民部大輔(祐兵)
 嶋津又七郎(豊久)

一 四千八百人
 一 三千九百人
 合八千七百人

福嶋左衛門大夫(正則)
 戸田民部少輔(氏忠)
 蜂須賀阿波守(家政)

一 三千人
 一 五千五百人
 一 七百人
 合九千二百人

羽柴土佐侍從(家康) (元德)
 生駒雅樂頭(親正)
 來嶋兄弟

一 壹万人
 一 千五百人
 一 二千五百人
 一 八百人
 一 九百人
 合一万五千七百人

羽柴小早川侍從(隆景) (小早川秀包)
 羽柴久留米侍從(立花宗茂)
 羽柴柳川侍從(直忠)
 高橋主膳正(廣門)
 筑紫上野介(毛利秀元)
 羽柴安藝宰相

合貳万五千人

都合十三萬人

右一日宛番替、先懸可仕候、

右先懸之儀者、三組之者一日替ニ被仰付候而、可成其意

同次之備

候、其次ニ備如書立、次第ノ無由断相動、大明國可成

程可申付候、猶以渡海人數、追々可相詰旨被仰出候、日本弓箭きひしき國にてきへ、五百千ニ而、如此不殘被仰付候、皆共者多勢にて、大明之長袖國へ先懸仕候而、無御心元も不被思食候、早速可申付事肝要候、猶石田治部少輔・増田右衛門尉・大谷刑部少輔可申候也、

天正廿年六月三日

黒田甲斐守とのへ

羽柴豊後侍従とのへ

毛利老岐守とのへ

羽柴薩門侍従とのへ

894

「川上左近將監久辰譜中」
「朱カキ」
「川上久國自作之文也」

文祿元年、秀吉公征罰朝鮮、四月、義弘主・久保主駕籠籠渡釜山浦、已赴都城、三州之諸將私船私糧、故後其期者多矣、久辰五月渡海、即赴王畿、纔六十人經廿日行程已過半途、六月十五日、攀深山峻嶺、然敵數千競來降矢口者如雨脚、我卒束手防戰、于時急雨降而火繩皆消滅、因茲敵得勢近進放矢、久保城助・久保休六・西郷四右衛門・奈良迫讃岐・久保宗次郎・有村孫左衛門・三兵

衛・吉六・藤太・稻彌太・又十郎・彦十郎・源八・牛之助・助八郎、拾五人戰死、久辰蒙疵者十三所、凌山岨都地赴清州至小早川隆景陳、寨主乃美孫兵衛・同新四郎憐之加保養、而令屬歸國之軍卒送釜山之湊、自是歸帆、七月初至覽島益加療治、諛方之頭屋督私亭懷頭、翌年正月、詣朝鮮國唐島勞軍務、官糧不足故一日一飯、

895

『曾於郡止上社』『清水北辰社ニアリ』

御神領

坪付

上 一段七口

下 五畝十口

中 一反三畝

下 一反一畝

諏訪免

宮之前

北辰免

おと九かてん

北辰免

宮田

諏訪免

國まつ

田數三段九畝十七口

天正廿年六月吉日

谷口安房介殿

896

「御文庫三番箱宝鑑中」「義久公御譜中寫在田中藤次兵衛トアリ」

如芳墨、其以後者久不能書信、御床敷存候之処、來簡本

望候、殊生糸二斤送給候、毎々欣悦之至候、抑高麗之儀、早速平均珍重、別而御馳走之段推量申候、將又久保内儀、此節御上之由、遠境御苦勞共候、就其自然於爰許相應之儀、聊以不可存疎意候、委曲友枕齋迄申候間、不能詳候、猶期後音候也、

「御禮」朱カキ
「文政元年」六月九日

嶋津入道殿（義久）

（花押）「照高院如雪御判」

「御文庫四拾九番箱中」

猶々御息女之事吳々可御心安候、拙者請取申候、不可有御氣遣候、次ニ雖輕少之至候、扇十本進之候、誠御音信之驗迄候、又御歸國之刻ハ、めつらしき御兒御同道之由、かくれなく候、于今御寵愛無別儀候哉、一咲々々、

三月十八日之芳札、六月三日令披見候、誠久不申承、御床敷存候、唐入ニ付御肝煎尤候、就其義弘・久保渡唐、去二月廿六日之由、遙々蒼海陳勞令察候、就中御息女被差上之候之由、條々承候、毛頭之不可存疎意候、乍憚可被任置候、隨分馳走可申候、此方之儀不可有御氣遣候、至京都御上候者、新造をも節々御息女之御伽ニ申付可越

置候、可御心安候、無由断趣、友枕齋可申下候、至大坂爲御見廻、則差越使節、御意之趣無如在由申候、新造同前ニ御音信申候、將又金子廿目給候由、御懇志之程令祝着候、并彼領知方之儀、義弘以口入先可成御勝手間之事者、五町之分毎年金子一枚可有御上之旨、御懇望ニ付、堪忍之躰候、相積未進之儀者、數年御難澁、餘々歎ケ數次第与云、當時隱遁不肖之身上、洩底御存之前候間、以連々御恠言可申与申事候キ、然者只今旦御上候躰、少分之内ヲ又被寄事左右不足、殊更外聞人口可申様無之候、此段事外之御せんさくにて手間入、御同心之事にて、先相究候事ニ候条、せめて義弘之口入之筋目、無相違之様可被仰付候、か様之立入たる比興、併々所行与存候、堅被仰出、今度之不足之分・當年分、右之趣無御違反おのほせ待入候、如此書中誠々憚千万、更非可申題目候へとも、別而御心安申承候故、不願令申候、書中御披見之後、則火中所仰候、猶友枕齋可申下候、恐々謹言、

六月九日

（花押）「龍山公御判也」

龍伯

御返事

竜

一 去程ニ名護屋ニハ東國・北國・五畿内之軍兵、松平家康ヲ始トシテ、関白秀吉ヲ守護シ、高麗ノツナキトシテ名護屋御番也、九州ニハ修理太夫嶋津義久ノ乙名比志嶋紀伊・伊集院下野・本田刑部、其外東郷安房ヲ召ツレ、名護屋ニ詰メ候之処ニ、義久ノ郎等梅北、一揆ヲシテ左敷ノ城ヲ賣ヲトシ、其由ヲ義久ニ早使ヲ以テ通シ候、覚悟ノ外ノコトナレハ、義久モ大キニ驚キ、其使ヲ擲取、石田殿ニ付、関白様ニ梅北カ文ヲ封ノマ、上被成候時、御前ニ淺野彈正有合取合ヲ、龍伯功者ト申、ケ様ニハ申間敷候、其故ハ兵庫頭父子、伊集院ヲ召ツレ高麗ニ渡リ、龍伯ハ乙名共召列名護屋ニ詰メテ居、龍伯申程アラハ、ケ様ニハ有間敷候、世間ノ取沙汰ニモ、嶋津ハ損スル事ニテ無候と、彈正ノ取合ニテ、関白ハ我モケ様コソ思食、龍伯ニ國許ニテ梅北ヲ成敗シ、名護屋ニホセヨト仰セ被成候、其ヨリ梅北ノ一類國元ニテ成敗被成、名護屋上ル也、龍伯御歸宅被成、田尻荒五郎山ノ寺ふもとニテ成敗被成候て濟申候、是モ比志嶋紀伊ノ分別よく候て、すむやうニ沙汰申候、

文祿元年六月九日、獻鷹於 殿下矣、細川幽齋依奔走、諸事仕合越尋常矣、同月十一日、從 近衛殿有使者、賜單衣二領、使者古川氏也、同月十二日、長東大藏殿・石田李頭殿已下俾一价仲禮詞也、
候名護屋本營見 殿下、而後上達朝鮮國渡楫之故、於此之時亦有進獻、因茲賜朱印 内書、記左、

「正文在文庫」「義久公御譜中」「朱印ノ内書也」

朝鮮國渡海ニ付言上、殊白糸卅斤到來之、悅思召候、猶石田木工頭可申候也、

六月十二日

○「御朱印」

嶋津修理大夫入道とのへ

「義久公御譜中」

「此本在御文書方」

名護屋にて詠之、子細あり、
千種さく野邊の中にもむらさきの
いろむつまじき花の一もと

「義弘公御譜中」

薩摩之士梅北宮内左衛門尉國兼・田尻但馬守父子、文祿元年後于義弘父子欲渡于朝鮮國之路、留滯于肥前平戸之際、變心忽企一揆、催聚與黨欲破卻肥後、而各返乘船、但馬者著松波瀨、國兼者著佐敷、六月十四日、國兼乘入佐敷城定陣營、遣從兵攻八代城、但馬父子者放火松波瀨去、而欲破卻小川之際、松浦筑前者元薩摩州人輕卒也、在此地、運籌策致防禦、殺戮但馬・同荒次郎・荒五郎以下其黨百餘人、而後入八代城警衛者堅矣、是以國兼之士卒不得陷、而退佐敷之路、於赤松太郎爲求麻葦北之士卒、悉以所屠殺矣、

文祿元年六月十八日之台書賜加藤主計頭・鍋島加賀守、而所以傳達于義弘也、台書之寫記左方、

「在御文庫廿二番箱十一卷中」「義弘公御譜中ニ在リ」

急度被仰遣候、今度嶋津家中之者、不出陣族相改被遣候処、其内梅北宮内左衛門尉与申者、遲渡海之儀令迷惑、佐敷邊企一揆之由、義久名護屋ニ相詰、則言上候、爲御成敗即刻御人數被差遣候、然者爲留主居者、梅北可刎首由、義久も申遣候、兵庫頭有其地無心元可存候条、如右

「御文庫廿二番箱十一卷中」「写アリ」

御人數被遣候間、早速可爲御成敗候条、心安可存通可申聞候也、

六月十八日 御朱印

加藤主計頭とのへ(清正)
鍋島加賀守とのへ(直茂)

急度被仰遣候、今度嶋津家中之者、不出陣族相改被遣候之處、其内梅北宮内左衛門尉と申者、遲渡海之儀令迷惑、企佐敷邊一揆之由、義久名護屋ニ相詰、則言上候、爲御成敗即刻御人數被差遣候、然者爲留守居者、梅北可刎首之由、義久も申遣候、兵庫有其地無心元可存候条、如右御人數被遣候間、早速可爲成敗候間、心安可存通可申聞候也、

六月十八日 御朱印

- 羽柴東郷侍従とのへ(長谷川秀)
- 前野但馬守とのへ(長應)
- 木村常陸介とのへ(家忠)
- 加藤遠江守とのへ(三成)
- 石田治部少輔とのへ(三成)

増田(長盛)右衛門尉とのへ

大谷(音隆)刑部少輔とのへ

905 「此書在御文書方」「義久公御譜中ニアリ」

態致啓上候、一揆大將梅北宮内左衛門事成敗仕、其外二百余討果之由、昨今從限本申來候、則注進狀寫進之候、雖然向後のためニ候間、私等父子御人數之儀ハ、先ト肥後へ罷通候、猶追而可得御意候、恐惶謹言、

「朱カキ也」
「文應元年」
六月十九日

淺野彈正
名乘在判

嶋津龍伯公

人と御中

906 「御文庫二番箱義弘公二卷中」「義弘公御譜中ニ在リ」

伊(伊樂院忠棟)右入其外各へ以別紙雖可申候、今朝被仰出、明日罷下候、依之以外取亂候、此書狀可被見候、義久

同道申、我等罷下候事候間、不可有御氣遣候、以上、御渡海已來不申通候、不得便風故候、

一各高麗へ被罷越候前後之衆、切々御注進候、雖然從御手前者、一度も被申入候事無之候、未無御渡海之由、從高麗被申越候方も候、是も諸篇御由断之故候、其段

我々堅申明候、

一梅北・田尻惡逆之様子、前後從龍伯可被仰送候間、□不申候、此說一兩日已前ニ、我等迄承候間、則入御耳候、其二日跡ニ佐敷之城取候由、從方々御注進候、せめてもの御仕合にて、義久御家相かゝり候欤、則彼惡逆人爲御成敗、淺野父子・伊藤長門、鉄炮頭四人可差遣候、無差陳已前ニ、彼兩人佐敷之城にて討果、頭參候、

一彼惡逆人一類爲御成敗、義久令同道、我等ニ薩州へ可罷越之由被仰出候間、明朝罷立候、我々御注進次第、給地をも被仰付候て、各御ため可然様御沙汰候て、可被仰付之由候、いつ方へも御國をもくれ候ハんと沙汰ニ候、近比目度儀候、猶具上申候、龍伯可被仰越候間、不能詳候、恐々謹言、

「朱カキ」
「文應元年」六月廿日
玄旨(花押)

嶋兵

御陣所

玄旨

幽齋

「御文庫二番箱義弘公二卷中」「義弘公御譜中ニ在リ」

猶と爰元委申上度存候へ共、明日薩州へ罷越付取亂
申候間、此旨能く御披露所仰候、急何と申上候哉、
可被成御免候、已上、

御渡海已後切と可申上處、不得便宜御無沙汰、可被成
御免候、

一 梅北宮内・田尻荒兵衛逆意段、兼日 龍伯様被聞召付、
即以幽齋被上聞達、二三日已後於肥後佐敷表罷越、定
色申候処、加藤計留守居衆打果候、就其彼妻子等爲御
成敗、龍伯・幽齋明日至薩州御越候、今度者兼而之儀
上付、御家相應申候、於様躰者、從龍伯様可被仰越候
条不具候、

一 大薩之義、此新御檢地可被仰付由、上意にて候、是又
様子從義久可被仰越候条不委候、

一 惣別御法度むきと在之故、右通事出來候、高麗渡海之
人數にて候、遲參爲躰中く沙汰限にて候、

一 從其方一度も御注進無之故、武庫様父子義者高麗へ無
御渡海など、於此方取沙汰在之由候、上様御次之間

ニても被申衆在之処、幽齋御渡廻被申達候、於京都度
と任世へも申入候処、無是非候、

一 爰元様子從龍伯様可被仰越候条、不能子細候、恐く謹

言、

「朱カキ」
「文祿元年」

六月廿一日

麻植善左衛門尉

長通(花押)

伊勢雅樂入道殿

「義弘公御譜中」

文祿元年六月、秀吉謂、朝鮮既破矣、大明多兵可來救者
不可疑焉、然則我兵之既渡海者雖十三萬、而其或難敵乎、
故又使兵士六萬渡海、増田右衛門尉長盛其兵二千、石田
治部少輔三成其兵二千、大谷刑部少輔吉隆其兵二千五百、
前野但馬守長康其兵一千、凡一萬七千二百人爲一列、淺
野左京大夫幸長其兵三千、南條左衛門尉其兵千五百、中
川右衛門大夫秀政其兵三千、凡一萬五千五百人爲一列、
岐阜少將其兵八千、羽柴丹後少將其兵三千五百、長谷川
藤五郎秀一其兵五千、木村常陸介其兵三千五百、糟屋内
膳正其兵二百、片桐東市正直盛其兵二百、凡二萬五千五
百人爲一列、伊達政宗依淺野彈正長政、而請朝鮮渡海之
事、秀吉許之、副淺野幸長而使渡海也、長盛・三成・
吉隆持 秀吉之書、到朝鮮示在陣之諸將、其趣曰、軍兵

之進退彌宜今春之所命焉、先陣者行長・清正・長政相代可勤之、其餘軍制如前日所定耳、凡百諸士不敢怠惰、橫行于朝鮮大明、儼其武備正其制法而可也、諸將之侵伐、吾不勞遐想、所以使石田三成・増田長盛・大谷吉隆彌傳吾命也、

文祿元年、小西攝津守行長雖著數度之軍功、而恨不捕王子、故與清正有隙、行長屯于平壤舊都謂、大明兵來、則一戰功成歟、奮戰而死歟、吾心在此二者而已、乃遣人于京城諸將曰、渡鴨綠江直入大明最容易焉、諸將若爲後援、則吾必可爲前鋒也、諸將皆對曰、慶尙・全羅兩道之殘城固守而不降、是大敵在前矣、今也輕渡鴨綠江不亦危乎、不如運糧籌而先平全羅道、行長聞此言甚怒焉、乃使僧玄蘇裁書以告朝鮮王李哈曰、日本與大明構兵革、是似不敵也、然而秀吉之命也、豈可違乎、夫吾國混一之後國饒民殷、既無奪國之望、況有貪財之意乎、秀吉欲伐大明者爲報怨也、朝鮮介于兩國之間、是故路經朝鮮、朝鮮若屬麾下、則何攻屠乎、然其不屬之、而完郭郭黎民黎以拒我兵故今如此、聞大王欲屯于鴨綠江、吾鳴鼓而攻之在近耳、書至、李哈大驚、馳羽檄于大明而乞援兵、晝夜絡繹、大明帝及諸臣皆駭曰、倭犯朝鮮窺中國、此二百年

來所未見者也、速出援兵而可也、然而頃年兵革屢起頓兵ツカハラズ羸師、故不知所出也、李哈乞援不已、於是遼東巡按李時學・遼陽守道荊州俊受大明帝之命、遣遼將祖承訓史備、備爲遊擊、率精兵三千人渡鴨綠江以救朝鮮、

909 「新納忠增日記」

(本日記ハ一〇一九号ト同文ニツキ省略ス)

910 天正廿年五月八日日記

一五月八日、未刻鹿兒嶋御打立、此晚景伊集院江西刻過御着、御假屋江御宿、地頭御會尺なさる、上并甚六御座江被參、

一九日、午刻伊集院御打立、湊にて代官御會尺被申上、夫々頓而御打立にて、申木野江申刻御着也、今晚玄齋御會尺、

一十日、此日從市來抱節祇候ニ而、頓而羽嶋江御着之儀、御内儀被申上、此日北郷一雲江被成 御書、此日安宅三爲使帖佐彦左衛門尉祇候、并齋藤源介從名護屋參、高麗之樣躰被申上、此晚羽嶋より御出船之首尾相替、申木野湊方 御出船ニ相定、片浦江書狀被遣也、

十一日、寺嶋江爲磯遊御光儀、申刻御歸鞍、此晚村田藤太郎殿元服、御太刀一腰・五百疋・御樽二荷進上、從 御前太刀・馬拜領、

十二日、高江地頭樽一ツ進上、各於 御前御酒被下、十三日、抱節御申有、御供衆皆々振舞にて、終日大御酒、此日伊十院方使者進上、此日京衆一人被參、樽一ツ進上、有馬丹案内者也、

十四日、隈城地頭御酒進上、

十五日、此晚瀬戸口安房介、別而御臺被上、御供衆ニも振舞有、

十六日、此晚玄齋御臺被上、暮ニかゝる迄の御酒也、此日旅庵被參、

十七日、旅庵鹿兒嶋の如く爲御使被越、此日市來湊江桶殿の舟の落着有テ、出船ニ相定、此晚御舟參、

十八日、此日御用有テ老中江御書御遣也、此日又御舟の造作相替なり、此夜半過、串木野湊の舟高麗方歸着、高麗人六七人召つれ參候、武庫様御兩殿とや、高麗江御着ニ而、右六日の御書參候也、

十九日、此晚抱節・玄齋ニ御寄合、鹿兒嶋方も御酒參候て、各御とをりあり、

廿日、此日串木野城内口と被成御覽、此日安宅三方の書狀到來、高麗の儀など委細書面ニ有、

廿一日、此日 御座舟爲御覽、湊江御光儀有、御舟江めされ候之条、少く御酒進上、御幕始而の儀とて、船頭別而御酒進上、

廿二日、御座舟造作無尔との条、御供衆方夫丸銘と指出、材木とり候て、此日者別而造作候事、

廿三日、御出船之御祈念とて、當所諏方大明神へ御神樂有、此日又御歌茂あそはされ、御寶納有也、

廿四日、御舟の儀ニ付、利安・税越被成祇候、

廿五日、此日者明日御出船有へきとて、御物少く舟本へくたさる、此晚玄齋に御臺上させらる、

廿六日、午刻串木野御出船、暮かた上飯江御着岸、飯島方假屋江御宿有ける、地下沖邊御遠舟餘多參、此夜より地下役人衆皆御見廻被申、

廿七日、御舟心地又天氣無尔と候故御逗留、此日名護屋江早舟可被遣談合有、此日申刻、當飯島方被致參上、御太刀・鳥目式百疋并飯酒進上、此晚網子泊と申湊御一見有、

廿八日、拂曉徳永對馬守出船仕、此朝抱節飯酒進上、

又 御舟江の御供衆御檢進上、皆と御とをりニ被參、
此晚飯嶋方御飯被上、御酒宴有、御座ニ而御腰物拜領、
地下衆小川筑前守塩田御とをりニ被召出、

一廿九日、未明ニ御出船、一里程ニて夜明也、そこ迄飯
島方案内者として御供被申、かは嶋へ者此夜三番鳥ニ
御着岸、夜入かた方もや深き故、嶋たてにく、候て迷
惑之刻、地下より小船さし出し御案内者申候也、彼人
所へ申候て被成御宿、

一六月朔日、此日ハ無順風、かは嶋江御滞在、磯江御指
出、終日御遊覽有、

一二日辰刻、かは嶋御出船、此日ハ北ノ風ニなり候故、
二里程之間野母の湊江塩か、り有、此日御手やすにて、
野母方の在所又藏徳寺与申寺など御一見有、此夜ハ磯
江御一宿有、日かへし迄なり、

一三日、此日茂無順風故、昨日御一見候藏徳寺江早朝御
出、御宿なさる、

一四日、此日未明ニ野母を御出船なされ、酉刻おもたか
と申村の前ニ塩か、り有、

一五日、未明ニ御出船、平戸一里こなたまで、本田新介
・徳永對小船にて被參、石田殿方御急の条と候之故、

平戸御見物もなく、直ニ御乗船候也、此日未刻名護屋
江御着岸、やかて安三江案内被仰、さ候へは治少より
爲御使安三被參、夫より頓而石田殿江被成御礼、太刀
一腰・銀子二枚并米二百斛被進之、安宅三江五十斛、
此日生麻吉左江御案内として使者被進之、此夜安三御
宿江參候て夜をあかさる、又替米のりくつ夜た、しく
候之假、彼是ニ付 上様も御枕ならず候也、此日大谷
殿江太刀・銀子三枚、

一六日、此朝壹岐嶋江渡海之衆石治少・大谷刑・増田右
・木村常・羽柴殿・今兩人以上七人、此日高麗江も御
狀、又鹿兒島江も御狀可被遣由候て、御判の物有、此
日麻吉被參、

一七日、此日幽齋老御陣屋江爲御礼入御有、
一八日、此日朝普請有之也、此日薩州方參候諸舟、皆

舟奉行衆日記ニ付候而、長東大藏・石川兵藏・今一人
以上船奉行三人也、此晚秋月宗閻江御寄合、

一九日、此日 大閣様江御鷹御進上、細川幽齋御取成ニ
而御仕合能由候、此日舟の懸引有之、薩厂船高麗江渡
海之儀相定、此朝普請有之、

一十日、此朝生麻吉左御假屋江被參、やかて飯御寄合有、

此日高麗江御音書有之、此晚宗閨はなしとて深更迄御座候由、此朝も普請有、

十一日、此日京より圖書頭殿御狀到來、やかて便宜候之間、鹿兒島江被遣候、此日又圖書頭殿三清へ御書被指登、此日 近衛殿様より御使あり、古川名字の人も、御帷子二ツ御拜領、此日松井佐渡守方馬一疋被進上、

此使江帷子二ツ被遣之、中間江茂島目被下、此晚はしり候舟の儀ニ付船奉行よりくつ、夜更方迄なり、此朝も普請有之也、此日高麗方繪圖參候て、御覽有之、

十二日、長東大藏殿江御使者、沈香三斤被遣也、石田李頭殿江も同前、祝物者帷子三被遣也、長東殿内衆ニて候哉、前波九介与申人江五色糸一斤被遣也、長東殿船奉行にて候、其下を九介喫候之間、如此何れも 御書有、九介江者役人書狀也、此日ハ日普請有、

十三日、朝普請有、此朝施藥院江御使被遣祝物有、やかて返礼之使有之、一樽一荷被持せ、此晚幸侃の舟之儀六ヶ敷候得共、夜半程ニ事濟候事、此晚市成掃部兵衛尉大坂方爲御使被罷下、やかて被罷出、

十四日、此朝茂普請有之、此日從大坂之御樽參、